

平成 24～26 年度科学研究費補助金 基盤研究（C）（課題番号 24531130）研究成果報告書

ESD としての音楽鑑賞授業 実践ガイドブック

「ESD としての音楽鑑賞指導ガイド」（中学校音楽・高等学校芸術科音楽編）
授業実践事例（高等学校芸術科音楽編）

平成 27 年（2015 年）3 月

研究代表者 宮 下 俊 也

（奈良教育大学大学院 教育学研究科 教授）

はじめに

本書は、平成 24 年度から平成 26 年度にわたる 3 年間、日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究 (C)「ESD を目指す高等学校芸術科音楽の鑑賞教育カリキュラムと実践事例の開発」(課題番号 24531130) として行ってきた研究成果を報告するものです。

我が国において「人材こそが資源」であることは、東日本大震災によって強く再認識させられました。教育が人材育成であることは言うまでもないことですが、今日、それは日本のみならず、全世界、そして宇宙までも視野に入れた「持続可能な社会づくり」に貢献できる人材の育成であると考えます。このことは、芸術教育、そして音楽鑑賞領域の教育にあっても等しく言えることでしょう。

芸術を愛好する心情や豊かな情操、感性、創造性、芸術文化についての理解などは、学習者自身が生涯にわたって幸せな人生を送るために必要な能力です。しかしそれらの能力は、自分の幸せばかりではなく、社会の幸せづくりのためにも生きて働くものでなくてはなりません。環境教育、平和教育、人権教育、国際理解教育などは、そこで育成する能力が社会貢献に直結していることは理解しやすいのですが、芸術教育や音楽鑑賞教育で育成する能力もまた社会貢献につながっているものであり、そのつながりをしっかりと見据えた授業を構成し、能力育成を果たしていなければなりません。これは 21 世紀の世界を生きる人材育成としての責務です。

本研究は、持続可能な社会づくりに貢献できる人材育成としての音楽鑑賞教育の在り方を問い、具体的な実践事例を提案するものです。つまりそれは、ESD (「持続可能な開発のための教育」: Education for Sustainable Development) としての音楽鑑賞教育の提案です。

本ガイドブックは、現行学習指導要領における中学校音楽、及び高等学校芸術科音楽で求めている指導内容を ESD の視点から再検討し、指導内容のすべてが ESD の対象になり得ること、そして、それを高等学校において実現するための実践方法を 14 の事例によって示しています。日々、より優れた音楽鑑賞教育をめざして努力を重ねられている先生方にとって、少しでもお役に立てれば幸いです。

平成 27 年 (2015 年) 3 月

研究代表者 奈良教育大学大学院 教育学研究科 教授 宮下 俊也

研究メンバー一覧 (平成27年3月31日現在)

研究代表者

宮下 俊也 奈良教育大学大学院教育学研究科 (教職大学院) 教授

研究分担者

臼井 学 国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部
教育課程調査官
(平成26年度)

大熊 信彦 群馬県総合教育センター 研究・研修主監 (平成24・25年度)

研究協力者 (五十音順)

大熊 信彦 群馬県総合教育センター 研究・研修主監 (平成26年度)

島田 聡 群馬県立館林女子高等学校 教諭

多賀 秀紀 奈良女子大学附属中等教育学校 教諭

原田 博之 宮城教育大学 准教授

水口 俊彦 宮城県立支援学校岩沼高等学園 校長

宮本 由紀乃 青森県総合学校教育センター高校教育課 指導主事

山内 尚 宮城県多賀城高等学校 主幹教諭

目次

はじめに	3
研究メンバー一覧	4
本ガイドブックの構成と利用の仕方	7
第1章 ESD の概念と、21 世紀の教育・音楽教育においてESDを推進していくことの意義	9
1. ESD とは何か	11
2. 国立教育政策研究所による ESD のまとめ	12
(1) ESD の視点に立った学習指導の目標	12
(2) 「持続可能な社会づくり」に関連する概念等と構成概念の関係	13
(3) ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度(例)	15
3. 「ソウル・アジェンダ」に見る世界の芸術教育の方向性と ESD	17
4. 米国における芸術教育・音楽教育の方向性と ESD	19
5. 日本における今後の教育施策と ESD	20
(1) 第2期教育振興基本計画	20
(2) 「21 世紀型能力」と ESD	21
6. 音楽教育において ESD を推進していくことの意義	23
第2章 中学校音楽・高等学校芸術科音楽における「ESD としての音楽鑑賞指導ガイド」	25
1. 学習指導要領における鑑賞領域の指導内容と ESD の関係	27
(1) 中学校音楽・高等学校芸術科音楽における鑑賞領域の指導内容	27
(2) 各指導内容で求めるねらい	28
(3) 各指導内容から導くことのできる「ESD として獲得を期待する力」	30
2. ESD としての鑑賞教育を実現するために意識すべきこと	31
(1) 教師の意識化	31
(2) 生徒の意識化	31
3. ESD として鑑賞教育を実践するための方法	32
(1) 思考すること	32
(2) 思考させるテーマ	33
(3) 評価の在り方	35
4. ESD としての鑑賞教育の構造	36
5. 教科指導としての ESD において留意すべきこと	37
(1) 「インフュージョン・アプローチ」としての教科指導	37
(2) 「なんでもあり」からの脱却	38
(3) 道徳教育との境界線	38
6. 「ESD としての音楽鑑賞指導ガイド」	39
第3章 高等学校芸術科音楽における ESD としての鑑賞授業事例集	44

事例の見かた	45
事例一覧	46
事例1 直感で音楽を捉える ―未知なる音との出会い―	47
事例2 「うたのおねえさん」 ―今と昔―	53
事例3 楽器の壮大な世界！	59
事例4 音楽を愛好する理由	65
事例5 全体と部分	75
事例6 音楽文化の発信・伝播・多様性	81
事例7 イメージすることの意味 ―ドビュッシーの作品を通して―	86
事例8 音楽自分史を作ろう	91
事例9 音楽が社会に果たす役割は何だろう？	97
事例10 音楽が伝えてくれるもの	102
事例11 人間と音楽との関わり ―「祈りの音楽」を通して―	109
事例12 文楽の三業一体から日本人の感性を考える	115
事例13 日本の伝統をつたえる ―京鹿子娘道成寺に見る日本の音楽文化―	121
事例14 楽譜から作曲者のメッセージを読み解く ―聴き味わうこととともに―	127
事例についての問い合わせ先	144
第4章 ESDとしての音楽鑑賞教育についてまとめた学術論文	145
論文1 「ESD(持続発展教育)としての音楽科教育 ―中学校鑑賞領域の場合―	147
論文2 「ESDとしての音楽鑑賞教育 ―指導内容と対応させた授業プランの開発と実践―	159
おわりに	171
付録	173

本ガイドブックの構成と利用の仕方

本ガイドブックは次の4章によって構成されています。

第1章：ESDの概念と、21世紀の教育・音楽教育においてESDを推進していくことの意義

音楽鑑賞教育とESDの研究を経て得られた知見をわかりやすく説明しました。第4章に掲載した論文の内容に即し、教育現場の先生方が実践をイメージできるように書き表しています。

第2章：中学校音楽・高等学校芸術科音楽における「ESDとしての音楽鑑賞指導ガイド」

現行学習指導要領における中学校音楽・高等学校芸術科音楽の指導内容とESDの関係を整理しました。そして、ESDとしての音楽鑑賞授業をするための手引きとなる、「ESDとしての音楽鑑賞指導ガイド」を掲載しています。

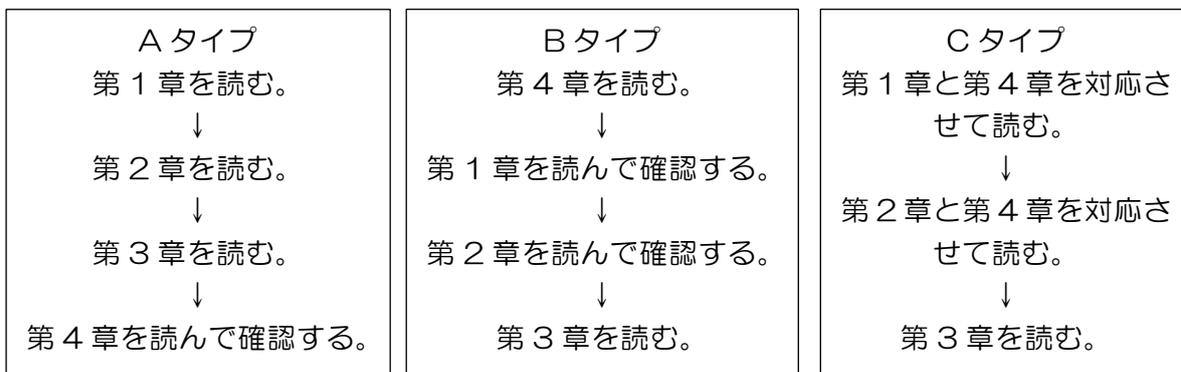
第3章：高等学校芸術科音楽におけるESDとしての鑑賞授業事例集

第2章でまとめた「ESDとしての音楽鑑賞ガイド」に即した高等学校芸術科音楽における鑑賞授業の実践事例を掲げています。

第4章：ESDとしての音楽鑑賞教育についてまとめた学術論文

本ガイドブックの作成過程を含む、本研究全体の成果をまとめた既発表論文を掲載しています。関連先行文献も示しています。

本書の読み進め方として、次の3タイプがあります。



第 1 章

ESD の概念と、21 世紀の教育・音楽教育において ESD を推進していくことの意義

この章では次のことを提示します。

1. ESD の概念と ESD で育成する能力・態度
2. 今後の世界における芸術教育の方向性を示した「ソウル・アジェンダ」と米国カリキュラム
3. 今後の日本の教育において育成する資質・能力
4. 音楽教育を ESD として推進していくことの意義

第1章 ESD の概念と、21 世紀の教育・音楽教育において ESD を推進していくことの意義

1. ESD とは何か

ESD (Education for Sustainable Development) は、これまで「持続発展教育」や「持続可能な発展のための教育」と訳されてきましたが、平成 25 年 5 月より「持続可能な開発のための教育」として統一されました¹。

今日、世界を見渡してみると、自然災害、テロや紛争、貧困、環境汚染、経済不安など、環境、平和、平等、幸福、資源といったものが「持続不可能」な事態に陥っている状況が多くあります。芸術文化についても、財政難の煽りを受けた国立文楽劇場の存続問題、600 年以上も続いてきた奈良市大柳生町「太鼓踊り」の後継者不足による中止など、持続が途絶えたり、途絶える危機に直面したりしている例が見られます。

「持続可能な開発」(Sustainable Development=SD) とは、「将来の世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、現在の世代のニーズを満たす開発、社会づくり」(国連ブルントラント委員会, 1897)、「人間を支える生態系が有する能力の範囲内で営みながら、人間の生活の質を向上させること」(IUCN/UNEP/WWF, 1991)²と定義されています。そうすると、「持続可能な開発のための教育」(ESD) は、SD のための教育、つまり SD を意識し、そのために行動して貢献できる人材育成ということになります。

国立教育政策研究所は、ESD の目的を「環境的視点、経済的視点、社会・文化的視点から、より質の高い生活を次世代も含む全ての人々にもたらすことのできる開発や発展を目指す教育であり、持続可能な未来や社会の構築のために行動できる人の育成」としています³。また、多田 (2010) は「多様な人々とともに、対立や相互理解の難しさを超え、新しい価値の発見や創造ができ、また、当事者意識をもち、主体的に行動できる」⁴ことを ESD で求める能力としています。さらに、2013 年に閣議決定された「第 2 期教育振興基本計画」では「現代的、社会的な課題に対して地球的な視野で考え、自らの問題として捉え、身近なところから取り組み、持続可能な社会づくりの担い手となるよう一人一人を育成する教育 (持続可能な開発のための教育: ESD)」⁵の推進を掲げています。

ESD は、2002 年に南アフリカ共和国で開催された「持続可能な開発に関する世界首脳会議」(ヨハネスブルク・サミット)において、日本が提案した「持続可能な開発のための 10 年」(Decade of education for Sustainable Development=DESD) が発端となっています。現在も世界各地で様々な教育的取組みがなされており、2014 年 11 月には「ESD に関するユネスコ世界会議」が日本で開催され、今後への後継プログラム「ESD に関するグローバル・アクション・プログラム」(GAP) が公式に発表されました⁶。

¹ 文部科学省国際統括官付文書「Education for Sustainable Development (ESD) の訳語の取扱いについて」(文部科学省国際統括官付 平成 25 年 5 月 2 日 教委 129-12)

² 以上、国立教育政策研究所教育課程研究センター (2012)「学校における持続可能な発展のための教育 (ESD) に関する研究」[最終報告書], はしがきより。

³ 同上。

⁴ 多田孝志 (2010)「学校における ESD の進め方」『中等教育資料』, No. 895, 文部科学省, p. 22

⁵ 閣議決定 (2013)「教育振興基本計画」, p. 50

⁶ <http://unesdoc.unesco.org/images/0023/002305/230514e.pdf> (2015. 3. 10 確認)

またそれに先立って、同年10月8日の参議院予算委員会では、安部晋三内閣総理大臣がその世界会議への決意を述べ、下村博文文部科学大臣は、今後も引き続きESDの促進のための施策充実に取り組み、すべての小中学校で何らかの形でESDの実践をしていくことが課題であると答弁しました。これらより、今後も21世紀の教育として、ESDは世界の教育の重要な位置を占めて実践されていくものと思われます。

2. 国立教育政策研究所によるESDのまとめ

日本におけるESD研究として、実践・研究に大きな示唆を与えているものに、国立教育政策研究所教育課程研究センター（2012）『学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究〔最終報告書〕』（以下、国研（2012））があります。そこには国内外のESDに関する研究知見や、それらから導いた諸概念、ESDで求める能力・態度の例、さらに数多くの実践事例が掲載されています。2012年以降の実践を概観すると、その多くがこの研究成果を基盤にしていることがわかります。

そこで、この報告書に掲げられている重要な箇所をいくつか転載します。

（1）ESDの視点に立った学習指導の目標

国研（2012）は、「各教科等の授業の中でESDの視点に立った学習を展開することを前提」⁷に、ESDの目標を「持続可能な社会づくりに関わる課題を見だし、それらを解決するために必要な能力・態度を身に付けること」⁸と精選して示しています。そして、「ESDの学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組み」を以下のように図示しています（図1）。

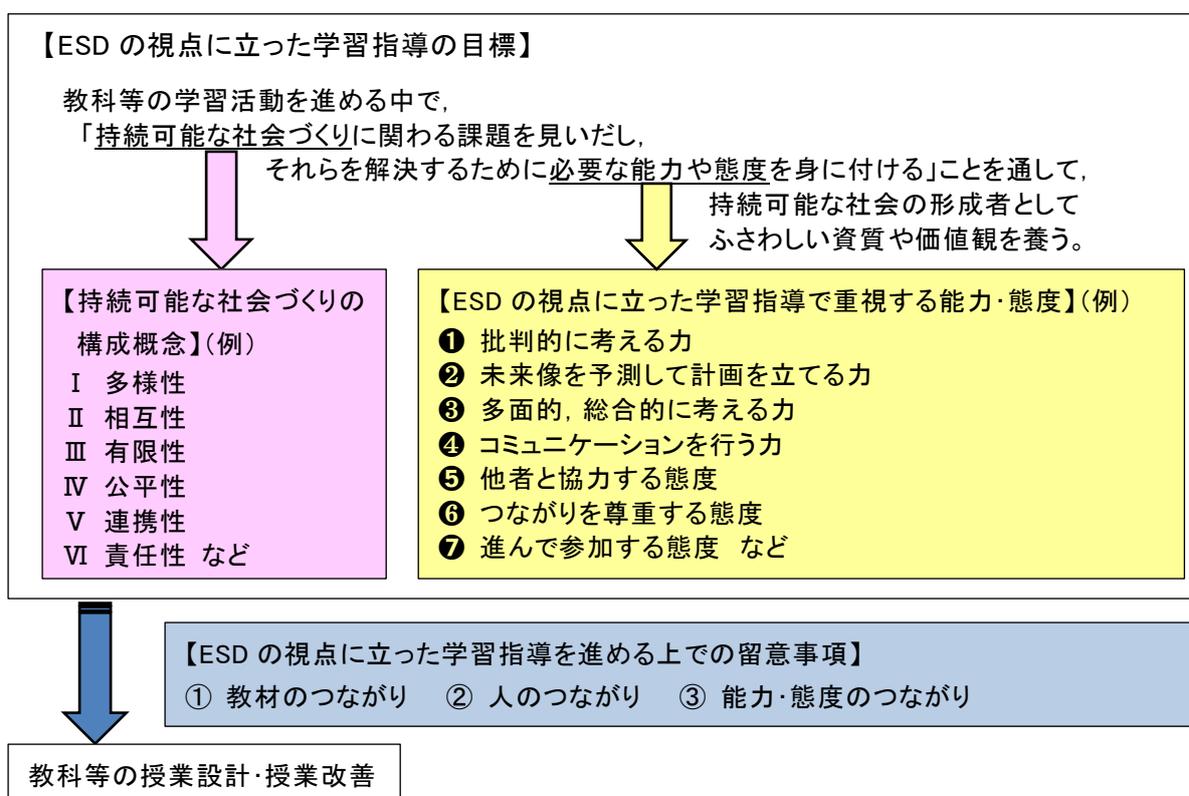


図1 ESDの学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組み 国研（2012）, p.4より転載

7 前掲書 2, p. 3

8 同上。

ここで重要なことは「教科等」と示されている点であり、音楽科（芸術科音楽）でもESDが可能になることを意味しています。

(2) 「持続可能な社会づくり」に関連する概念等と構成概念の関係

「持続可能な社会づくり」や、それに関連する概念は、各省庁や諸機関で様々に示されていますが、国研（2012）ではそれらを整理し、次の表1のようにまとめています。下線部は、芸術教育にも関わると考えられる項目です。

表1 「持続可能な社会づくり」に関連する概念等 国研（2012），p.4より転載（下線部、引用者）

	関連する概念等	関連するキーワード
わが国における「持続可能な開発のための10年」実施計画（関係省庁連絡会議，2006）	世代間の公平，地域間の公平，男女間の平等， <u>社会的寛容</u> ， <u>貧困削減</u> ， <u>環境の保全と回復</u> ， <u>天然資源の保全</u> ， <u>公正で平和な社会</u>	共生 循環 平衡 <u>相互関連</u> システム <u>多様性</u> <u>多面性</u> 有限性 <u>将来性</u> 限界 寿命 時間変化 保全 人権 生命尊重 健康保持
持続可能な開発のための教育10年推進会議 ESD-J(ESD-J，2006)	<u>人間の尊厳</u> ， <u>社会的・経済的に公平な社会</u> ， <u>将来世代への責任</u> ，人は自然の一部， <u>文化的な多様性の尊重</u>	生活水準 権利 平等 正義 機会均等 非排他性 公平 公正 自主 自律 責任 義務 <u>将来像</u> <u>意思決定</u> <u>市民性</u> <u>寛容</u>
ESD 資源レビューツール（英国教育技能省，2005）	相互依存， <u>市民性と積極的関与</u> ， <u>将来世代のニーズと権利</u> ， <u>多様性</u> ， <u>生活の質・平等・公正</u> ， <u>環境収容能力</u> ， <u>行動における不確実性と予防措置</u>	<u>行動</u> <u>変容</u> 相互依存 共存共栄 <u>連携</u> <u>協働</u> <u>調和</u> 非暴力 平和

さらに国研（2012）は、表1の概念等を「[1]人を取り巻く環境（自然・文化・社会・経済など）」に関連する概念と、「[2]人（集団・地域・社会・国など）の意思や行動に関する概念」に大別し、それらの各概念を、「①多種多様な要素からなる視点」「②互いに作用し合う視点」「③ある方向へ変化している視点」に沿って簡略に定義付けています（表2）⁹。これを見ると、[1]の「人を取り巻く環境」に「文化」が位置付けられていることがわかります。そして、これら6つの定義とその補足記述、関連する具体例などをまとめています（表3）¹⁰。下線部は同様に芸術教育に関わると考えられる部分です。

表2 「持続可能な社会づくり」の構成概念の関係 国研（2012），p.5より転載（下線部、引用者）

視点	① 多種多様な要素からなる視点	② 互いに作用し合う視点	③ ある方向へ変化している視点
上位概念 [1] <u>人を取り巻く環境</u> （自然・ <u>文化</u> ・社会・経済など）に関する概念	「 <u>多様性</u> 」	「 <u>相互性</u> 」	「 <u>有限性</u> 」
[2] 人（ <u>集団</u> ・地域・社会・国など）の意思や行動に関する概念	「 <u>公平性</u> 」	「 <u>連携性</u> 」	「 <u>責任性</u> 」

⁹ 前掲書2，p.5

¹⁰ 同上。

表2 「持続可能な社会づくり」の構成概念(例)

国研(2012), p.5 より一部改編して転載(下線部、引用者)

人を取り巻く環境 (自然・文化・社会・経済など) に関する概念	I 多様性	<p>自然・文化・社会・経済は、起源・性質・状態などが異なる多種多様な事物(ものごと)から成り立ち、それらの中で多種多様な現象(出来事)が起きていること。</p> <p>自然・文化・社会・経済は、それぞれの形成過程で様々な様相を見せ、多種多様な事物・現象が存在している。そうした生態学的・文化的・社会的・経済的な多様性を尊重するとともに、自然・文化・社会・経済にかかわる事物・現象を多面的に見たり考えたりすることが大切である。</p> <p>例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 生物は、色、形、大きさなどに違いがあること ◆ それぞれの地域には、地形や気象などに特色があること ◆ 体に必要な栄養素には、いろいろな種類があること
	II 相互性	<p>自然・文化・社会・経済は、互いに働き掛け合い、それらの中では物質やエネルギーが移動・循環したり、情報が伝達・流通したりしていること。</p> <p>自然・文化・社会・経済は、それぞれが互いに働き掛けあうシステムであり、それらの中では物質やエネルギー等が移動・消費されたり循環したりしている。人は、そうしたシステムとのつながりを持ち、さらにその中で人と人とが互いにかかわり合っていることを認識することが大切である。</p> <p>例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 生物は、その周辺の環境とかかわって生きていること ◆ 電気は、光、音、熱などに変えることができること ◆ 食料の中には外国から輸入しているものがあること
	III 有限性	<p>自然・文化・社会・経済は、有限の環境要因や資源(エネルギー)に支えられながら、不可逆的に変化していること。</p> <p>自然・文化・社会・経済を成り立たせている環境要因や資源(エネルギー)は有限である。こうした有限の物質やエネルギーを将来世代のために有効活用していくことが求められる。また、有限の資源に支えられている社会の発展には限界があることを認識することも大切である。</p> <p>例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 物が水に溶ける量には限度があること ◆ 土地は、火山の噴火や地震によって変化すること ◆ 物や金銭の計画的な使い方を考えること
人(集団・地域・社会・国など)の意思や行動に関する概念	IV 公平性	<p>持続可能な社会は、基本的な権利の保障や自然等からの恩恵の享受などが、地域や世代を渡って公平・公正・平等であることを基盤にしていること。</p> <p>持続可能な社会の基盤は、一人一人の良好な生活や健康が保証・維持・増進されることである。そのためには、人権や生命が尊重され、他者を犠牲にすることなく、権利の保障や恩恵の享受が公平であることが必要であり、これらは地域や国を超え、世代を渡って保持されることが大切である。</p> <p>例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 健康でいられるような食事・運動・休養・睡眠などが保証されていること ◆ 自他の権利を大切にすること ◆ 差別をすることなく、公正・公平に努めること
	V 連続性	<p>持続可能な社会は、多様な主体が状況や相互関係などに応じて順応・調和し、互いに連携・協力することにより構築されること。</p> <p>持続可能な社会の構築・維持は、多様な主体の連携・協力なくしては実現しない。意見の異なる場合や利害の対立する場合などにおいても、その状況にしたがって順応したり、寛容な態度で調和を図ったりしながら、互いに協力して問題を解決していくことが大切である。</p> <p>例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 地域の人々が協力して、災害の防止に努めていること ◆ 謙虚な心もち、自分と異なる意見や立場を大切にすること ◆ 近隣の人々とのかかわりを考え、自分の生活を工夫すること
	VI 責任性	<p>持続可能な社会は、多様な主体が将来像に対する責任あるビジョンを持ち、それらに向かって変容・変革することにより構築されること。</p> <p>持続可能な社会を構築するためには、一人一人がその責任と義務を自覚し、他人任せにするのではなく、自ら進んで行動することが必要である。そのためには、現状を合理的・客観的に把握した上で意思決定し、望ましい将来像に対する責任あるビジョンを持つことが大切である。</p> <p>例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 我が国が国際社会の中で重要な役割を果たしてきたこと ◆ 働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働くこと ◆ 家庭で自分の分担する仕事ができること

(3) ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度 (例)

ところで、ESDはどのような能力を育成するものなのでしょうか。国研(2012)では、まず、「わが国における DESD 実施計画」(2008)などで示された能力・態度を「生きる力」との関係で表3のようにまとめています。下線部は、芸術教育に関わると考えられる項目です。

表3 「生きる力」と ESD で重視する能力・態度との関係

国研 (2012), p.8 より一部改編して転載 (下線部、引用者)

	「生きる力」	わが国における DESD実施計画 (2008)	ESD-J (2006)	ESDツールキット(2002)	資源レビューツール<英国> (2005)	ESD の視点に立った学習指導で重視するものとして取り上げた能力・態度
確かな学力	思考力	<u>代替案の思考力</u> (批判力)	<u>自分で感じ・考える力</u> <u>問題の本質を見抜く力</u>	<u>批判的に考える力</u>	<u>批判的思考</u>	→ ①
	判断力					
	表現力	<u>コミュニケーション能力</u>	<u>気持ちや考えを表現する力</u>	<u>コミュニケーション能力</u>		→ ④
		体系的な思考力		システムをとらえる力 多様な探究過程を駆使する力	システム思考	→ ③
	課題発見能力		<u>望む社会を思い描く力</u>	<u>将来を予測・計画する力</u>	<u>未来思考</u>	→ ②
	問題解決能力		やり方からつくり直す力		問題に対処するスキル	
		情報収集・分析能力				
			環境容量を理解する力			
豊かな人間性	自律心		<u>自ら実践する力</u>	<u>行動に移せる力</u>	<u>行動スキル</u>	→ ⑦
	協調性		<u>協力して進める力</u>	<u>他者と協力して行動する力</u>		→ ⑤
	感動する心			<u>感覚的な反応を発達させる力</u>		
	その他	<u>多様性や非排他性などの尊重</u>	<u>多様な価値観を尊重する力</u>	<u>量・質・価値を区別する力</u>		→ ⑥

表4の①～⑦に対応

そして、ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度の例を表 4 のように示しています。下線部は、芸術教育に関わると考えられる項目です。

表4 ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度(例)

国研 (2012), p.9 より転載 (下線部、引用者)

ESD で重視する能力・態度		キー・コンピテ ンシー
① 批判的に考 える力 《批判》	<u>合理的, 客観的な情報や公平な判断に基づいて本質を見抜き, もの ごとを思慮深く, 建設的, 協調的, 代替的に思考・判断する力</u>	相互作用的 に道具を用 いる。 異質な集団 で交流する。 自律的に活 動する。
	例) ○ 他者の意見や情報を, よく検討・理解して採り入れる。 × 得られたデータや考え方を鵜呑みにする。 ○ 積極的・発展的に, よりよい解決策を考える。 × 消極的, 悲観的に考え, すぐに諦める。答えだけを得ようとする。	
② 未来像を予 測して計画 を立てる力 《未来》	<u>過去や現在に基づき, あるべき未来像(ビジョン)を予想・予測・期待 し, それを他者と共有しながら, ものごとを計画する力</u>	
	例) ○ 見通しや目的意識をもって計画を立てる。 × 無計画にものごとを進めたり, その場しのぎをしたりする。 ○ 他者がどのように受け取るかを想像しながら計画を立てる。 × 独り善がりにものごとを進めてしまう。	
③ 多面的, 総 合的に考 える力 《多面》	<u>人・もの・こと・社会・自然などのつながり・かかわり・ひろがり(システム) を理解し, それらを多面的, 総合的に考える力</u>	
	例) ○ 廃棄物も見方によっては資源になると捉えることができる。 × 役に立たないものは不要だと考える。 ○ 様々なものごとを関連付けて考える。 × まとまりがなく, きれぎれの見方をする。	
④ コミュニケ ーションを 行う力 《伝達》	<u>自分の気持ちや考えを伝えるとともに, 他者の気持ちや考えを尊重 し, 積極的にコミュニケーションを行う力</u>	
	例) ○ 自分の考えをまとめて簡潔に伝えられる。 × 他者の意見の欠点ばかりを指摘し, 自分の考えを言わない。 ○ 自分の考えに, 他者の意見を取り入れる。 × 他者の意見を聞こうとしない。	
⑤ 他者と協力 する態度 《協力》	<u>他者の立場に立ち, 他者の考えや行動に共感するとともに, 他者と協 力・協同してものごとを進めようとする態度</u>	
	例) ○ 相手の立場を考えて行動する。 × 自分のことしか考えない。 ○ 仲間を励ましながらチームで活動する。 × 身勝手な行動, 同調しない態度をとる。	
⑥ つながりを 尊重する態 度 《関連》	<u>人・もの・こと・社会・自然などと自分とのつながり・かかわりに関心をも ち, それらを尊重し大切にしようとする態度</u>	
	例) ○ 自分が様々なものごととつながっていることに関心をもつ。 × 自分のすぐ回りのものや直接関係のあることしか関心がない。 ○ いろいろなもののお陰で自分がいることを実感する。 × 自分は一人で生きていっていると思ひ込む。	
⑦ 進んで参加 する態度 《参加》	<u>集団や社会における自分の発言や行動に責任をもち, 自分の役割を 踏まえた上で, ものごとに自主的・主体的に参加しようとする態度</u>	
	例) ○ 自分の言ったことに責任をもち, 約束を守る。 × 無責任な行動ばかりで, きまりを守らない。 ○ 進んで他者のために行動する。 × 自分が得をすることしかしない。	

3. 「ソウル・アジェンダ」に見る世界の芸術教育の方向性と ESD

これまで、国研（2012）が示した ESD に関わる定義や求める能力・態度の例などを見てきましたが、芸術教育では ESD はどのように位置付けられているのでしょうか。

これまでの表中に下線を付した箇所は、それに関わる部分として読み取ることができますが、ユネスコが世界における今後の芸術教育の指針として 2010 年に示した「ソウル・アジェンダ」(Seoul Agenda: Goals for the Development of Education = 「芸術教育の発展目標」)¹¹を見ると、“Sustainable” という語は数箇所に見られ、内容的に ESD を強く求めていることがわかります。ソウル・アジェンダの各ゴールの翻訳は、それぞれのキーコンセプトとともに、第 4 章の論文、宮下・大熊（2013）「ESD（持続発展教育）としての音楽科教育－中学校鑑賞領域の場合－」に掲げていますのでご覧ください。その中で、ESD に関わる部分を抜粋して以下の表 5 に示します。

表5 「ソウル・アジェンダ」(2010)において ESD と関わる項目

Seoul Agenda: Goals for the Development of Arts Education (2010.7.13)	
ゴール1	芸術教育を、質の高い教育改善を実現させるための基礎として、また持続可能性をもたせるものとして保障すること。
1a	芸術教育は、子どもや青年、生涯学習を受ける人々にとって、創造性、認識、感情、美的感性、社会性のバランスのとれた発達の基盤となるものであると断言する。
	(i) 政策及び(人的・物的)資源の配置を制度化・実施することにより、次の諸局面への持続的なアクセスを保障する。
	(i)-1 ーあらゆるレベルの学校で学ぶすべての学習者のための幅広く全体的な教育の一部として、すべての芸術領域における包括的な芸術学習。
	(i)-2 ー地域コミュニティにおける多様な学習者のための、あらゆる芸術領域にわたる学校外での体験。
	(i)-3 ー学校内外における、デジタルや他の新しい芸術形式を含む学際的な芸術体験。
	(ii) 創造性、認識、感情、美的感性、社会性といったそれぞれの成長発達による相乗効果を高める。
	(iii) 芸術教育によって学習者の調和のとれた成長を保障するために、質の高い評価システムを確立する。
1b	芸術教育を通して、教育システムと構造の建設的な変容を促進する。
	(i) 芸術以外の学問分野において、芸術的、文化的側面を取り込んだ教育モデルの構築に取り組む。
	(ii) 教師と学校管理者に対して、芸術教育を通して創造的な文化を築くよう促進する。
	(iii) 芸術教育を適用したこれまでにない新しい教育学や、学習者の多様性を意識したカリキュラムの創造に取り組む。
1c	芸術教育において、芸術教育について、そして芸術教育を通して、生涯にわたる世代間の学習システムを確立する。
	(i) あらゆる社会的背景をもつ学習者が、幅広いコミュニティや制度的環境において、生涯にわたって芸術教育を受けることができるように保障する。
	(ii) 年齢層が異なる集団の中で芸術教育を受ける機会を保障する。
	(iii) 伝統的な芸術に関して知っておくべき事項を受け継いでいくために、年齢が異なる者同士の学習を助成し、世代間の理解を促進する。
1d	芸術教育を指導し、支持し、そしてその政策を進展させるための力量を確立する。
	(i) 芸術教育の政策立案過程において、周辺に追いやられた人々や恵まれない人々の集団の参加を含み入れた新しい芸術教育の政策改革を実現していくことのできる実践者と研究者の力量を形成する。
	(ii) 情報メディアとの関係を強化することにより、コミュニケーションと主張を拡充する。その際、意思疎通のために適切な言語を確立し、情報技術や仮想ネットワーク利用により国家及び地域における既存の構想を相互に結びつけていく。
	(iii) 芸術教育の価値に対する認識を高め、公的あるいは私的な場での芸術教育のサポートを促進するために、芸術教育が個人や社会にもたらす影響力を伝えていく。

¹¹ http://www.unesco.org/new/fileadmin/MULTIMEDIA/HQ/CLT/CLT/pdf/Seoul_Agenda_EN.pdf (2015. 3. 10 確認)。

ゴール2	芸術教育活動とプログラムは、理念的にも実践的にも、ともに質の高いものでなければならない。	
2a	地域のニーズ、社会基盤、文化的背景に対応し、誰もが合意した質の高い芸術教育のスタンダードを開発する。	
	(i)	学校やコミュニティにおける芸術教育プログラムを供給するために、質の高いスタンダードをつくる。
2b	芸術教育における持続可能なトレーニングが、教育者や芸術家、コミュニティにとって利用可能なものであることを保障する。	
	(i)	持続可能な専門技術学習の仕組みを通して、学校の教員（芸術専門であるなしに関わらず）、また教育に携わる芸術家に、必要な技能と知識を提供する。
2d	学校内外での芸術教育において、教育者と芸術家との協働を促進する。	
	(i)	学校がカリキュラムに芸術家と教師との協力体制を積極的に取り入れようとすることを奨励する。
	(ii)	地域コミュニティ組織が、様々な異なる学習環境での芸術教育プログラムにおいて、教師と協働することを奨励する。
	(iii)	様々な学習環境の中で、保護者や家族や地域のメンバーを積極的に巻き込むような文化的プロジェクトを作り出していく。
2e	様々な利害関係者及び産業部門間で、芸術教育のための協力体制づくりを積極的に開始する。	
	(i)	社会における芸術教育の役割を強化するために、政府内あるいは政府の枠を超えて、特に、教育、文化、社会、保健、産業などの部門間でのパートナーシップを構築する。
	(ii)	芸術教育の原理や、政策、実践を強化するために、政府、民間の社会組織、高等教育機関、専門的な学術団体の活動をコーディネートする。
	(iii)	財団や慈善団体などを含む私的な組織をパートナーとして、芸術教育プログラムの開発に巻き込む。

ゴール3	芸術教育の原理と実践を、今日の世界が直面している社会的・文化的な課題解決に貢献するために適用する。	
3a	芸術教育によって、社会が潜在的にもっている創造性や革新性を高める。	
	(i)	学校やあらゆるコミュニティでの芸術教育によって、個人の中にある創造的でこれまでにない新しいことを生み出そうとする潜在能力を育成し、また、創造的な市民としての新世代を育成する。
	(ii)	芸術教育によって、ホリスティックな(包括的な)社会、文化的で経済力のある社会に寄与するような創造的で革新的な実践を促進する。
	(iii)	クリティカルで創造的な思考の源として、コミュニケーションテクノロジーにおける新機軸を利用する。
3b	芸術教育にある社会や文化の健全化を果たす特質を認識し、発展させる。	
	(i) 芸術教育にある、以下のような社会や文化の健全化を果たす特質についての認識を促す。	
	(i)-1	－広範にわたる伝統的・現代的芸術経験の価値
	(i)-2	－芸術教育の療法や健康に関わる特質
	(i)-3	－文化の多様性や文化間の対話を促進するだけでなく、アイデンティティや遺産を発展させ保護することのできる可能性
	(i)-4	－紛争や災害の後に、そこから回復させることのできる特質
(ii)	芸術教育の専門家養成プログラムにおいて、社会や文化の健全化に関わる知識を身に付けさせる。	
3c	社会的責任、社会的結束、文化的多様性、異文化間対話を促進する上での芸術教育の役割を高め、それらを支援する。	
	(i)	学習者それぞれが持つ具体的な背景を理解することや、少数民族や移住者を含む学習者の地域との関連性に適応した芸術教育実践を促進することを優先する。
	(ii)	多様な文化的・芸術的表現についての知識や理解を促進し高める。
	(iii)	芸術教育のトレーニングプログラムを支援する中で、異文化間をつなぐ対話の技術、教授法、機材や教材を導入する。
3d	芸術教育を通して、平和から持続可能性に至る主要な世界的課題に対応する能力を育成する。	
	(i)	環境、地球規模の移民、持続可能な開発など、広範囲にわたる現代社会と文化の問題を踏まえた芸術教育活動に焦点をあてる。
	(ii)	芸術教育実践における多文化教育的な側面を拡大し、世界的視野を持った市民性を育成するため、学習者や教師が異文化間交流することを活発にする。
	(iii)	コミュニティにおける民主主義と平和を推進し、紛争終結後の社会の再建をサポートするために芸術教育を適応する。

これを見るとわかるように、芸術教育そのものにも持続可能性を求め（ゴール1）、特にゴール3では芸術教育の社会的貢献について掲げていることから、ESDとしての芸術教育が今後の世界に求められていることが読み取れます。そしてゴール3は、現在の日本の学習指導要領には求められておらず、実践されていないものと思われます。

4. 米国における芸術教育・音楽教育の方向性と ESD

ソウル・アジェンダを受けて、世界の芸術教育・音楽教育のカリキュラムや実践はどのように改革されているのでしょうか。ここでは2014年6月4日に示された米国の音楽カリキュラムを見てみます。

米国ではすでに、21世紀に求める能力「21世紀型スキル」(21st Century skills)を、いわゆる3Rsに加え、「批判的思考力と問題解決」(Critical thinking and problem solving)、「コミュニケーション」(Communication)、「協同」(Collaboration)、「創造力と革新」(Creativity and innovation)の4Csとして示しています（「Partnerships for 21st Century Skills」）¹²。また芸術教育では「National Core Arts Standards」(NCAS)が出され、ここでは「Creating」「Performing/Presenting/Producing」「Responding」「Connecting」の4つの柱を立て、それぞれの定義付けを行っています¹³。特に「Responding」を経て「Connecting」に至る過程は、ESDが求める資質・能力育成と重なるものと言えるでしょう（表6）。

表6 National Core Arts Standards Artistic Process and Anchor Standards より

National Core Arts Standards Artistic Process and Anchor Standards			
Artistic Process			
Creating	Performing/Presenting/Producing	Responding	Connecting
定義： 新しい芸術的なアイデアや作品を創造し、開発する。	定義： Performing： 解釈とプレゼンテーションを通して芸術的なアイデアや作品を理解する。 Presenting： 芸術的な作品を解釈して共有する。 Producing： 芸術的な作品を理解し、発表する。	定義： 芸術がどのような意味を人に伝えようとしているかを理解し評価する。	定義： 芸術的なアイデアや作品を、人間にとっての芸術の意味や芸術以外の物事と関連付ける。
Anchor Standards			
学習者は、 1. 芸術的なアイデアや作品を生み出し概念化することができる。 2. 芸術的なアイデアや作品を組織し開発することができる。 3. 芸術作品を洗練し完成させることができる。	学習者は、 4. プレゼンテーションに向けて芸術作品を選び、分析し、解釈することができる。 5. プレゼンテーションに向けて、技術を向上させ洗練させることができる。 6. 芸術作品についてのプレゼンテーションを通してその意味を伝えることができる。	学習者は、 7. 芸術作品を知覚し分析することができる。 8. 芸術作品における表現意図や意味を解釈することができる。 9. 芸術作品を評価するために自らの評価規準を適用することができる。=芸術作品を価値判断するための規準をもって評価できる。	学習者は、 10. 芸術を生み出すために、知識と経験を関連付けたり総合したりする。 11. 芸術を深く理解するために、芸術的なアイデアと芸術作品を、社会、文化、歴史的な文脈を携えて関連付ける。

ESD

¹² <http://www.p21.org/index.php> (2015. 3. 10 確認)

¹³ <http://nationalartsstandards.org/> (2015. 3. 10 確認)

そして2014年6月4日に出された音楽カリキュラム「New National Core Music Standards」では、各科目の下位に上記芸術教育の4つの柱を置き、さらにそれらの下位に計14項目を掲げ、それぞれに対する「永続的な理解」(Enduring Understanding)と「本質的な問い」(Essential Question)を掲げています¹⁴。これもまた、イメージをもったり、音楽をつくったり、分析・評価したりすることの先に、ESDと重なる「21世紀型スキル」の獲得を身に付けさせようとする方向性が窺えます(表7)。

表7 New National Core Music Standards の構造

科目	左科目それぞれの下位に	そのさらに下位に	左のそれぞれについて
○General Music	Creating	Imagine	Enduring Understanding: (永続的に理解させる事項) Essential Question: (本質的な問い)
		Plan and Make	
		Evaluate and Refine	
		Present	
○Music Theory Composition	Performing	Select	
		Analyze	
		Interpret	
		Present	
○Music Traditional And Emerging Ensembles	Responding	Select	
		Analyze	
		Interpret	
		Evaluate	
○Music Harmonizing Instruments	Connecting	Connect #10	
		Connect #11	
○Music Technology			

(以上、宮下 俊也)

5. 日本における今後の教育施策とESD

さて次に、日本におけるこれからの教育施策において、ESDがどう位置付けられているか、またどのような資質・能力の育成が求められているのかを概観しましょう。

(1) 第2期教育振興基本計画

周知の通り、平成18年に改正された教育基本法では、①知・徳・体の調和がとれ、生涯にわたって自己実現を目指す自立した個人、②公共の精神を尊び、国家・社会の形成に主体的に参画できる国民、③我が国の伝統と文化を基盤として国際社会を生きる日本人の育成が明確にされました。この教育基本法に基づき、平成25年度から5年間の教育上の方策を示したものが、平成25年6月に閣議決定された「第2期教育振興基本計画」(以下、「基本計画」)です。これはこの間の日本の教育の骨格を示す極めて重要なものです。

「基本計画」で示された重要な視点は、教育は「個人の人生を豊かなものにする」とともに、教育によって培った成果は、持続可能な社会形成に寄与するものでなくてはならない、つまり「持続可能な社会を創生するための人材育成である」ことです。

この「基本計画」には、4つの基本的方向性(4のビジョン)と、それらに基づく8つの成果目標(8のミッション)と30の基本施策(30のアクション)が掲げられています。4つの基本的方向性は、以下の通りです。

¹⁴ <http://musiced.nafme.org/musicstandards/> (2014.10.30 確認)

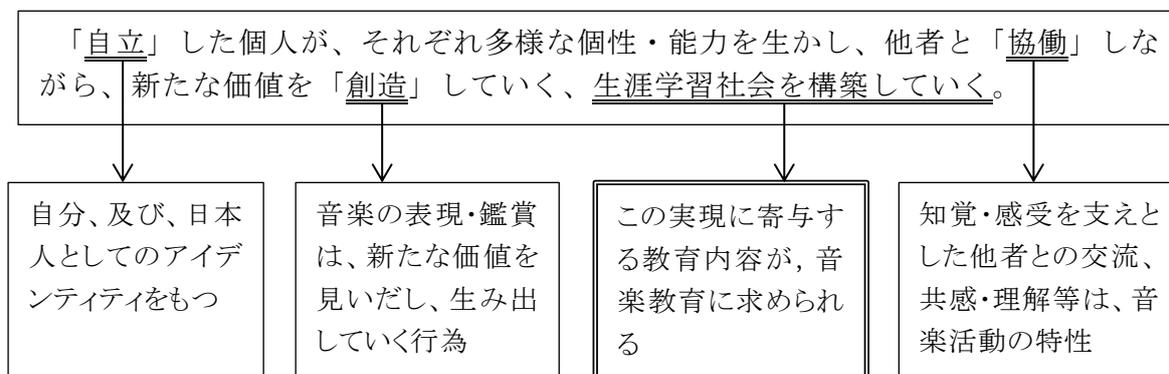
- ① 社会を生き抜く力の養成 ～多様で変化の激しい社会の中で個人の自立と協働を図るための主体的・能動的な力～
- ② 未来への飛躍を実現する人材の養成 ～変化や新たな価値を主導・創造し、社会の各分野を牽引していく人材～
- ③ 学びのセーフティネットの構築 ～誰もがアクセスできる多様な学習機会を～
- ④ 絆づくりと活力あるコミュニティの形成 ～社会が人を育み、人が社会をつくる好循環～

4つの基本的方向性、8つの成果目標、30の基本施策の中で、特にESDについては、「1.社会を生き抜く力の養成」の「成果目標3（生涯を通じた自立・協働・創造に向けた力の修得）」の「基本施策11」（現代的・社会的な課題に対応した学習等の推進）に、今後の学習の在り方として、持続可能な社会の構築のために「関わり」「つながり」を尊重できる個人を育成するように示されています¹⁵。

また、「基本計画」の特徴として、以下の3点が挙げられます。

- ① 多様性を基調とする「自立・協働・創造」が、計画全体を貫くキーワードになっていること。
- ② 小・中・高等学校などの学校段階において、生涯にわたる学習の基礎となる「自ら学び、考え、行動する力」などを育成し、「生きる力」を確実に育むこと。
- ③ 学校段階も含む生涯全体を通じて「社会を生き抜くための力」を身に付けること。

特に「自立・協働・創造」のキーワードについては、以下のように音楽教育との関わりを見いだすことができます。



（2）「21世紀型能力」とESD

さて、改正された教育基本法や「基本計画」の趣旨を学校教育において実現していく上で、今後の日本において育成が求められる資質・能力について、現時点で報告されている「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会—論点整理—」（文部科学省）や「教育課程の編成に関する基礎的研究 報告書」（国立教育政策研究所）が注目されます。これらの検討を通して一層明確化される資質・能

¹⁵ 前掲書 5, p. 18, pp. 50-51

力は、次期学習指導要領改訂に直結していくものと思われます。ここでは国立教育政策研究所のプロジェクト研究「教育課程の編成に関する基礎的研究」¹⁶がモデルとして提案した「21世紀型能力」について取り上げます。それは図2のように描かれています。

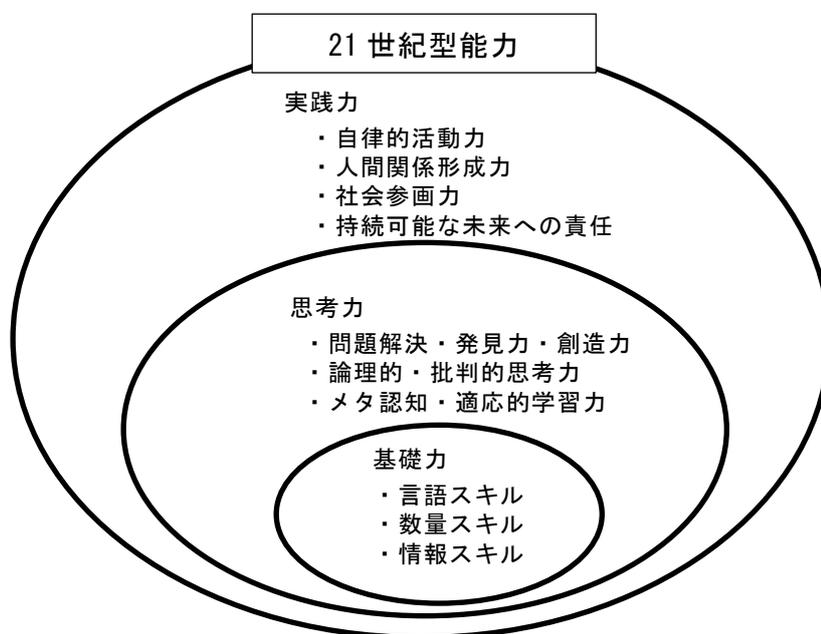


図2 21世紀型能力 国研(2013), p.26より
(国研(2013)の図では「持続可能な未来づくりへの責任」となっている。)

この図は、21世紀を生きるために必要な資質・能力は基礎・思考・実践の3つの円で重層的に捉えた学習指導によって育成されることを示しています。特に重要な点は、「基礎力」が「思考力」を支え、さらに、「思考力」の向かう先を「実践力」がガイドする、という関係にあることです。国立教育政策研究所のプロジェクト研究におけるこの考え方が、文部科学省の「育成すべき資質・能力の論点整理」¹⁷に大きく反映しています。

この三層の中で、ESDと直接的に関わると見られる層は「実践力」です。実践力について、国立教育政策研究所のプロジェクト研究では次のように捉えています。

「人は、自らが置かれた回りの世界と様々に関わりながら、自己の信念や価値観を吟味し、具体的な行為を選択し、その行為の結果を振り返って評価する。知識と思考力を実生活・実社会で活用し、いかに行為すべきかを決定し、実際に問題を解決していくための力が実践力である。」¹⁸

また「実践力」に内在する「社会参画力」と「持続可能な未来への責任」についてはこう述べられています。

¹⁶ 国立教育政策研究所(2013)「社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則」、教育課程の編成に関する基礎的研究、報告書5

¹⁷ 文部科学省(2014)「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会—論点整理—」, p.11

¹⁸ 前掲書15, p.89

「社会参画力は、これからの社会において、グローバルあるいはローカルな場面で起こりうる様々な倫理的問題に積極的に関わり、市民的責任を自覚して行動する力である。社会、命、自然から構成される。社会では、規範意識、社会連帯、文化尊重、公德心、権利・義務、勤労・就業力(employability)・起業家精神(entrepreneurship)、正義・公正、寛容などの能力や価値、命では、防災・安全(能力)、生命尊厳(価値)、自他の生命の尊重、自然では感動や畏敬など体験を通して育まれる価値を基盤として身近な自然から地球環境や生態系までの保護・保全に関わる能力や態度を育てる。これらを通して、社会のルールや倫理に従って行動し、日本及びグローバル社会の一員としての責任を自覚して行動する力を育成するとともに、様々な問題に協働して創造的に取り組み、新しい文化やよりよい社会を創る担い手となって持続可能な未来を拓く力を育てる。」¹⁹

この「21世紀型能力」は、各教科等において求める汎用的な資質・能力を表したものです。音楽教育においても、例えば「思考力」にある、批判的思考力、比較・関連付け、理由付けや判断力、また、問題発見・解決的思考力、創造的思考力などを、音楽学習の特性を生かして育成することや、その活動が生徒にとってリアリティのあるものとなるよう、授業の中に組み込んで実践していく必要があります。

また「社会参画力」では、例えば文化尊重、自他の生命の尊重、感動や畏敬など体験を通して育まれる価値を基盤として、様々な問題に協働して創造的に取り組み、新しい文化やよりよい社会を創る担い手となって持続可能な未来を拓く力の重要性が挙げられており、この趣旨はESDの推進に他なりません。

6. 音楽教育においてESDを推進していくことの意義

以上、ESDの概念や、21世紀において求める資質・能力について概観してきましたが、これらより、これからの音楽教育においても、ESDの視点をもって推進していかなければならないことがわかります。

音楽教育は、我が国、及び諸外国の様々な音楽を学習素材として扱い、音楽表現・鑑賞の直接経験を通して、多種多様な音の組合せによる音楽の構造を捉えるとともに、音楽の美しさなどの質感を感性を働かせて認識する力を高めていくことができるものです。こうした力の育成は、美的情操の涵養に資することはもとより、例えば、自分、及び日本人としてのアイデンティティを確立するとともに、自分とは異なる歴史的・文化的背景をもつ音楽の価値などを尊重できる態度を養うことにもつながっていくものです。これは文化理解の視点です。

また、音楽から喚起される感情やイメージ、それらの変化を意識し、さらに他者の感情などにも共感してコミュニケーションを図りながら相互理解を深めていくことは、音楽の学習活動ならではの特性です。したがって、音楽の学習活動は、自己理解力や他者理解力、コミュニケーション力、ひいては人間関係形成力などを高めていくことにつながります²⁰。これは関係性やつながりの視点です。

さらに、批評の対象となる音楽について、まずはその特徴やよさなどを理解できるように努め、他者が表現しようとする内容を受けとめて、共感したり自らの考え(感じ方や解釈など)の深化に生かしたりする鑑賞の学習活動は、生涯において多種多様な音楽と出会うとき、様々な音楽の特徴やよさなどに興味をもち、それらを理解しよ

¹⁹ 前掲書 15, p. 91

²⁰ 大熊信彦(2012)「視点」『中等教育資料』, No. 918, 文部科学省, p. 61 より。

うと努める態度をもつことができるようにしていくことによって、個人の成長と多様性を尊重できる社会人の育成に資するものと言えます²¹。これは鑑賞教育の視点です。

以上のことから、現在、国で検討されている資質・能力とも整合する力を顕在化させ、一層確実に育成するために、ESDの視点を音楽学習の中に意図的に組み入れ、汎用的な資質・能力である「21世紀型能力」の育成に音楽教育が重要な役目を果たすことを実証していかなければならないと考えます。

そのことによって、次期学習指導要領の改訂も視野に入れ、音楽教育によって培う「21世紀型能力」とは何かを明らかにしていくこと、そして、音楽教育の意味や存在価値を確認しアピールする一助になることが期待されます。

(以上、大熊 信彦)

²¹ 大熊信彦 (2013) 「視点」『中等教育資料』, No. 925, 文部科学省, p. 85 より。

第2章

中学校音楽・高等学校芸術科音楽における 「ESD としての音楽鑑賞指導ガイド」

この章では次のことを提示します。

1. 鑑賞領域の指導内容と ESD の関係
2. ESD としての鑑賞教育で獲得を期待する力
3. 実践の方法として思考を取り入れる意義
4. 思考のテーマ例
5. 評価の在り方
6. ESD としての鑑賞教育の構造（図解）
7. 「ESD としての音楽鑑賞指導ガイド」

第2章 中学校音楽・高等学校芸術科音楽における 「ESDとしての音楽鑑賞指導ガイド」

1. 学習指導要領における鑑賞領域の指導内容とESDの関係

ここから先は、中学校・高等学校芸術科音楽の鑑賞領域に限定していきます。

前章のまとめとして、音楽教育においてESDを推進していくことの意義を述べました。もちろん、鑑賞領域においてもESDとして実践していく意義は認められますが、まず、現行の学習指導要領が示す指導内容がESDとして求めていく可能性を含んでいるかどうか、確認しなければなりません。もしもその可能性がないとすれば、新たな指導内容を立てなければならないこととなります。一方、可能性が認められれば、指導者はESDの意識や視点をもって授業改善を図っていくことへと発展していきます。

(1) 中学校音楽・高等学校芸術科音楽における鑑賞領域の指導内容

「指導内容」とは、学習指導要領の本文「2 内容」の各項目そのものではありません。なぜなら、その項目は「音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて、鑑賞すること」のように、活動の形で示されているからです。したがって、それらは何を求めて行うものなのか、つまり、そこで求める指導内容は何かを抽出しなければなりません。しかし、わざわざ抽出しなくても、それぞれの『学習指導要領解説』に示されています。整理すると次の表8のようにまとめられます。

表8 学習指導要領で求める鑑賞領域の指導内容

指導内容		学習指導要領「2 内容」との対応	
上位概念	下位概念	中学校	高等学校芸術科音楽
音楽の素材としての音	音そのものの質感	1ア、23ア、共ア	Iアイ、IIアイ
	我が国や諸外国の音楽における様々な声	1ア、23ア、共ア	Iアイ、IIアイ
	音楽を成立させる言葉の特性	1ア、23ア、共ア	
	楽器の音	1ア、23ア、共ア	Iアイ、IIアイ
	自然音・環境音	取(7)イ	
音楽の構造	音楽を形づくる要素、要素同士の関わり方とそれらの働きがもたらす質	1ア、23ア、共ア	Iアイ、IIアイ、IIIア
	要素と音楽全体の構成	1ア、23ア、共ア	Iアイ、IIアイ、IIIア
音楽によって喚起されるイメージや感情	要素や構造がもたらす曲想	1ア、23ア、共ア	Iアイ、IIアイ、IIIア
	鑑賞によって得られる自己のイメージや感情	1ア、23ア、共ア	I取(6)、II取(3)、IIIア
音楽の鑑賞における批評	イメージや感情の言語化	1ア、23ア、共ア	I取(6)、II取(3)、IIIア、III取(3)
	自分にとっての音楽の価値判断	1ア、23ア、共ア	I取(6)、II取(3)、IIIア、III取(3)
音楽の背景となる風土や文化・歴史など	人間と音楽との関わり	1ウ、23ウ、取(7)イ	Iウ、IIウ、IIIウエ
	他芸術と関わった総合芸術における音楽	1イ、23イ	IIIウ
	様々な音楽がもつ固有性と共通する普遍性	1ウ、23ウ	Iエ、IIエ、IIIイ
音楽を共有する方法	音楽を共有するための音楽用語や記号	共イ	I取(6)、II取(3)、III取(3)

中学校の算用数字は学年、共は〔共通事項〕、取は内容の取扱い。

高等学校芸術科音楽のローマ数字I II IIIはそれぞれ音楽I II III、取は内容の取扱い。

(2) 各指導内容で求めるねらい

次に、これらの指導内容が求めるねらいを示します。これも『学習指導要領解説』の文中から読み取ることができます。なお、中学校ではねらいにも段階があると判断し、Level 1、Level 2として分けて示します。高等学校はそれに続くものとしてLevel 3とします。中学校が表 9、高等学校芸術科音楽が表 10 です。

表9 中学校 鑑賞領域の指導内容が求めるねらい

指導内容		ねらい	
		Level 1	Level 2
音楽の素材としての音	音そのものの質感	・音楽における音そのものの質感の感受	・音は音楽の素材であることへの理解 ・長さ、高さ、強さ、音色など音のもつ性質の理解
	我が国や諸外国の音楽における様々な声	・様々な声の知覚・感受	・曲種に応じて、固有の声質、声域、発音法、発声法、歌唱法があることへの理解 ・声の多様性の理解 ・声の音色を手がかりにした作曲家・演奏者の表現意図についての思考と理解
	音楽を成立させる言葉の特性	・音楽で用いられている言語の抑揚、アクセント、リズム、音質、語感などの知覚・感受	・言葉の特性がもたらす音楽の特質の理解 ・言葉の特性からみえる音楽文化の多様性の理解
	楽器の音	・様々な楽器の音の知覚・感受	・楽器の材質、形状、発音原理、奏法による様々な音があることへの理解 ・楽器の多様性の理解 ・楽器の音色を手がかりにした作曲家・演奏者の表現意図についての思考と理解
	自然音・環境音	・自然音・環境音の知覚・感受	・自然音・環境音に対する多様な美意識の理解 ・自然音・環境音と音楽の関わりの理解
音楽の構造	音楽を形づくる要素、要素同士の関わり方とそれらの働きがもたらす質	・要素及び要素同士の関わり方に対する知覚・感受	・客観的知覚と感受の両側面による音楽の認識
	要素と音楽全体の構成	・音や要素の働きから生まれる様相の理解 ・要素間の関わりによって生まれる様相の理解 ・音楽の構成や展開の様相の理解	・部分と全体の両側面による音楽の認識
音楽によって喚起されるイメージや感情	要素や構造がもたらす曲想	・それぞれの音楽固有の表情や雰囲気などの感受	・曲想からみえる音楽の多様性の理解
	鑑賞によって得られる自己のイメージや感情	・音楽によって喚起される自己のイメージの創出と感情やその変化の自覚	・喚起されたイメージと自己の感情やその変化の音楽的要因の探索 ・音楽が人間の感情に変化をもたらす特質をもつものであることへの理解
音楽の鑑賞における批評	イメージや感情の言語化	・イメージや感情の変化とその要因の言語化	・言語化された他者のイメージや感情の理解
	自分にとっての音楽の価値判断	・価値判断の根拠となる音楽の認識とイメージや感情の変化の自覚	・客観的な根拠を携えた音楽の価値判断 ・価値判断した結果の表現
音楽の背景となる風土や文化・歴史など	人間と音楽との関わり	・音楽とその背景にある風土・文化・歴史、人間の生活との関わりの理解	・人間にとって音楽の存在価値の理解 ・社会における音楽が果たす役割の理解 ・音楽文化を創造してきた人間についての思考と理解
	他芸術と関わった総合芸術における音楽	・総合芸術の種類への理解	・他の芸術と関わる音楽が、人・モノ・コト・社会・自然とのつながり・ひろがりのもとに生まれた文化であることへの理解
	様々な音楽がもつ固有性と共通する普遍性	・我が国や郷土の伝統音楽、諸外国の様々な音楽に対する特徴の理解	・様々な音楽がもつ固有性と共通する普遍性の理解
音楽を共有する方法	音楽を共有するための音楽用語や記号	・音楽用語や記号の理解	・音楽用語や記号は、人間が時代や地域を超えて音楽を共有し、音楽文化の継承・発展を可能にさせるものであることへの理解 ・音楽用語や記号から作曲者の表現意図についての思考と解釈

表 10 高等学校芸術科音楽 鑑賞領域の指導内容が求めるねらい

指導内容		ねらい
音楽の素材としての音	音そのものの質感	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な楽曲において、その素材となる音の質感の感受 ・音の質感が楽曲全体のよさや美しさの要因となっていることの理解 ・音のもつ表現力の豊かさや幅広さの理解
	我が国や諸外国の音楽における様々な声	<ul style="list-style-type: none"> ・発音法、発声法、歌唱法などによってもたらされる声の音色の特徴と楽曲のよさや美しさとの結び付きの理解 ・声の音色を手掛かりにした作曲家・演奏者の表現意図についての思考と理解
	音楽を成立させる言葉の特性	
	楽器の音	<ul style="list-style-type: none"> ・楽器の材質、形状、発音原理、奏法などによってもたらされる楽器の音色と音楽のよさや美しさとの結び付き ・楽器の音色を手掛かりにした作曲家・演奏者の表現意図についての思考と理解
	自然音・環境音	
音楽の構造	音楽を形づくる要素、要素同士の関わり方とそれらの働きがもたらす質	<ul style="list-style-type: none"> ・要素及び要素同士の関わり方を知覚し、それらの働きがもたらす質のうち、特に「美しさ」や「味わい」に注目した音楽の認識
	要素と音楽全体の構成	<ul style="list-style-type: none"> ・楽曲の構成原理(要素)の知覚と感受 ・構成原理がもたらす雰囲気や構成美の理解
音楽によって喚起されるイメージや感情	要素や構造がもたらす曲想	<ul style="list-style-type: none"> ・知覚と感受による楽曲全体の構成の理解 ・楽曲全体の構成やそれがもたらす質を基にした音楽の多様性の理解
	鑑賞によって得られる自己のイメージや感情	<ul style="list-style-type: none"> ・喚起されたイメージと自己の感情やその変化の音楽的要因の理解 ・音楽が人間の感情に変化をもたらす特質をもつものであることの理解
音楽の鑑賞における批評	イメージや感情の言語化	<ul style="list-style-type: none"> ・言語の解釈による鑑賞者のイメージや感情の理解
	自分にとっての音楽の価値判断	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽以外の学習経験や生活経験を含めた音楽批評 ・批評の交流による音楽理解の深化と多面的な音楽理解 ・音楽や芸術に対する「価値」の理解 ・価値判断するために必要な規準の理解
音楽の背景となる風土や文化・歴史など	人間と音楽との関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・以下による作曲家及び演奏者による表現の特徴の理解 ・作曲家の生きた時代や地域 ・人間像や芸術家像 ・諸作品の中のその楽曲の位置 ・作曲家固有の音楽様式 ・演奏者の解釈 ・演奏者の個性 ・生活や社会における人々と音楽との関わり方の理解 ・音楽文化の継承や発展への貢献についての理解 ・音楽を職業とすることの理解
	他芸術と関わった総合芸術における音楽	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽と他の芸術との関わり方の理解 ・総合芸術における作品の精神の理解
	様々な音楽がもつ固有性と共通する普遍性	<ul style="list-style-type: none"> ・現代の我が国や諸外国の音楽の特徴の理解 ・時代感覚とポピュラー音楽との関わり方の理解 ・伝統文化を取り入れた現代の音楽の理解 ・芸術創造において新しい語法を追求することの理解
音楽を共有する方法	音楽を共有するための音楽用語や記号	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽用語を適切に用いた批評

(3) 各指導内容から導くことのできる「ESDとして獲得を期待する力」

次に、鑑賞領域の各指導内容をESDとして扱った場合、どのような力を身に付けることができるのかを検討します。言い方を変えれば、各指導内容は、持続可能な社会づくりに貢献できる人材としてどのような資質・能力の育成を可能にするものなのかを検討し、確認するものです。その資質・能力を「ESDとして獲得を期待する力」としました。検討においては、国研(2012)、ESD-J(2006)²²、ソウル・アジェンダ(2010)などを参考にしました。

検討の結果、表11のようにすべての指導内容について「ESDとして獲得を期待する力」を導き出すことができました。

表11 鑑賞領域の指導内容から導くことのできる「ESDとして獲得を期待する力」

指導内容		「ESDとして獲得を期待する力」
音楽の素材としての音	音そのものの質感	・自分で感じ、考える力 ・感覚的な反応を発達させる力
	我が国や諸外国の音楽における様々な声	・(音楽)文化の多様性を理解し、尊重する態度
	音楽を成立させる言葉の特性	・(音楽)文化の多様性を理解し、尊重する態度
	楽器の音	・(音楽)文化の多様性を理解し、尊重する態度
	自然音・環境音	・音環境を保全していく態度
音楽の構造	音楽を形づくる要素、要素同士の関わり方とそれらの働きがもたらす質	・音楽をはじめとする芸術作品などの抽象的な事物を、客観的知覚と感受の両側面から認識できる力 ・事物や事象を客観と主観によって捉え、考える力
	要素と音楽全体の構成	・音楽をはじめとする芸術作品などの抽象的な事物を、部分と全体の両側面から認識できる力 ・事物や事象を多面的・総合的に捉え、考える力
音楽によって喚起されるイメージや感情	要素や構造がもたらす曲想	・(音楽)文化の多様性を理解し、尊重する態度
	鑑賞によって得られる自己のイメージや感情	・イメージをもって新たなもの、社会、時代をつくり出していくことの理解と実践力 ・自己のイメージや感情を他者に伝え、他者のそれを受け止めて互いに協調的なコミュニケーションを図れる力
音楽の鑑賞における批評	イメージや感情の言語化	・音楽や芸術の本質(自分や社会にとっての価値)を積極的に考え、見抜き、その結果を語り合える力 ・音楽や芸術を含む様々な文化の創造と持続発展のために、的確な批評ができる力 ・社会に存在する事物や事象の価値を的確に判断し、建設的に主張できる力
	自分にとっての音楽の価値判断	
音楽の背景となる風土や文化・歴史など	人間と音楽との関わり	・自分と音楽、人間と音楽との関わりに関心をもち、音楽文化を尊重する態度 ・音楽を「ピースメイキング」 ²³ として捉え、音楽が自分の生活や社会の健全化に貢献できることを理解し、そのために行動できる力 ・社会に存在する事物や事象の背景を洞察できる力
	他芸術と関わった総合芸術における音楽	・総合芸術の多様性を理解し、尊重する態度
	様々な音楽がもつ固有性と共通する普遍性	・過去に築かれた音楽文化や伝統を尊重し、その持続発展に貢献しようとする力 ・自他国の音楽文化を理解し合うために交流できる力 ・過去と現代を融合させて新たなモノやコトを生み出そうとする発想
音楽を共有する方法	音楽を共有するための音楽用語や記号	・自他国の音楽文化を理解し、互いの文化の価値などを尊重し合いながら交流できる力 ・抽象化されたシンボルから具体、背景を想像する力

²² ESD-J(2006)「ESDがわかる！」(冊子)におけるワークシート(2006年1月版)。

²³ 千住博(2010)「芸術とは何か」『WEDGE』,第22巻,第10号,株式会社ウェッジ,pp.56-57

2. ESD としての鑑賞教育を実現するために意識すべきこと

以上の作業や検討を通して得られたことは、以下の3点にまとめられます。

第1は、学習指導要領に示されている各指導内容は、それぞれ中学校第1学年から高等学校音楽Ⅲまで一貫しており（「音楽を成立させる言葉の特性」と「自然音・環境音」を除く）、求めるねらいも徐々に高度になっていること。第2は、徐々に高度化していく（Level 1→Level 2→Level 3）その先に、「ESDとして獲得を期待する力」が位置付き、そこまでもつながっていること。この2点です。

そして、ここで重要なことは、ESDとして鑑賞教育を実践する場合、そのつながり（つながっていること）を、教師も生徒も意識することだと考えます。

（1）教師の意識化

教師にとって、例えば「音楽の構造」を教える時、それは何のために教えるのか、ということは明確に意識しなければなりません。それは、例えば中学校ならば、表9にある「音や要素の働きから生まれる様相の理解」や「部分と全体の両側面による音楽の認識」ができるようにするためだけではありません。それだけの意識なら、これまで述べてきた21世紀を生き抜く資質・能力を育成する観点からみると不十分です。

「音楽の構造」は、表11より、「音楽をはじめとする芸術作品などの抽象的な事物を客観的知覚と感受の両側面から認識できる力」や「事物や事象を客観と主観によって捉え、考える力」、「音楽をはじめとする芸術作品などの抽象的な事物を、部分と全体の両側面から認識できる力」、「事物や事象を多面的・総合的に捉え、考える力」を身に付けるために教えるのだ、という意識をもつことが必要です。なぜなら、指導内容「音楽の構造」は、「音楽の構造を理解できる」こと、ただそれだけの狭い力を求めるものではなく、それを身に付けていることによって人生の裾野がどのように広がっていくのか、社会づくりに貢献する力としてどのような意味をもち、どのように生きて働くのかを理解しておかなければならないからです。ただ音楽理解の幅が広がるだけの狭い裾野ではないのです。そしてそのことを生徒にもわかりやすく伝えなければなりません。

（2）生徒の意識化

生徒も同様で、何のために「音楽の構造」を学ぶのか、その意義、つまり、「音楽の構造」を学ぶことは「事物や事象を多面的・総合的に捉え、考える力」を身に付けるために学ぶのだ、ということを理解し、それは、単にその授業のねらい達成だけでなく、これからの長い人生において、持続可能な社会づくりに貢献していくために必要な能力であることを、納得しなければなりません。

以前、社会科の地理的分野の授業を受けている中学生に、「社会科を学ぶ意味」について問うアンケート調査をしたことがありました。選択肢として、「①学校の時間割の中に社会科があるから」「②テストで良い点を取って、成績を上げたいから」「③社会科（歴史、地理、公民）について、専門的なことを詳しく知りたいから」「④世界や日本の今を詳しく知りたいから」「⑤今やこれからの自分の生活をより良いものにしていきたいから」「⑥平和で民主的な社会づくりに力を尽くしていける人間になりたいから」を用意しましたが、やはり①や②が多く、中学校社会科の『学習指導要領解説』に「究極」の目標として示されている⑥²⁴を選択した生徒は少ないものでした。つまりそこで

²⁴ 文部科学省（2014）『中学校学習指導要領解説 社会編』，p.9

学んでいた「ロッキー山脈」と「飛騨山脈」についての学びが、⑥につながっているとは認識していなかったのです。

音楽科についても、「特定の課題に関する調査結果」によれば、中学生の79.5%が「音楽の学習が好きだ」と感じている反面、「音楽の学習が、将来の生活や社会に出て役立つ」と思っている中学生は49.4%と落ち込んでいます²⁵。鑑賞学習に当てはめれば、何のために鑑賞するのか、何のために〔共通事項〕を学ぶのか、何のために伝統音楽を聴くのか、何のために批評文を書くのか、といった学びの本質的意義が理解されず、ただ楽しければよい、といった意識で授業を受けている現実が見えてきてしまいます。それを、「この学習によって身に付けることは、21世紀の世界を生きるためにこういう点で必要なんだ」ということが、生徒にとって明確に理解できるように、授業を変えていかなければなりません。

田村哲夫は、「今の教育で一番足りないのは、目的です。何のために勉強するのだという部分が欠落しているのです。人間は何のために生きているのか。それを考えるには、ESDは原点です」²⁶と述べています。ESDとして音楽鑑賞教育を実現させていくことは、現行の学習指導要領の内容に、新たに何かを加えて学習指導することではありません。すでにその内容には、ESDとして教えるべき内容を含んでいるのです。

再度述べますが、授業で扱う指導内容一つ一つについて、それらは表11にある「ESDとして獲得を期待する力」の実現に向かうものである、ということを確認して意識して実践していくことが、ESDとしてのみならず、これからの音楽鑑賞教育にとって非常に重要になるものです。

3. ESDとして鑑賞教育を実践するための方法

それでは「ESDとして獲得を期待する力」を育成する鑑賞授業は、具体的にどのような方法で行ったらよいのでしょうか。これもまた、特段、新たな方法を取り入れる必要はないのですが、重要なのは「考えさせること」、すなわち「思考」だと思います。

(1) 思考すること

例えば、過去に築かれた音楽文化や伝統を尊重しその持続発展に貢献しようとすることの重要性を教師が規範として論じても、知識として理解はするけれどもそれを行動に移せる力となるまでには至らないと考えます。ESDにおける「学び方・教え方」でも、「単に知識の伝達にとどまらず、体験、体感を重視して、探究や実践を重視する参加型アプローチとすること」²⁷と示されています。ここで述べられている「体験、体感」とは、音楽をじっくり味わって感動したり、要素を知覚・感受して感動のありかを探究したりすることでしょう。その過程においても思考は重要なのですが、その学びを持続可能な社会づくりに貢献する力として結実させていくためには、そうした学習経験を踏まえ、基盤にして、さらに踏み込んだESDに関わるテーマを与え、考えさせることが必要になると思います。

このことは、ドイツベルリン州の音楽科カリキュラム、「Rahmenlehrplan für die Sekundarstufe I」（「教授大綱」）中等段階（第7～10学年）（2006）における領域「音

²⁵ 国立教育政策研究所教育課程研究センター（2010）『特定の課題に関する調査（音楽）調査結果（小学校・中学校）』, p. 219

²⁶ 文部科学省国際統括官付（2010）「持続発展教育（ESD）とは」『文部科学時報』, No. 1608, 文部科学省, p. 22

²⁷ 同上書, p. 23

楽について思考すること」(Nachdenken über Musik) と、それに基づくベルリン州での実践²⁸から示唆を得ました。

同カリキュラムの領域、「音楽について思考すること」では、そのアプローチとして、①時代の変遷における音楽（歴史的テーマとして音楽を思考する）、②社会的文脈における音楽（社会的テーマとして音楽を思考する）、③様々な文化の音楽（民俗学的テーマとして思考する）、④他のメディアとの結びつきにおける音楽（マルチメディアからのアプローチによって思考する）、⑤形成された秩序としての音楽（作曲理論的に音楽について思考する）、⑥音楽の原理（知覚心理学的・自然科学的なテーマとして音楽を思考する）のように、テーマと思考させる内容が示されています²⁹。また、同カリキュラムのシークエンスとして、年齢が高まるにつれて思考の比重が増していることも、日本の中学校・高等学校での音楽教育の今後を考える上で参考になります³⁰。

このカリキュラムに基づくベルリン州の実践では、「西洋音楽史に何故こんなに違う時代があるのか」「どこから様々な様式が生まれたのか」「社会で自分が属している層によって聴く音楽のジャンルが異なるのはなぜか」「(人によって音楽の) 好みが変わるのはどうしてか」等、人間と音楽、社会と音楽、自分と音楽、といった関わりについて思考させています。またこれらは、学習者同士のコミュニケーションをとり、話し合いなどの交流によって多様性と寛容性も身に付けさせさせようとしています³¹。このようなテーマについて思考させ、思考の結果として得られるものは「ESDとして獲得を期待する力」に一致するものと考えます。

(2) 思考させるテーマ

では、鑑賞授業において、中学生や高校生にどのようなテーマを与え、思考させたらよいのでしょうか。

本研究グループでは、表8で整理した鑑賞領域の各指導内容に即し、そのそれぞれに対応する「ESDとして獲得を期待する力」の育成につながる「思考させるテーマ」を検討しました。その結果を表12に示します。

ここに掲載されているテーマは、ほんの一例です。指導内容と、指導する生徒の実態などを基に、この他にも様々なテーマが考えられますが、大事なことは、音楽科で教えるべき指導内容に即していることと、そこで行う鑑賞学習を基盤にして思考できるテーマにすることです。そうしないと、音楽教育から離れ、道徳や「総合的な学習の時間」のようになっていってしまう恐れがあります（教科指導としてのESDについては、本章5. で詳述します）。

この思考のテーマを考えることは、教師にとってとても楽しいことだと思います。生徒の顔や、楽しんで考える表情を思い浮かべながら、教師自身の幅広い音楽観や教養、センスをフルに発揮して、よいテーマをどんどん発案していただきたいと思えます。

²⁸ 日本学校音楽教育実践学会編（2012）「ドイツベルリン州のカリキュラムと授業実践」『音楽科カリキュラムと授業実践の国際比較』、音楽之友社、pp. 123-152

²⁹ 同上書、pp. 130-131

³⁰ ドイツベルリン州のカリキュラムと授業実践を検討した中島卓郎は、検討を踏まえて日本における音楽科の課題として「人間にとっての音楽、生活における音楽という視座からも児童・生徒が思考を深めていくこと」を挙げている（同上書、p. 149）。

³¹ 前掲書 28, p. 148 （ ）内は引用者。

表 12 鑑賞領域の指導内容に対する「思考させるテーマ」例

指導内容		思考させるテーマ例		
		主として中学生に	主として高校生に	
音楽の素材としての音	音そのものの質感	<ul style="list-style-type: none"> 「全ての感覚を働かせて、ものをよく見、聴き、味わい、触り、嗅いでみて新たに発見したこと、その時に感じたことを述べ合ってみましょう。」 	<ul style="list-style-type: none"> 「美しいと感じた音楽や芸術について、感じた美しさの要因は、その作品の素材にあるのか、また素材の関わり方にあるのか等、話し合ってみましょう。」 「直感的に『事物や事象の質感を感じ取る』ということが、人として生きていく上でどのような役割を果たすのか考え、意見を述べ合ってみましょう。」 	
	我が国や諸外国の音楽における様々な声	<ul style="list-style-type: none"> 「同じ食べ物の匂いでも、国や地域によって好みが全く異なることがあります。『声についての美意識』もそうなのでしょうか。そうだとしたら、なぜ異なるのか考えてみましょう。」 	<ul style="list-style-type: none"> 「日本の伝統音楽の声と、西洋のクラシック音楽の声楽曲とを、音響の面で比較し、うたわれる場(目的や場所など)との関わりを考え、意見を述べ合ってみましょう。」 「『歌は世につれ世は歌につれ』といいますが、声や歌い方に注目して過去や現代の日本の歌を聴き、時代によって変化している点や普遍的な点を見つけ出し、社会との関わりという点で意見を述べ合ってみましょう。」 	
	音楽を成立させる言葉の特性	<ul style="list-style-type: none"> 「韓国語、中国語、ポルトガル語、スペイン語、フィリピン語、インドネシア語、タイ語、ベトナム語の音声を、音色や抑揚、リズム感に注目して聴き比べてみましょう。そしてそれぞれの違いを述べ合ってみましょう。」 「原語と邦訳された外国歌曲を聴き比べ、言葉・音・音響の関係を考え、述べ合ってみましょう。」 		
	楽器の音	<ul style="list-style-type: none"> 「世界の諸民族の楽器を1つ取り上げ、その地域の自然や風土などから、その楽器の音がそこで暮らす人々に好まれる理由を考え、発表してみましょう。」 		
	自然音・環境音	<ul style="list-style-type: none"> 「日本人が大切にしてきた音や音環境を調べてみましょう。そしてなぜ大切にしてきたのかを考え、これからも音環境を保全するために、私たちができることは何かを話し合ってみましょう。」 		
音楽の構造	音楽を形づくる要素、要素同士の関わり方とそれらの働きがもたらす質	<ul style="list-style-type: none"> 「最近『美しい』と感じたモノやコトを取り上げ、なぜ『美しい』と感じたのか、その理由を述べ合ってみましょう。」 「『客観』と『主観』という語の意味を調べ、身の回りにあるものを1つ選び、それについて客観と主観によって捉えた結果を語り合ってみましょう。」 		<ul style="list-style-type: none"> 「アインシュタイン、コッホ、グラショウ、小柴昌俊など、一流の科学者が音楽を愛好している人が多いのはなぜなのか、話し合ってみましょう。」
	要素と音楽全体の構成	<ul style="list-style-type: none"> 「印象派の音楽と、印象派の絵画に共通するところはどこかを見つけ出し、発表してみましょう。」 「いろいろなパーツが組み合わさって美しさを生み出しているモノやコトを探してみましょう。そしてどのような組み合わせ方に美しさを感じたのか、発表してみましょう。」 		<ul style="list-style-type: none"> 「『木を見て森を見ず』という比喩は、一般的にどのような時に使われるのでしょうか。音楽や芸術を鑑賞する時に『木を見て森を見ず』とはどういう意味になるのか、例を挙げながら意見を述べ合ってみましょう。」
感情 音楽によってイメージや喚起されるイメージや感情	要素や構造がもたらす曲想	<ul style="list-style-type: none"> 「いろいろな国の代表的な音楽を聴いて、表情や雰囲気を感じ取りましょう。そして、音楽の特徴について、その国に対するイメージなどと関わらせて考え、話し合ってみましょう。」 	<ul style="list-style-type: none"> 「いろいろな国の音楽を鑑賞し、それぞれの曲想を味わい、曲想を生み出している要素や構造の特徴と、その国の風土や文化、生活との関わりなどを考え、音楽の多様性について話し合ってみましょう。」 	
	鑑賞によって得られる自己のイメージや感情		<ul style="list-style-type: none"> 「イメージネーションとインプレッションの違いは何だろうか？音楽を鑑賞するときにあてはめて考えてみましょう。」 	
音楽の鑑賞における批評	イメージや感情の言語化	<ul style="list-style-type: none"> 「人によって感じ方が大きく異なると思われる芸術作品を探し、皆に提示して感じたことを尋ね、その感想を共感的に受け止めて言葉で返してみよう。」 	<ul style="list-style-type: none"> 「イメージするということは、人間にとってどのような意味や重要性があるのかを考え、意見を述べ合ってみよう。」 「音楽から感じ取ったことを言葉で表現する時、比喩が多く用いられることを経験してきましたが、評論家の音楽批評を読み、比喩の効果を考え、話し合ってみよう。」 	

	自分にとっての音楽の価値判断	<ul style="list-style-type: none"> ・「ベートーヴェンの『運命』が 200 年以上も演奏されている理由を考えてみましょう。また、最近生まれた J-POP がこの先 200 年以上演奏され続けるかどうか、それぞれの音楽を批評しながら考え、発表してみましょう。」 ・「友人や家族が好きな芸術作品を発表し、その作品を皆で鑑賞しながら、どのような価値を見出しているか話し合ってみましょう。」 ・「私たちが音楽や芸術を鑑賞することに役割があるとしたらそれは何でしょうか。話し合ってみましょう。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・「鑑賞した音楽に対して自分が判断した価値は、自分のこれまでのどのような経験から判断したものか考え、述べ合ってみましょう。」 ・「『審美眼』『鑑識眼』という言葉の意味を調べてみましょう。音楽を鑑賞することによって『審美眼』や『鑑識眼』が育つとしたら、鑑賞するときに、どのようなことを大切にするとよいか話し合ってみましょう。」
音楽の背景となる風土や文化・歴史など	人間と音楽との関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・「人はなぜ表現するのかを考え、話し合ってみましょう。」 ・「心が傷ついた人々に勇気を与える音楽は、どのような要素によってつくられた音楽か、自分の経験をもとに、音楽を聴いて確かめながら考え、話し合ってみましょう。」 ・「知らない曲を皆で聴き、その作曲者の性格、育った環境、趣味などを想像し、理由とともに述べ合ってみましょう。」 ・「世界で起こっている紛争や戦争をなくすために、音楽や芸術が果たせることを考え、話し合ってみましょう。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・「音楽が社会に果たす役割は何か、話し合ってみましょう。」 ・「いつの時代、どこの国に生まれたとしても、音楽や芸術が人々に幸せをもたらすことができるとしたら、そのために、今の自分たちには何ができるだろうか、話し合ってみましょう。」 ・「小・中・高等学校の音楽の授業で、音楽を鑑賞して学んだことを振り返り、今後、自分なりに新たな価値を見出すなど、創造的に生きるために役立つと思われることはどのようなことかを考え、述べ合ってみましょう。」
	他芸術と関わった総合芸術における音楽	<ul style="list-style-type: none"> ・「異なる文化を取り入れて新たな文化となった例を探し、発表してみましょう。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・「異なる何かと何かを融合させて、新たなモノやコトを創り出すことができないか、身の回りを見渡しながら考え、意見を出し合ってみましょう。」
	様々な音楽がもつ固有性と共通する普遍性	<ul style="list-style-type: none"> ・「長い歴史をもつ奈良市大柳生町の『太鼓踊り』を鑑賞し、毎年行われていた『太鼓踊り』が休止となった理由を考えてみましょう。」 ・「伝統文化を継承・存続させるために、あなたや地域の人々ができることは何かを考え、話し合ってみましょう。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・「身の回りに伝統の継承と創造的に発展した例があるか意見を出し合ってみましょう。また、それらが人々にとってどのような意味があるか考えてみましょう。」 ・「伝統と現代を融合させて、新たなモノやコトを創り出すことができないか、身の回りを見渡しながら考え、意見を出し合ってみましょう。」
方音楽を共有する	音楽を共有するための音楽用語や記号	<ul style="list-style-type: none"> ・「語学を学ぶことと楽譜が読めるようになることに共通することは何か、考えてみましょう。」 ・「写真を見ることと地図を見ること、演奏を聴くことと楽譜を見ること、の両方を通して育つ人間の能力は何かを考え、話し合ってみましょう。」 	<ul style="list-style-type: none"> ・「作曲家が楽譜に書いた記号や用語から、作曲者のメッセージを想像してみましょう。同じように、作者が記号やシンボルなどを用いて受け取り側に何かを伝えようとしている例を探し、述べ合ってみましょう。」

(3) 評価の在り方

次に、「ESD として獲得を期待する力」に対する評価の在り方について述べます。

鑑賞領域の評価は、観点別評価の第 1 観点「音楽への関心・意欲・態度」と、第 4 観点「鑑賞の能力」の二観点によって、目標に即した評価規準を設けて行います。指導と一体化を図ることや観点別評価の趣旨など、学習評価の基本的事項についてはここでは触れませんが、上に掲げたテーマについて思考することなどを通して「ESD として獲得を期待する力」が身に付いたかどうかは、評価しなければなりません。それは、ESD としての授業を構成するときも、その題材で求める「ESD として獲得を期待する力」を目標として掲げなければならないからです。目標に対して評価をしなければならないことは、教育において当然のことです。

しかし、例えば「(音楽)文化の多様性を理解し、尊重する態度」や「事物や事象を多面的・総合的に捉え、考える力」といった「ESD として獲得を期待する力」は、たとえその題材において身に付いたように見えたとしても、その題材が終わった後で、衰退したり学習前にリセットしてしまったりするかもしれません。他の目標についてもそれでは困るのですが、「ESD として獲得を期待する力」、つまり持続可能な社会づくりに貢献できる力は、長い人生において保存され、生きて働かなくてはならないものです。

そうすると、一題材だけでそれを求め、確認するのではなく、高等学校を卒業するまでの間、じっくりと、そしてじわじわと長い視野をもって育てていかななくてはならないこととなります。

これは、矢口（2010）が、持続可能な社会を構築するために重要な推進方法として強調する「バックキャスト方式」に重なります。バックキャスト方式は、「目標からみて望ましい方向に釣り上げる・目標から現在を振り返る」³²という立場を取り、目標は「方向目標」的な性格をもつものと考えられます。現行の評価観点は、題材（単元）で掲げた目標に対してはその題材（単元）で実現を認めていきますが、「ESDとして獲得を期待する力」は、その実現に向かって「ステップを着実にのぼる」³³ことで育成されるものと考えます。

ある一題材は、一つのステップですから、そのステップがきちんと踏めたかどうかは評価しなければなりません。したがって、ESDとしての鑑賞指導の学習指導案を作成するときは、二つの観点の他に、「ESDとして獲得を期待する力（方向目標として継続的にアセスメントしていく観点）」として、他評価観点とは別に新たな枠組みを設ける必要があると捉えます。

先に述べた「21世紀型能力」として育成する資質・能力のうちにも発達段階に従って割り振ることに相応しくないものがあるとするれば、学年にこだわらず、繰り返し育成すべきことになる、という意見も出されています³⁴。いずれにしても、これからの学習指導においては、今後育成すべき資質・能力、それを育成するために必要な各教科等の目標・内容、学習評価の在り方、をセットにして見直す時が来るものと思います。その時、これまでの評価観とは異なる考え方が出てくるかもしれません。

4. ESDとしての鑑賞教育の構造

以上をまとめると、ESDとしての鑑賞教育の構造は、以下の図3のように表せるものと考えます。

これまで、あるいはESDという概念が出る以前からも、音楽を教える教師の頭の中には、「鑑賞教育を施せば、教え子たちは豊かな人生を送り、世に貢献できるようになるだろう」、という意識は潜在していたと思います。ただ、それは潜在していても無意識の中にあっただのではないのでしょうか。そのことを図3の左側に示しました。

そして今後は、先に述べたように、ESDについての意識を顕在化させ、これまでと同様に鑑賞の指導内容を明確にして充実させていけば、ESDとして持続可能な社会づくりに貢献できる資質・能力、すなわち「ESDとして獲得を期待する力」が身に付いていくものと考えます。

ただその時、意識をもって指導に臨むだけでは不十分であり、学習過程においては、先に提案したようなテーマに対する思考の機会を取り込むなどし、また、題材や学年、あるいは校種を超えたバックキャスト方式で指導と評価を重ねていくことによって、音楽科鑑賞領域で培う「21世紀型能力」の資質・能力の獲得へとつながっていくものと期待されます。このことを図3の右側に描きました。

³² 矢口克也（2010）『『持続可能な発展』理念の実践過程と到達点』『持続可能な社会の構築 総合調査報告書』、国立国会図書館調査及び立法考査局、pp. 35-37

³³ 同上。

³⁴ 前掲書 15, p. 31

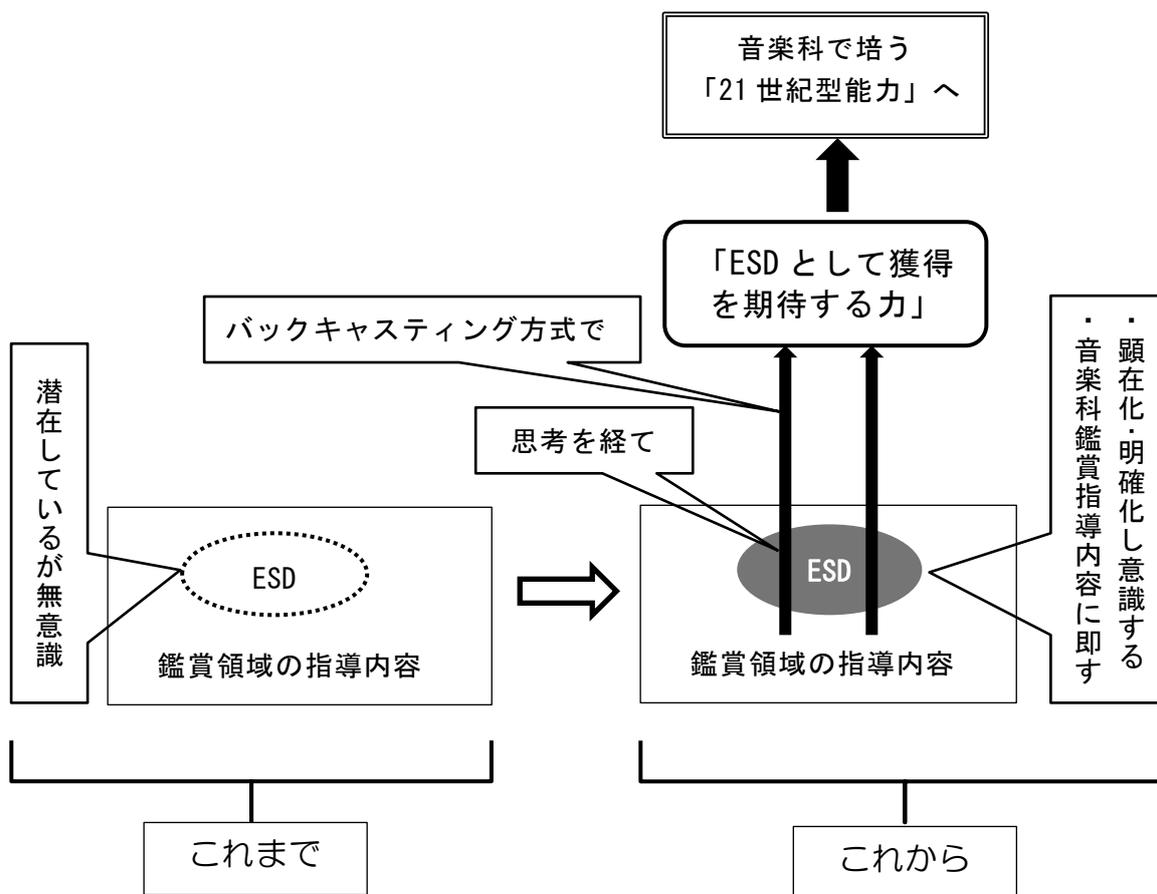


図3 ESDとしての鑑賞教育の構造

5. 教科指導としてのESDにおいて留意すべきこと

(1) 「インフュージョン・アプローチ」としての教科指導

昨今の日本において、ESDの実践は大変盛んです。教科指導では、社会、理科、技術、家庭などの学習指導要領において持続可能な社会の構築の観点からの指導が示されています。しかし、ESDの実践の多くは「総合的な学習の時間」や合科的な指導など、教科横断的に行われる「インテグレーション・アプローチ」³⁵が主流のようです。

「持続的な社会づくりに関する課題には、広範囲の多くの要素が複雑に絡み合っているものが多い」³⁶ので、インテグレーション・アプローチは効果的であると思います。しかし、「持続可能な社会づくりに関わる実践力」の基盤になるのは、やはり、各教科等で育成すべき学力であると考えます。そして、これまで見てきたように、その学力育成の過程において、持続可能な社会づくりに貢献できる資質・能力の育成を、指導内容と関連付けて図っていくことが重要です。

³⁵ 五島敦子・関口知子編著 (2010) 『未来をつくる教育 ESD 持続可能な多文化社会をめざして』, 明石書店, pp. 111-112

³⁶ 前掲書 2, p. 3

各科目において持続可能性の課題を意識して授業を行う手法は「インフュージョン・アプローチ」と言われています³⁷。つまり、インフュージョン・アプローチから、インテグレーション・アプローチ、そしてさらに、学校全体でESDとして取り組む「ホールスクール・アプローチ」³⁸へと同心円的に発展させていくことで、音楽教育で育成しようとする「ESDとして獲得を期待する力」も、より確かなものに育っていくことと思います。

(2) 「なんでもあり」からの脱却

ESDの研究会に行くと、「ESDの視点を取り入れた総合的な学習の時間」などのような実践発表が多く見られます。「はて、これまでの総合的な学習の時間と、どこがどう違うのだろう」と思うことがよくあります。また、他の参加者からも同じような質問がされていました。2012年に奈良教育大学附属中学校で行われた「第4回ユネスコスクール全国大会 持続発展教育(ESD)研究大会」での丸山秀樹氏の講演「ESDのこれから —『なんでもアリ』から基盤構築と意識化へ—」も、それを指摘したものでした。

ESDはそれを特別に扱う教科を立てたり、新たな指導内容を設けたりして行っていくものではありませんが、適当に「これはESDだ」「これもESDだ」では困ります。

例えば、伝統音楽を扱う場合も、伝統文化の継承・発展は言うまでもなく重要な指導事項として含まれています。しかし、先にも述べたように、伝統音楽を扱うことの最上位の目的は何なのかを、教師は考え、意識することなくしては、ESDとして実現しません。つまり、例えば文楽を鑑賞し、その特徴を理解し、よさを味わうだけでは、生徒の中に、文楽という一つの新たな音楽経験が備わっただけで終わってしまいます。伝統文化の継承・発展に貢献する態度を身に付けさせたいとするならば、その目標を定め、文楽についての音楽的な学びをしっかりと獲得させ、それを基盤とするESDとしての指導方法(先に挙げたテーマによる思考経験など)を組み込み、その成果を明らかにしていく(評価)ことが必要です。

「音楽教育をすれば音楽を愛好する心情が育つ」ということなども、予定調和を期待する(やがてどこかで結実するだろう、という考え)のでは、学校教育としての責任は果たせません。ESDも同じことだと思います。

(3) 道徳教育との境界線

表12の「思考させるテーマ」を、それだけ見ると「道徳でも扱える」と思われるかもしれませんが。

たしかに、学習指導要領中学校道徳では「(9)日本人としての自覚をもって国を愛し、国家の発展に努めるとともに、優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献する。」や、「(10)世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献する。」といった、ESDとしても求められそうな内容が示されています。また、中学校学習指導要領音楽の「内容の取扱い」にも、「道徳の時間などとの関連を考慮しながら」とあります。

ESDとしての音楽教育を実現していくとき、扱う内容が道徳の内容と類似していても、それが音楽科で求める指導内容と結合させていくことで、道徳との差異が出てきます。

³⁷ 前掲書 33, p. 110

³⁸ 同上書, pp. 112-113

例えば、中学校の鑑賞授業では、〔共通事項〕を支えとして音楽を深く味わい、理解していく学習を展開させますが、そこでの学びと切り離して、「伝統文化を継承・発展させるために、あなたや地域の人々ができることは何か、考えてみましょう」というテーマを提示しても、それは道徳になってしまいます。文楽で言えば、三業一体の特質を知覚・感受し、文楽のよさを見つけ、その美しさに感動した上で、それを基に継承・発展について考えさせていくことが、音楽教育で扱うESDになります。「結合させる」とはそういうことです。表11や表12で、指導内容とともに結合させて「ESDで期待する力」や「思考のテーマ例」を掲げたことも、この趣旨に沿ったものです。

このことは、本当に気を付けなければならないことです。誤ると、教科としての存在価値が問われてしまいますし、正しく理解して実践していけば、21世紀の人材育成という新たな視点での音楽科（芸術科音楽）の存在価値が、説得力をもって主張できるようになるでしょう。

6. 「ESDとしての音楽鑑賞指導ガイド」

本章の最後に、これまで掲げてきた表8、表9、表10、表11、表12を一覧にまとめて提示します（表13）。まとめることで、中学校から高等学校までの一貫性を表すことができ、バックキャスト方式を可能にさせるのではないかと思います。

そして何より、この表は、ESDとしての音楽鑑賞授業を構成するときの手助けになるものと期待しています。

よって、この表を「ESDとしての音楽鑑賞指導ガイド」（以下、ガイド）としました。次の第3章で提案する実践事例は、このガイドに基づいて作成されたものです。

（以上、宮下 俊也）

表 1 3

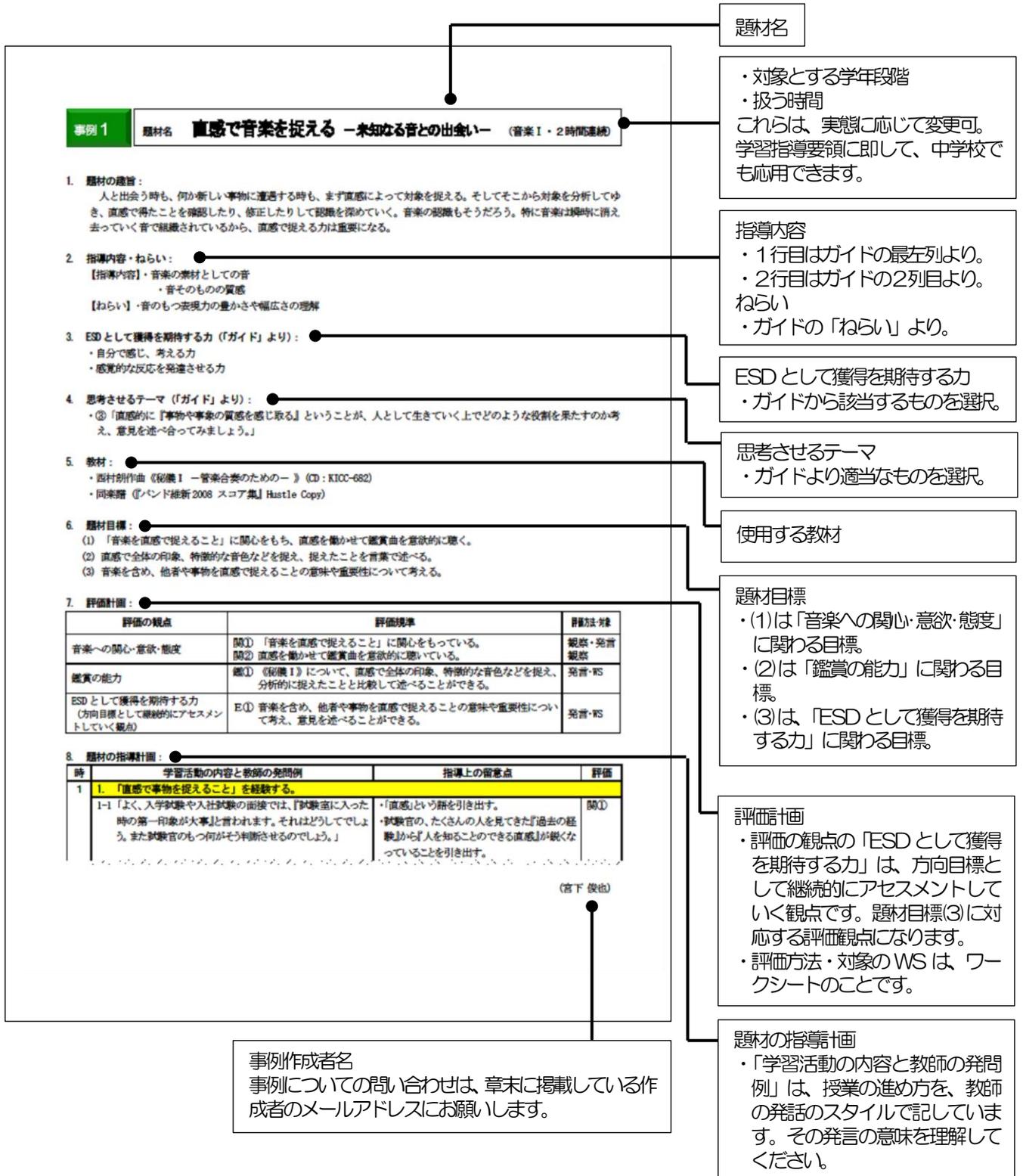
第3章

高等学校芸術科音楽における ESD としての鑑賞授業事例集

この章では次のことを提示します。

1. 高等学校芸術科音楽における ESD としての鑑賞授業事例

事例の見かた



掲載している事例は、WSも含めてすべて複製可能です。添付のCDにはカラーでデータが収録されていますのでご利用ください。

事例一覧

事例番号	題材名	指導内容 (上段：上位概念、下段：下位概念)	扱う段階	思考のテーマ例番号
1	直感で音楽を捉える －未知なる音との出会い－	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽の素材としての音 ・音そのものの質感 	音楽Ⅰ	③
2	「うたのおねえさん」 －今と昔－	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽の素材としての音 ・我が国や諸外国の音楽における様々な声 	音楽Ⅲ	⑥
3	楽器の壮大な世界！	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽の素材としての音 ・楽器の音 	音楽Ⅲ	⑩
4	音楽を愛好する理由	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽の構造 ・音楽を形づくる要素、要素同士の関わり方とそれらの働きがもたらす質 	音楽Ⅱ	⑭
5	全体と部分	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽の構造 ・要素と音楽全体の構成 	音楽Ⅰ	⑰
6	音楽文化の発信・伝播・多様性	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽によって喚起されるイメージや感情 ・要素や構造がもたらす曲想 	音楽Ⅰ	⑲
7	イメージすることの意味 －ドビュッシーの作品を通して－	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽によって喚起されるイメージや感情 ・鑑賞によって得られる自己のイメージや感情 	音楽Ⅰ	⑳
8	音楽自分史を作ろう	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽の鑑賞における批評 ・自分にとっての音楽の価値判断 	音楽Ⅰ	㉓
9	音楽が社会に果たす役割は何だろう？	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽の背景となる風土や文化・歴史など ・人間と音楽との関わり 	音楽Ⅰ	㉓
10	音楽が伝えてくれるもの	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽の背景となる風土や文化・歴史など ・人間と音楽との関わり 	音楽Ⅰ	㉔
11	人間と音楽との関わり －「祈りの音楽」を通して－	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽の背景となる風土や文化・歴史など ・人間と音楽との関わり 	音楽Ⅰ	㉔
12	文楽の三業一体から日本人の感性を考える	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽の背景となる風土や文化・歴史など ・他芸術と関わった総合芸術における音楽 	音楽Ⅰ	㉗
13	日本の伝統をつたえる －京鹿子娘道成寺に見る日本の音楽文化－	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽の背景となる風土や文化・歴史など ・人間と音楽との関わり 	音楽Ⅰ	㉘
14	楽譜から作曲者のメッセージを読み解く －聴き味わうこととともに－	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽を共有する方法 ・音楽を共有するための音楽用語や記号 	音楽Ⅱ	㉜

1. 題材の趣旨：

人と出会う時も、何か新しい事物に遭遇する時も、まず直感によって対象を捉える。そしてそこから対象を分析してゆき、直感で得たことを確認したり、修正したりして認識を深めていく。音楽の認識もさうだろう。特に音楽は瞬時に消え去っていく音で組織されているから、直感で捉える力は重要になる。

音楽の認識(理解)を求める鑑賞学習は、「学習」であるがために、直感で捉えたものに対する分析(楽曲分析といった狭義ではない)が中心になっている。しかし、生涯において音楽と関わる時、直感で音楽を捉え感動することの方が分析的に捉えることよりも多いだろう。その時、直感で捉えたいものは音楽の質であり、質を直感で捉えられるように学校教育では分析や知識を学んでいるとも言える。

これまでの鑑賞教育において、直感で音楽の質を捉えるということそのものを目的とする学習指導はあまりされていなかったように思う。本題材では、管打楽器の新しい手法を用いた現代音楽を教材とし、これまで生徒が認識している管楽器、打楽器とは異なる音に遭遇させ、直感でその質感を捉えるための学習を構想する。学習指導の過程では何度か聴かせながら分析的に理解させていく場面も設けるが、それは、次に出会う音楽を捉えるための直感をより鋭敏にするための経験であることを理解させる。その学習を通して、音楽に限らず、人が生きていく上で出会う他者や事物を捉えるために直感は重要であることを考えさせる。

2. 指導内容・ねらい：

【指導内容】・音楽の素材としての音
・音そのものの質感

【ねらい】・音のもつ表現力の豊かさや幅広さの理解

3. ESD として獲得を期待する力(「ガイド」より)：

- ・自分で感じ、考える力
- ・感覚的な反応を発達させる力

4. 思考させるテーマ(「ガイド」より)：

- ・③「直感的に『事物や事象の質感を感じ取る』ということが、人として生きていく上でどのような役割を果たすのか考え、意見を述べ合ってみましょう。」

5. 教材：

- ・西村朗作曲《秘儀 I ―管楽合奏のための―》(CD : KICC-682)
- ・同楽譜(『バンド維新 2008 スコア集』Hustle Copy)

6. 題材目標：

- (1) 「音楽を直感で捉えること」に関心を持ち、直感を働かせて鑑賞曲を意欲的に聴く。
- (2) 直感で全体の印象、特徴的な音色などを捉え、捉えたことを言葉で述べる。
- (3) 音楽を含め、他者や事物を直感で捉えることの意味や重要性について考える。

7. 評価計画：

評価の観点	評価規準	評価方法・対象
音楽への関心・意欲・態度	関① 「音楽を直感で捉えること」に関心をもっている。 関② 直感を働かせて鑑賞曲を意欲的に聴いている。	観察・発言 観察
鑑賞の能力	鑑① 《秘儀 I》について、直感で全体の印象、特徴的な音色などを捉え、分析的に捉えたことと比較して述べることができる。	発言・WS
ESD として獲得を期待する力 (方向目標として継続的にアセスメントしていく観点)	E① 音楽を含め、他者や事物を直感で捉えることの意味や重要性について考え、意見を述べるができる。	発言・WS

8. 題材の指導計画：

時	学習活動の内容と教師の発問例	指導上の留意点	評価
1	1. 「直感で事物を捉えること」を経験する。		
	1-1 「よく、入学試験や入社試験の面接では、『試験室に入った時の第一印象が大事』と言われる。それはどうしてでしょう。また試験官のもつ何がそう判断させるのでしょうか。」	<ul style="list-style-type: none"> ・「直感」という語を引き出す。 ・試験官の、たくさんの人を見てきた「過去の経験」から「人を知るための直感」が鋭くなっていることを引き出す。 	関① 関②
	1-2 「皆さんの直感、つまり第一印象でそのものの質を捉える力はどうでしょうか。これはどう捉えますか。」	<ul style="list-style-type: none"> ・「質」の意味を、雰囲気や、明るさ、暗さなどの形容語の例を挙げて説明しておく。 ・絵、写真、花、器など、捉えやすい物を用意し、見せて述べさせる。 	
1-3 「『直感』ということと、『直感で物の質を捉える』ということがわかりましたか。では、音楽に対してはどうでしょう。おそらく皆さんがこれまで聴いたことがないと思われる曲を用意してきましたので、聴いてみましょう。私からはこの曲について何も説明しませんので、先ほどのように、第一印象としてどのような質が捉えられるか、やってみましょう。8分ぐらいの曲です。WS のメモ欄に感じ取ったことを記入しながら聴いてください。」	<ul style="list-style-type: none"> ・《秘儀 I 》を全曲聴かせる。 		
2. 《秘儀 I 》を聴いて、直感で捉えたことを述べ合う。			
	2-1 「さあ、どんなことを感じましたか。述べてください。」	<ul style="list-style-type: none"> ・発言されたことを黒板掲示用の短冊に番号をふって記入し、黒板のAのエリア(資料1)に掲示していく。また、鑑賞後、グループで話し合わせ、グループに短冊を記入させてもよい。 ・以下の発言が予想される。 <ol style="list-style-type: none"> 1) 全体の印象を述べたもの。 2) 全体について客観的な知覚結果を述べたもの。 3) 要素についての印象を述べたもの。 4) 要素についての客観的な知覚結果を述べたもの。 	鑑①
	2-2 「いろいろ出てきましたね。でも何も感じなかった(感じ取れなかった)という人もいるかもしれません。それはどうしてだと思いますか。」	<ul style="list-style-type: none"> <引き出したい理由> ・「今まで聴いたことがないような音楽だったから(音だったから)。 	
3. 音について直感で捉えたことを確かめる。			
	3-1 「なるほど、そうかもしれませんね。たしかに、これまで聴いたことがないような音が出てきました。それでは冒頭のところをもう一度聴いてみます。ここから先は、直感で捉えたことのを確かめになります。黒板に示してあることに注目して、聴いてみましょう。」	<ul style="list-style-type: none"> ・掲示してある短冊のうち、冒頭部の音や響きを捉えたと思われるものを指定して注目させる。 ・冒頭から 15 小節を聴かせる。 	鑑①
	3-2 「始めに、何かキーンという音が聴こえましたね。もう一度聴いてみましょう。」	<ul style="list-style-type: none"> ・再度、冒頭3小節を聴かせる。 ・数回聴かせてもよい。 	
	3-3 「この音を出している楽器は何でしょうか。もう一度聴いてみます。」	<ul style="list-style-type: none"> ・再度、聴かせた後、述べさせる。 ・「キーン」の音の正体については保留して次 	

	<p>3-4 「次に、このキーンといっている音に重なってすぐ、『風が吹いているような』(直感で捉えた言葉の中から拾う)音が聴こえてきます。この音を出している楽器は何でしょうか。もう一度聴いてみます。」</p> <p>3-5 「もう一つ、その後から、『何か天を舞っているような』(直感で捉えた言葉の中から拾う)音が聴こえてきます。この音の正体は何でしょう。もう一度聴いてみます。」</p> <p>3-6 「それでは、この3つの音の正体を明かします。楽譜を配りますが、そこに何て書いてありますか。そして、その音の質について述べ合ってみましょう。」</p> <p>3-7 「皆さんが知っているフルートや打楽器の音とは違ったものでしたね。打楽器についてはスーパーボールでさえもが楽器になり得ること、フルートの旋律も、重ね方によって、旋律というより音響を生み出していることなどがわかりましたね。直感で捉えた印象は、このような音から得られたものであることを理解してください。」</p>	<p>に進む。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・再度、聴かせた後、述べさせる。 ・数回聴かせてもよい。 ・その音については保留して次に進む。 <ul style="list-style-type: none"> ・再度、15小節を聴かせた後、述べさせる。 ・数回聴かせてもよい。 <ul style="list-style-type: none"> ・冒頭部の楽譜を配布し、「Antique Cymbals」「arco」「rub with super ball」の記載と、フルートの旋律に注目させ、以下のような音の正体を導き出す。 <ul style="list-style-type: none"> ・「キーン」:アンティークシンバルを弓でこすって出した音。 ・「風のような音」:打楽器をスーパーボールをこすって出した音。 ・「天を舞う音」:フルートとクラリネット、さらにサクソフォンが加わって出した音。 ・これらについては、音楽室に楽器を用意して実際に音を出させてもよい。特に、「天を舞う音」については、フルートの旋律をピアノで弾いてみて、同じ旋律でもピアノ(鍵盤楽器)では出せない音の質感であることを、語り合いながら理解させる。 	鑑①
2	4. 楽曲全体について直感で捉えたことを確かめる。。		
	<p>4-1 「さて、直感で捉えたこと(黒板に掲示されているもの)の中には、音そのものことだけでなく、この曲全体についての印象が挙げられています。今度はその印象をもたらした要因について調べていきましょう。」</p> <p>4-2 「WS1にあるように、この曲は6つの部分に分けられます。もう一度全体を聴きますので、6つの部分ごとに、あらためて感じた印象を書いていってください。あるいは、黒板の印象と同じであれば、その番号をWSの6つの欄の中に書いてもいいですよ。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・黒板を、資料1の点線のように6つのエリアにわけ、それぞれ1(の部分)～6(の部分)の番号を記す。曲の推移にしたがって、以下のような表示を移動させ、今日の部分が演奏されているかをわかるように示す。 <div style="text-align: center; margin: 10px 0;">  <p>今はここだよ</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・クラスの実態に応じ、6つのグループを作り、グループごとに担当する部分を決め、そこに集中させて聴かせてもよい。 	鑑①

<p>4-3 「それでは、6つの部分ごとに感じ取った印象を述べてもらいましょう。」</p> <p>4-4 「ここで一つ聞きますが、1回目に聴いた時と2回目に聴いた時とで印象が変わった人はいませんか。あるいは、1回目では何も感じなかったけれど2回目には何か感じた人はいませんか。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・述べられたことは、適宜、再度鑑賞させて確かめていく。 ・対話形式で、「それについてどう思う?」「違った捉え方をした人はいませんか?」のように進めていく。 ・4-3 はたっぷり時間をかける。 <p>・どのように変わったのか、あるいは1回目には印象が捉えられず2回目にできた生徒にはどうしてそれができたと思うか尋ねる。</p>	鑑①
<p>5. 「音楽を含め、事物を直感で捉えることの意味や重要性について考える。」</p>		
<p>5-1 「さて、今日は音楽を直感で捉えることと、捉えたことの要因を探ってきました。要因は、楽器の音色や旋律などにあったことがわかりましたし、その要因に注目すると印象を捉えやすくなることがわかりましたね。学校で音楽鑑賞をすることの目的の1つは、これから皆さんが生きていく上で、直感で物事を捉えることのできる感性を育てることです。そのために、音楽の仕組みや歴史なども勉強するわけです。もちろん、音楽の授業では音や音楽に対する感性を養いますが、人生においては、いろいろな物事に巡り合いますね。この時間の最初にも述べましたが、人との出会いもそうです。では、なぜ、直感や、直感で物事を捉えることが人生において大事なのでしょうか。考えを述べ合ってみましょう。」</p> <p>5-2 「最後になりますが、今日聴いた曲は《秘儀Ⅰ 一管楽合奏のための一》という曲でした。作曲した西村朗さんの「作品解説」(資料2)を配りますので、皆さんが感じたことと比較しながら読んでおいてください。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・述べ合う後、あるいは述べ合った後に、自分の意見をWSに記述させてもよい。 <p style="text-align: center;">＜予想される意見＞</p> <ul style="list-style-type: none"> ・危険を察知していくため。 ・頭で考えなければ感動できないようでは困る。 ・そもそも感じるということは、瞬間的なもののような気がする。直感で感じる、のではないか。 ・人との出会いの場合、だんだんと理解していくことも大事だけれど、それではなかなかコミュニケーションが図れないので。 <p style="text-align: right;">等。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料2を配布する。 ・この「作品解説」をもとに、作曲者の表現意図と表現方法、あるいは鑑賞者のイメージと対比させるなど、さらにもう1時間かけて発展させてもよい。 	E①

9. 資料 :

◆ワークシート

この曲を聴いて、直感で捉えたことを書きましょう。

【メモ欄】

第1の部分	第2の部分	第3の部分
第4の部分	第5の部分	第6の部分

◆資料1 板書の記入エリア

A	B	C	D
	E	F	G

◆資料2

《秘儀 I - 管楽合奏のための - 》の作曲者、西村朗氏による「作品解説」		
楽曲全体について		
<p>この曲のタイトルにいう「秘儀」は宗教的な架空の儀式を意味している。それは秘教的な性格を持つもので、シャーマニズムに属する類のものである。「秘儀」はシャーマニン（巫女）の舞踊を中心にして展開される。その舞踊は旋回舞踊であり舞踊者は旋回しつつ忘我（トランス状態）に達し、招魂・招霊・降神の媒体となるに至る。</p> <p>この曲はそうしたシャーマンの秘密の舞踊儀式のための舞曲である。後半の8分の9拍子や6拍子は、舞踊が旋回性のものであることと関係している。曲中には速いテンポの点描音群ホケトゥスやヘテロフォニーといった語法の展開が見られ、東アジアや東南アジアの伝統的な宗教音楽（儀式）の一部の影響もみられる。</p>		
第1の部分	第2の部分	第3の部分
冒頭から第31小節までは儀式の開始を告げる前奏部。	第32小節からは序の舞曲。木管楽器群に16分音符のスタッカートの波動。アクセント位置のずれによる点描。金管楽器群はケチャに基づくホケトゥスを奏する。	第64小節からは遅い舞曲。木管楽器群がエロティックな旋律のヘテロフォニックな絡みを官能的に奏する。
第4の部分	第5の部分	第6の部分
第97小節からは8分の9拍子による第1の旋回舞曲。	第113小節からは8分の6拍子による第2の旋回舞曲。	第184小節からは終結部。旋回舞踊の興奮恍惚のきわみに至り舞踊者（シャーマン）はトランス状態で失神する。

『バンド維新 2008 スコア集』, Hustle Copy, p.3より

(宮下 俊也)

1. 題材の趣旨：

「音楽Ⅲ」では、幼稚園教諭や保育士を目指す高校生の選択履修が多いことを踏まえ、懐かしく理解しやすい童謡を教材として、楽しく意欲的な批評活動を取り上げる。

本題材は、昭和34年から今も放映されているNHK「おかあさんといっしょ」の歴代の「うたのおねえさん」が歌う童謡を、声や歌い方に注目して聴き、55年間におけるそれらの変化と普遍性について考える。また、人々のくらしや社会の変化に伴い、歌の声や歌い方にも、普遍的な価値観とその時々によって変遷する価値観があることを理解する。

「おかあさんといっしょ」のうたのおねえさんは、これまで、初代の真理ヨシコから現在の三谷たくみまで20人登場してきた。19代までのおねえさんを声や歌い方を観点に評価した先行研究¹⁾では、統計的処理を経て次の5つのクラスター(類似グループ)に分類されている。

クラスターA	中野慶子(2代)・竹前文子(3代)・中川順子(5代)
クラスターB	片桐和子(6代)・瀬端優美子(7代)
クラスターC	水谷玲子(4代)・森晴美(8代)・斉藤昌子(9代)・斉藤伸子(11代)・松熊由紀(12代)
クラスターD	奈々瀬ひとみ(13代)・しゅうさえこ(14代)・つのだりょうこ(18代)
クラスターE	真理ヨシコ(初代)・小嶋くるみ(10代)・森みゆき(15代)・神埼ゆう子(16代)・茂森あゆみ(17代) はいだしょうこ(19代)

これを見ると、おもしろいことに各クラスターのおねえさんは概ね登場した年代が連続してまとまっていることがわかる。つまり、その声と歌い方は当時の世相を表し、時代が求める価値観に即したものとも考えられる。一方、初代の真理ヨシコは現代のおねえさんのクラスターに入っていることから、真理ヨシコの声や歌い方は昔も今も変わらず普遍的な価値をもっているとも言えよう。

「歌は世につれ世は歌につれ」と言われるが、歌、そして歌う声や歌い方もまた社会・文化と関わって価値が形成されること、あるいは、社会・文化が変わろうとも「よいもの」として人々に受け入れられ続けていくものであることなど、童謡を通して理解し、人間や社会にとっての歌の意味を考えさせたい。

2. 指導内容・ねらい：

【指導内容】・音楽の素材としての音

・我が国や諸外国の音楽における様々な声

【ねらい】・発音法、発声法、歌唱法などによってもたらされる声の音色の特徴と楽曲のよさや美しさとの結び付きの理解

3. ESDとして獲得を期待する力(「ガイド」より)：

・(音楽)文化の多様性を理解し、尊重する態度

4. 思考させるテーマ(「ガイド」より)：

・⑥「『歌は世につれ世は歌につれ』といいますが、声や歌い方に注目して過去や現代の日本の歌を聴き、時代によって変化している点や普遍的な点を見つけ出し、社会との関わりという点で意見を述べ合ってみましょう。」

5. 教材：

・『NHKおかあさんといっしょ 40年の300曲』(コロムビアミュージックエンタテインメント)より数曲。

・『NHKおかあさんといっしょ 最新ベスト このゆびとまれ』(ポニーキャニオン)より数曲。

6. 題材目標：

- (1) 「おかあさんといっしょ」における歴代のうたのおねえさんの声や歌い方についての価値観が、時代によって変遷したり、時代を超えても保たれたりしていることについて関心をもつ。
- (2) 声と歌い方について観点に即して評価し、当時の社会と考え合わせて特徴を理解する。
- (3) 理解した特徴を基に、声や歌い方に対する価値観が時代によって変遷したり、時代を超えても保たれたりしていることについて、その理由を考え述べることができる。

7. 評価計画：

評価の観点	評価規準	評価方法・対象
音楽への関心・意欲・態度	関① 声や歌い方に対して与えられた観点で評価し、時代と関わらせながら特徴を見出すことに関心をもって取り組んでいる。 関② 声や歌い方に対する価値観は、時代によって変遷したり、時代を超えて保たれたりしていることについて、積極的にその理由を考えている。	観察・WS 発言・WS
鑑賞の能力	鑑① 聴き取った声や歌い方を観点に即して評価し、それらの特徴について当時の社会と考え合わせて意見をもつことができている。	WS・発言
ESD として獲得を期待する力 (方向目標として継続的にアセスメントしていく観点)	E① 声や歌い方に対する価値観が、社会から影響を受けて変化したり、また普遍であったりすることの意味を考え、人間や社会にとっての歌の意味について、自分なりの考えを示している。	WS・発言

8. 題材の指導計画：

時	学習活動の内容と教師の発問例	指導上の留意点	評価
1	1. 声や歌い方を評価する。		
1-1	「今日は皆さんが幼い頃歌ったり聴いたりした童謡を鑑賞します。懐かしみながら、でも高校3年生ですから、『声』と『歌い方』に注目して聴き、評価してみましょう。」 ・以下の順でそれぞれ2回ずつ聴き、WS1に記入させる。 1. 《おはながわらった》 2. 《おんまはみんな》 3. 《おばけなんてないさ》 4. 《どこでねるの》 5. 《公園にいきましょう》	・曲ではなく「声」と「歌い方」に注目することを強調する。 ・グループごとに1曲を聴き、評価ポイントの平均値を出してみてもおもしろい。	関①
2. グループで特徴を話し合い、発表し、再度聴きながら確認する。			
2-1	「グループでそれぞれの声と歌い方について話し合ってみましょう。」	・評価結果も参考にしながら話し合うように伝える。評価ポイントの平均値を出させてもよい。	関①
2-2	「グループで出た意見をまとめて発表してください。まとめられた特徴の他に、『グループの中ではこんな意見もありました』と紹介してくれてもいいですよ。」	・1グループ1曲ごと発表させ、板書し、もう1度聴いて確認させる。 ・他のグループからも関連意見があれば述べさせる。	鑑①
3. 歌われた年代を示し、時代によって特徴に違いがあるか考える。			
3-1	「さて、これまで聴いた童謡は、NHK『おかあさんといっしょ』の『うたのおねえさん』が歌っていたものです。『おかあさんといっしょ』は、昭和 34 年から今も続いている長寿番組で、日本の童謡の歴史を刻んできた番組とも言えます。資料1の表1を見て下さい。1曲目を歌っていたのは3代目おねえさんの竹前文子さんです。番組に出演していたのは昭和 37 年～39 年です。2曲目を歌っていたのは…。」		
3-2	「そしてある研究者が、皆さんと同じように 20 人のおねえさんの声と歌い方を評価して、似た声と歌い方のおねえさん同士をまとめたのが表2です。これを見て何か気が付いたことはありますか。」	・おおよそ、年代が続いているお姉さんごとにまとまっていること、初代の真理さんが現代のおねえさんのグループに入っていることに気付かせる。	
3-3	「おおよそ年代ごとにまとまっている、ということは、時代によって歌い方や声が異なるのではないかと、思いませんか。皆さんが聴いたおねえさんは、それぞれのグループから選んだ人たちです。昭和 30 年代、40 年代、50 年代、平成の時代に活躍した人たち、ということ	・声や歌い方の特徴を比較すること、その時代の社会の様子や子どもたちのくらしなどと特徴を重ね合わせながら聴かせる。	関②

	<p>になりますね。ではもう一度順に聴いてみるので、昭和 30 年代、40 年代、50 年代、平成の時代で、その時代の社会の様子や子どもたちのくらしなどを想像しながら、それぞれを比較して聴いてみましょう。WS1の記述欄に追記してもよいですよ。」</p> <p>3-4 「考えたことを述べてみましょう。特徴の違い、当時の社会の様子や子どもたちのくらしなどと関連させて述べてね。」</p> <p>3-5 「『歌は世につれ世は歌につれ』という言葉を知っていますか。童謡の歌い方や声も『世』(その時々の人々やくらし、社会など)を反映して移り変わって行っているのかも知れませんね。」</p>	<p>・出された意見は板書する。</p> <p><予想される意見> 「竹前さんは語りかけるように言葉を丁寧に歌っている。昭和 30 年代は親子関係が今よりずっと密接で、母と子がいっしょに歌を歌っていたような時代だったのではと思った。」 「森さんはアニメの主題歌や登場人物を思わせるような声と歌い方だ。テレビ番組の影響かなあ。」</p>	鑑①
2 4. 時代を超えても変わらない声、歌い方について考える。			
	<p>4-1 「ところで、真理ヨシコさんは初代のおねえさんなのに、現代のグループに入っていますね。これはいったいどういうことでしょうか。今でも歌われている《サッチャン》と《あめふりくまのこ》を真理さんの当時の録音で聴いてみましょう。」</p> <p>4-2 「昭和 30 年代に親しまれた真理さんの歌い方や声が、現代の子どもたちにも親しまれているのはどうしてか考え、述べ合ってみましょう。」</p>	<p>・WS1 を使って評価させてもよい。</p> <p>・グループEの他のおねえさんの歌と合わせて聴かせてもよい。</p>	鑑①
5. 歌とともに、声や歌い方もまた人々のくらしや社会の影響を受けて価値が形成されることを考え、理解する。			
	<p>5-1 「童謡に限らず、歌は私たちのくらしや社会と密接に関わっていることは皆も理解していると思いますが、歌を歌う声や歌い方もまた、それらに関わっていることを学びました。ではどうしてくらしや社会から影響を受けて変化するのか、また一方で時代を超えてもよさが変わらない声や歌い方があるのはどうしてか、考え述べ合ってみましょう。まず、WS2に自分の意見をまとめ、もう一つの欄に、他の人の意見でなるほどなあ、と思うことがあったら書き留めてみましょう。」</p> <p>5-2 「最後になりますが、歌は人間や社会にとってどのような存在なのでしょう。これから先も、歌ったり歌を聴いたりしながら考え続けてほしいのですが、これまでの学習を振り返って何か意見のある人はいますか。」</p> <p>5-3 「それでは昭和20年代から歌われ続けている《ぞうさん》を、真理ヨシコさんの歌で聴いて終わります。」</p>	<p>・出された意見を板書してまとめていく。</p> <p>・歌とともに、声や歌い方もまた人々のくらしや社会の影響を受けて価値が形成されることを理解させる。</p> <p>・これからの社会において、どのような童謡や、童謡を歌う声、歌い方が受け入れられていくか、想像させてもよい。</p> <p>・歌を歌う声や歌い方は時代によって様々であっても、童謡が今も歌い継がれていることなどをヒントに与えてもよい。</p>	関② E①

1) 溝口展子「NHK『おおかさんといっしょ』における歌のおねえさんの歌唱表現分析」,平成16年度奈良教育大学卒業論文

9. 資料：

◆ワークシート1

1. 竹前文子さん（ 代 年～ 年） 《おはながわらった》							
評価の観点	評価（数字が大きいほど評価が高い）						
(1) 言葉がはっきり聞こえるか。	1	2	3	4	5	6	7
(2) 音程が正しいか。	1	2	3	4	5	6	7
(3) 歌い方が自然か。	1	2	3	4	5	6	7
(4) フレーズを意識して歌っているか。	1	2	3	4	5	6	7
(5) 声が明るいか。	1	2	3	4	5	6	7
(6) 表情豊かに歌っているか。	1	2	3	4	5	6	7
(7) 子どもに伝えようとして歌っているか。	1	2	3	4	5	6	7
歌い方と声についての特徴をメモしよう。							

2. 瀬端優美子さん（ 代 年～ 年） 《おんまはみんな》							
評価の観点	評価（数字が大きいほど評価が高い）						
(1) 言葉がはっきり聞こえるか。	1	2	3	4	5	6	7
(2) 音程が正しいか。	1	2	3	4	5	6	7
(3) 歌い方が自然か。	1	2	3	4	5	6	7
(4) フレーズを意識して歌っているか。	1	2	3	4	5	6	7
(5) 声が明るいか。	1	2	3	4	5	6	7
(6) 表情豊かに歌っているか。	1	2	3	4	5	6	7
(7) 子どもに伝えようとして歌っているか。	1	2	3	4	5	6	7
歌い方と声についての特徴をメモしよう。前の曲と比較してもよいですよ。							

3. 森晴美さん（ 代 年～ 年） 《おばけなんてないさ》							
評価の観点	評価（数字が大きいほど評価が高い）						
(1) 言葉がはっきり聞こえるか。	1	2	3	4	5	6	7
(2) 音程が正しいか。	1	2	3	4	5	6	7
(3) 歌い方が自然か。	1	2	3	4	5	6	7
(4) フレーズを意識して歌っているか。	1	2	3	4	5	6	7
(5) 声が明るいか。	1	2	3	4	5	6	7
(6) 表情豊かに歌っているか。	1	2	3	4	5	6	7
(7) 子どもに伝えようとして歌っているか。	1	2	3	4	5	6	7
歌い方と声についての特徴をメモしよう。これまで聴いた曲と比較してもよいですよ。							

4. しゅうさえこさん (代 年～ 年) 《どこでねるの》							
評価の観点	評価 (数字が大きいほど評価が高い)						
(1) 言葉がはっきり聞こえるか。	1	2	3	4	5	6	7
(2) 音程が正しいか。	1	2	3	4	5	6	7
(3) 歌い方が自然か。	1	2	3	4	5	6	7
(4) フレーズを意識して歌っているか。	1	2	3	4	5	6	7
(5) 声が明るいか。	1	2	3	4	5	6	7
(6) 表情豊かに歌っているか。	1	2	3	4	5	6	7
(7) 子どもに伝えようとして歌っているか。	1	2	3	4	5	6	7
歌い方と声についての特徴をメモしよう。これまで聴いた曲と比較してもよいですよ。							

5. 茂森あゆみさん (代 年～ 年) 《公園にいきましょう》							
評価の観点	評価 (数字が大きいほど評価が高い)						
(1) 言葉がはっきり聞こえるか。	1	2	3	4	5	6	7
(2) 音程が正しいか。	1	2	3	4	5	6	7
(3) 歌い方が自然か。	1	2	3	4	5	6	7
(4) フレーズを意識して歌っているか。	1	2	3	4	5	6	7
(5) 声が明るいか。	1	2	3	4	5	6	7
(6) 表情豊かに歌っているか。	1	2	3	4	5	6	7
(7) 子どもに伝えようとして歌っているか。	1	2	3	4	5	6	7
歌い方と声についての特徴をメモしよう。これまで聴いた曲と比較してもよいですよ。							

6. 真理ヨシコさん (代 年～ 年) 《サッチャン》《あめふりくまのこ》							
評価の観点	評価 (数字が大きいほど評価が高い)						
(1) 言葉がはっきり聞こえるか。	1	2	3	4	5	6	7
(2) 音程が正しいか。	1	2	3	4	5	6	7
(3) 歌い方が自然か。	1	2	3	4	5	6	7
(4) フレーズを意識して歌っているか。	1	2	3	4	5	6	7
(5) 声が明るいか。	1	2	3	4	5	6	7
(6) 表情豊かに歌っているか。	1	2	3	4	5	6	7
(7) 子どもに伝えようとして歌っているか。	1	2	3	4	5	6	7
歌い方と声についての特徴をメモしよう。これまで聴いた曲と比較してもよいですよ。							

◆資料1

表1

代	おねえさん氏名	年代
初	真理ヨシコ	昭和36年～37年
2	中野慶子	昭和36年～39年
3	竹前文子	昭和37年～39年
4	水谷玲子	昭和39年～42年
5	中川順子	昭和42年～45年
6	片桐和子	昭和45年～48年
7	瀬端優美子	昭和45年～48年
8	斉藤昌子	昭和45年～47年
9	森 晴美	昭和45年～46年
10	小嶋くるみ	昭和47年～49年
11	斉藤伸子	昭和49年～54年
12	松熊由紀	昭和49年～54年
13	奈々瀬ひとみ	昭和54年～56年
14	しゅうさえこ	昭和56年～58年
15	森みゆき	昭和58年～62年
16	神崎ゆう子	昭和62年～平成5年
17	茂森あゆみ	平成5年～11年
18	つのだりょうこ	平成11年～15年
19	はいだしょうこ	平成15年～20年
20	三谷たくみ	平成20年～現在

表2

グループ	代	おねえさん氏名
グループA	2	中野慶子
	3	竹前文子
	5	中川順子
グループB	6	片桐和子
	7	瀬端優美子
グループC	4	水谷玲子
	8	斉藤昌子
	9	森 晴美
	11	斉藤伸子
グループD	12	松熊由紀
	13	奈々瀬ひとみ
	14	しゅうさえこ
	18	つのだりょうこ
グループE	初	真理ヨシコ
	10	小嶋くるみ
	15	森みゆき
	16	神崎ゆう子
	17	茂森あゆみ
	19	はいだしょうこ

◆ワークシート2

<p>歌の声や歌い方はどうしてくらしや社会から影響を受けて変化するのでしょうか。また時代を超えてもよさが変わらない声や歌い方があるのはどうしてでしょうか。</p>	
自分の考え	友だちから出た考え

(宮下 俊也)

1. 題材の趣旨：

高校生は世界に存在する楽器をどのくらい知っているだろうか。そもそも楽器とは何であり、どのように分類され、人間との関係はいかなるものなのか。これらを考えることは、「音楽の素材としての音」を知ることにとどまらず、音楽と人間との関係や多文化を理解するための一つのアプローチになる。

本題材は、世界のあらゆる楽器がどのように分類されてきたか、まず「楽器分類学」を視かせ、楽器(の個別名)やその種類が膨大であることに驚きをもたせることから始める。さらに、音が出る可能性のある物体(例えば石、木、竹、貝、など)に対して、人間がどのような理由で、どのようにして音を出そうとしたのかを考える。そこではナイジェリアの調緒楽器の音や演奏を聴き、トーキング・ドラムとして用いられてきたことを例に挙げる。そして、世界の音楽文化の多様性理解へと繋げていく。

2. 指導内容・ねらい：

【指導内容】・音楽の素材としての音

・楽器の音

【ねらい】・楽器の材質、形状、発音原理、奏法などによってもたらされる楽器の音色と音楽のよさや美しさとの結び付き

3. ESDとして獲得を期待する力(「ガイド」より)：

・(音楽)文化の多様性を理解し、尊重する態度

4. 思考させるテーマ(「ガイド」より)：

・⑩「人間はなぜ楽器をつくり出し、楽器を使って表現するのか、その意味について、楽器の材質や音色を視点に考え、意見を述べ合ってみましょう。」

5. 教材：

・楽器の分類についての研究成果

・《オバタラ》《オロ》《オシユン》(ナイジェリアのトーキング・ドラムによる演奏)(CD：KICW-85042)

6. 題材目標：

- (1) 楽器の分類や、ナイジェリアのドゥンドゥン(トーキング・ドラム)の特徴を理解し、人間と楽器の関わりについて関心をもつ。
- (2) ドゥンドゥンの音色を知覚・感受し、ナイジェリアの音楽表現と楽器の役割について理解する。
- (3) トーキング・ドラムを例に、楽器を視点に音楽文化の多様性を知り、それを尊重する態度を養う。

7. 評価計画：

評価の観点	評価規準	評価方法・対象
音楽への関心・意欲・態度	関① 楽器の多様性や人間と楽器の関わりについて、関心をもって考え、意見を述べている。	発言 観察
鑑賞の能力	鑑① ドゥンドゥンの音色を知覚・感受している。 鑑② トーキング・ドラムを基に、音楽表現における楽器の役割について理解している。	発言 WS
ESDとして獲得を期待する力 (方向目標として継続的にアセスメントしていく観点)	E① 人間と楽器の関わりを基に、音楽文化の多様性について自分の意見を述べている。	発言 WS

8. 題材の指導計画：

時	学習活動の内容と教師の発問例	指導上の留意点	評価
1	1. 楽器の分類を知る。		
	1-1 「皆さんはこれまでの学習や経験を通して、様々な楽器を知ってきたことと思います。ところで、楽器ってどのような種類に分類されるか知っていますか。」	<ul style="list-style-type: none"> 例えば、「管楽器・弦楽器・打楽器」の3分類などが予想される。 	
	1-2 「では、資料1を見てください。メルセンヌの分類と、プレートルイウスの分類を見て、何か気付いたことはありますか。」	<p><予想される発言></p> <ul style="list-style-type: none"> 「分類内容は似ている。」 「メルセンヌの方は楽器の構造で示しているが、プレートルイウスの方は演奏(音の鳴らし方)を示している。」 「どちらも古い時代の分類なので、その当時の楽器の分類しかされていない。」 <p>等</p>	関①
	1-3 「そうだね。皆さんが知っている『管楽器・弦楽器・打楽器』という分類の仕方に似ているかもしれません。では、資料2の分類を見てみましょう。これは何を観点に分類したものだと思いますか。また資料1の2つの分類とは何が違うと思いますか。」	<p><予想される発言></p> <ul style="list-style-type: none"> 「発音原理によって分類されている。」 「メルセンヌの分類やプレートルイウスの分類と似ているけど、もっといろいろな楽器(民族楽器も)を網羅できるように思える。」 	関①
	1-4 「マイヨンは、この分類にしたがって約 3300 もの楽器の解説を行っているそうですよ。では、もっとすごい分類を見せましょう。それは1948年に発表されたホルンボステルとC.ザックスによる分類です(資料3)。何か分類法で気が付いたことはありますか。」	<ul style="list-style-type: none"> 図書の「国際十進分類法」(＝デューイ十進分類法)に似ていることなどが挙げられたら、デューイのそれを採用して分類したことを述べる。 電子楽器などが入らないことに気が付いた発言が出たら、フランシス・ウィリアム・ガルピン(1938年)、ザックス(1940年)、フッド(1971年)が「電鳴楽器」を加えたことを述べる。 いくつかの楽器名や楽器を見せたり鳴らしたりして、どこに分類されるか考えさせてみる。 <p><例></p> <ul style="list-style-type: none"> 拍子木→111. 11 でんでん太鼓→212. 22 箏→312. 22 リコーダー→421. 221. 12 <p>等</p>	関①
2. ナイジェリアの音楽《オバタラ》《オロ》を鑑賞し、トーキング・ドラムについて知る。			
	2-1 「それでは、ナイジェリアの音楽《オバタラ》を聴いてみましょう。そこで主役となっている太鼓の音色を聴き、どのような太鼓かを想像してみましょう。」	<ul style="list-style-type: none"> 構造と音色の特質について述べさせる。 <p><予想される発言></p> <ul style="list-style-type: none"> 「ピッチを変化させることができる。」 「筒状で膜が張ってある」 <ul style="list-style-type: none"> ピッチの高低というより、音質が「鋭いー鈍い」の違いであることを述べる。このことについては川田順造が「音質の鋭・鈍(きこえとしては高・低だが、ピッチの高低ではない)」と述べている¹⁾。 《オバタラ》についてその内容を述べてもよい 	鑑①

	<p>2-2 「もう1度聴いてみましょう。どのように演奏することで音質の違いを出しているのでしょうか。」</p> <p>2-3 ドゥンドゥンやイヤイル(ナイジェリア・ヨルバ語)を見せ、音を鳴らしてみる。</p> <p>2-4 「さて、もう 1 曲、同じナイジェリアの《オロ》を聴いてみましょう。このCDの解説には次のように書かれています。『(この太鼓の音は)次に出る歌のこぼを導く役割でしばしば用いられている。どこで太鼓が「しゃべっている」か、当ててみるのも一興だろう』。さあ、わかるでしょうか。」</p> <p>2-5 「解説には『太鼓がしゃべっている』とありましたが、ドゥンドゥンやイヤイルは、『楽器音で音調言語のトーンをなぞって言語メッセージを伝える』ためにアフリカでは用いられたこともあったそうです。」</p>	<p>(KICW-85042 の解説、p.9)。</p> <p><予想される発言></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「叩く位置を変えている。」 ・「鼓のように締め方を変えているのでは。」 <p>・実際に触れさせ、叩き方(担ぎ方)や締め方などを考えさせてもよい。</p> <p>・イヤイルの他に、カナンゴ、オメル、ガンガンなどもあれば見せたり叩かせたりする。</p> <p>・調緒を締めたり緩めたりして、「鋭いー鈍い」を知覚させ、雰囲気述べさせる。</p> <p>・ホルンポステルと C.ザックスによる分類では、どこに位置付くか考えさせる。</p> <p>・次に歌われる言葉のリズムを先取りしていたり、強さが歌で反復されたりしている箇所に気付かせ、確認する。</p> <p>・そのことと合わせ、太鼓の音色が声に似ていることなどを感受させる。</p> <p>・《オロ》についてその内容を述べてもよい(KICW-85042 の解説、p.9)。</p> <p>・クラスの実態に応じ、生活におけるこの太鼓の役割は何であったかを考えさせ、言語音として伝達する機能をもっていたことを発見させてもよい。</p> <p>・「トーキング・ドラム」について理解させる。なお、トーキング・ドラムは「太鼓が言語音を伝達するという機能を指している」ので、太鼓の名称ではない。太鼓の名としては、日本語なら『調べ緒太鼓』とか『砂時計型太鼓』がいいし、ヨルバ語なら総称は『ドゥンドゥン』その中に『イヤイル』ははじめさまざまな型と、それぞれの奏法や役割がある¹⁾ことを伝える。</p>	<p>鑑①</p> <p>鑑②</p> <p>関①</p>
<p>2 3. 人間と楽器の関係について考える。</p>	<p>3-1 「次に、1974 年、比較的新しいものですが、ライネッケの分類(資料4)を見てみましょう。Bの分類の仕方を見て、【】には何と記したらよいか考えましょう。また、『楽器の物理的、音響的構造を文化としての音楽の内容にまで結び付けてとらえるようになった』²⁾ことはどうしてか、述べ合ってみましょう。」</p> <p>3-2 「最後にもう1曲、同じナイジェリアの《オシュン》を聴いてみましょう。先に言ってしまうですが、この曲は『俺は彼女と結婚する』という『強い愛の表明の歌』¹⁾です。この曲の特徴でもあるドゥンドゥンと女性との応答を聴き取りながら、WS1に</p>	<p>・Bは、【文化としての音楽の内容による分類】となる。</p> <p>・トーキング・ドラムや、小中学校で行った手づくり楽器製作などをヒントに、人間と楽器の関係について、以下を問いかけながら考えさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人間はなぜ楽器をつくり出したのか。 ・楽器となる素材や、それを用いて音を出すことと、人間の生活はどう関係しているのか。 <p>・《オシュン》については、KICW-85042 の解説、p.8を用いて補足してもよい。</p> <p>・ドゥンドゥンの効果や、ナイジェリアの風土を想像しながら、意見を述べさせる。</p>	<p>E①</p> <p>E①</p>

<p>ついて、あなたの考えを書き、書き終わった後で述べ合ってみましょう。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ライネッケの分類ではドゥンドゥンがどこに相当するのかを考えさせてもよい。 ・求愛を音楽で表現することにも、その土地に根ざした多様性があることを理解させる。 ・クラスの実態に応じて「多様性」の意味が理解できるよう配慮する。
---	---

9. 資料：

◆資料1

<p style="text-align: center;">メルセンヌの分類 (1613)</p> <p>I 弦を張った楽器</p> <ul style="list-style-type: none"> A. モノコード B. ネック (棹) のある楽器 C. ネックのない楽器 D. 弓奏する楽器 <p>II 吹いて鳴らす楽器</p> <ul style="list-style-type: none"> A. ミルリトン B. 簡単なパイプ C. 1本のパイプ <ul style="list-style-type: none"> まっすぐな管 曲った管 D. リード・パイプ E. オルガン <p>III ぶついたり、打ったりして鳴らす楽器</p> <ul style="list-style-type: none"> A. カリヨン B. カスタネット C. シンバル (トライアングル) D. ジューズ・ハーブ (口琴) E. ドラム F. 金属、石、木のチャイム 	<p style="text-align: center;">プレトリーウスの分類 (1618)</p> <p>I 空気によって鳴らす楽器</p> <ul style="list-style-type: none"> A. 自然の空気による B. 人の息による <p>II 打って鳴らす楽器</p> <ul style="list-style-type: none"> A. 鉄や木の桴による B. 木槌や小球による <p>III 弦が張ってある楽器</p> <ul style="list-style-type: none"> A. ガット弦をもち美しい和音を出す B. ガット弦や金属弦で弾奏や打奏 <p>IV その他の楽器</p>
---	---

『新訂 標準音楽辞典』, ア〜テ, 音楽之友社, 1991, p. 399 より抜粋

◆資料2

<p style="text-align: center;">マイヨンの分類 (1922)</p> <p>I. 体鳴楽器 音が物体自身の弾力によって発生するもの。</p> <p>II. 膜鳴楽器 音が弾力のある皮膜の振動によって発生するもの。</p> <p>III. 気鳴楽器 音が特殊容器内の空気の振動発生装置によって生ずるもの。</p> <p>IV. 弦鳴楽器 音が弦の振動によって発生するもの。</p>	
---	--

『新訂 標準音楽辞典』, ア〜テ, 音楽之友社, 1991, p. 400 より

◆資料3

ホルンボステルとC. ザックスによる分類 (1914)

『音楽大事典』2巻(平凡社, 1990)のpp. 575-580、または『ニューグローヴ 世界音楽大事典』4巻(講談社, 1994)の巻末資料を提示する。適宜、地域名や楽器名の例の部分は削除して配布してもよい。また、『新訂 標準音楽辞典』ア～テ(音楽之友社, 1991)の, pp. 401-408には奏法についての具体が示されているので適宜利用するとよい。

◆資料4

ライネッケの分類 (1974)

【A 物理的・音響的構造による分類】

- (1) トランペット楽器
- (2) フルート楽器
- (3) ベル／ゴング楽器
- (4) 弦楽器



【B 精神・文化的・社会的な意味による分類】

- 1. 人間の限られた力や定まった運命や大自然の力にたいする畏敬
- 2. 死の対照としての豊かさや復活を意味する生命
- 3. あまねく認められた権威
- 4. 知恵や洞察力の情動的調和をもたらす秩序の力の認識

『新訂 標準音楽辞典』, ア～テ, 音楽之友社, 1991, p. 401 より

◆ワークシート1

求愛の歌は世界各地にあります。この《オシュン》を聴きながら、「音楽の多様性」を認め合うことの意義についてあなたの考えを書きましょう。その時、「音楽の多様性」という語を用い、ドゥンドゥンの効果についても触れなさい。

本事例の作成に当たっては、以下の文献を参考にした。

- ・川田順造 CD (KICW-85042) の解説
- ・『新訂 標準音楽辞典』, ア〜テ, 音楽之友社, 1991
- ・『ニューグローヴ 世界音楽大事典』4巻, 講談社, 1994
- ・『音楽大事典』2巻, 平凡社, 1990
- ・クルト・ザックス (柿木吾郎訳) 『楽器の歴史』上, 全音楽譜出版社, 2002

- 1) 川田順造 CD (KICW-85042) の解説, pp. 6-9
- 2) 『新訂 標準音楽辞典』, ア〜テ, 1991, 音楽之友社, pp. 398-409

(宮下 俊也)

1. 題材の趣旨：

アルベルト・アインシュタイン (Albert Einstein) が音楽を愛し、自らもヴァイオリンやピアノを弾いていたことは有名である。科学者、特に、寺田寅彦や小柴昌俊など物理学者には音楽を愛した人が多いようだ。また逆に、ボロディン、キュイ、湯浅譲二など、科学 (医学、化学、工学など) を学んだ後に作曲家になった人物も多々いる。音楽には平均律や音響などのように科学的な側面があり、それを対象とする理系的学問研究も多くなされているが、科学者がなぜ音楽や芸術に惹かれるのかは、高校生にとっても魅力的な思考のテーマになるだろう。

本題材は、アインシュタインが愛したとされるモーツァルトのヴァイオリンソナタ、そして化学者であり作曲家でもあるボロディンの《ダッタン人の踊り》を、アインシュタインやボロディンになったつもりで、楽曲の構造に視点を置き、「美しさ」や「味わい」を楽しみ、人間が音楽を愛好する理由を考える。そして、たとえば受験を意識して「文系人間」「理系人間」のように考える高校生に対し、人間が生きていく上で、科学的な視野と芸術的な視野の両方をもつこと (= 真実と美の両方を追求すること) の必要性を理解させたい。

2. 指導内容・ねらい：

【指導内容】・音楽の構造

・音楽を形づくる要素、要素同士の関わり方とそれらの働きがもたらす質

【ねらい】・要素及び要素同士の関わり方を知覚し、それらの働きがもたらす質のうち、特に「美しさ」や「味わい」に注目した音楽の認識

3. ESDとして獲得を期待する力(「ガイド」より)：

・事物や事象を客観と主観によって捉え、考える力

4. 思考させるテーマ(「ガイド」より)：

・⑭「アインシュタイン、コッホ、グラシヨウ、小柴昌俊など、一流の科学者で音楽を愛好している人が多いのはなぜなのか、話し合ってみましょう。」

5. 教材：

・モーツァルト作曲《ピアノとヴァイオリンのためのソナタ 第28番 ホ短調 K.304》第1楽章

・ボロディン作曲 《ダッタン人の踊り》(歌劇《イーゴリ公》より)

6. 題材目標：

- (1) 鑑賞曲の構造や楽曲全体の特徴を、興味・関心をもって意欲的に捉える。
- (2) 鑑賞曲の特徴や美しさ、味わいを理解し、言葉で述べるができる。
- (3) 「アインシュタインの言葉」や、化学者としてのボロディンと関連付けながら、人が音楽を愛好する理由や、科学的な視野と芸術的な視野の両方をもつこと (= 真実と美の両方を追求すること) の意味を考え、理解する。

7. 評価計画：

評価の観点	評価規準	評価方法・対象
音楽への関心・意欲・態度	関① 鑑賞曲の構造や楽曲全体の特徴を、興味・関心をもって意欲的に捉えようとしている。	発言・WS
鑑賞の能力	鑑① 鑑賞曲の特徴を、構造に対する知覚・感受を基に捉え、言葉で述べている。 鑑② 科学者が愛した曲、科学者が作曲した曲ということを念頭に置き、鑑賞曲の美しさや味わいを捉えている。	発言・WS 発言・WS
ESDとして獲得を期待する力 (方向目標として継続的にアセスメントしていく観点)	E① 人が音楽を愛好する理由や、科学的な視野と芸術的な視野の両方をもつこと (= 真実と美の両方を追求すること) の意味を考え、理解している。	発言・WS

8. 題材の指導計画：

時	学習活動の内容と教師の発問例	指導上の留意点	評価
1	<p>1. 「アインシュタインの言葉」からその意味を考える。</p> <p>1-1 「相対性理論で有名なアインシュタインを知っていますね。相対性理論については物理で学ぶかもしれませんが、今日は、アインシュタインと音楽について考えてみます。ここに『アインシュタインの 150 の言葉』という本があります。その中の1つを紹介しましょう。これはどういうことか、意見を述べ合ってみましょう。」</p>	<p>・以下を提示する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>わたしたちが体験しうる最も美しいものとは、神秘です。これが芸術と科学の源になります。これを知らず、もはや不思議に思ったり、驚きを感じたりできなくなった者は、死んだも同然です。</p> </div> <p>・特に「神秘が芸術と科学の源になる」とはどういうことかを、トークの中で求めていく。</p>	E①
	<p>2. 《ピアノとヴァイオリンのためのソナタ 第 28 番 ホ短調 K. 304》第 1 楽章を聴いて、特徴を探究する。</p> <p>2-1 「皆さんは知っているかどうかわかりませんが、アインシュタインは自らもヴァイオリンやピアノを弾いていたように、音楽を愛した物理学者です。その中でも特に愛したモーツァルトの《ピアノとヴァイオリンのためのソナタ》を聴いてみましょう。その第 28 番第1楽章について、アインシュタインがこの曲のどういったところに心惹かれたのかを考えながら聴いてみてください。そう、アインシュタインになったつもりでね。」</p> <p>2-2 「アインシュタインはこの曲のどんなところに惹かれたと思いますか。」</p> <p>2-3 「もう1つ、アインシュタインの言葉を紹介しましょう。これです。アインシュタインがこの曲の何を探究したか、あるいはしなかったかはわかりませんが、ここで、楽曲の仕組みから、この曲の特徴を『探究』してみましょう。」</p> <p>以下、クラスの実態に応じて、次の2つの方法をとる。</p> <p>2-3-1 「もう一度聴きますので、この曲の特徴を探してみてください。ヒントは、特徴ですから何回か出現されるものですよ。」</p>	<p>・第1楽章を全曲鑑賞する。</p> <p>・感じ取ったことや印象などについて、楽曲全体に関わることと、部分に関わることを分けて発言を板書する。</p> <p><予想される発言></p> <p>【感じ取ったことや印象について】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・悲しい感じ ・センチメンタルなところ ・苦しみに共感した <p>【客観的な音楽の仕組みについて】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初の旋律(主題) ・短調と長調の対比 ・なめらかなところと弾んだところの対比 <p style="text-align: right;">等</p> <p>・以下を提示する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>深く探求すればするほど、知らなくてはならないことが見つかる。人間の命が続く限り、常にそうだろうとわたしは思う。</p> </div> <p>・以下が発言されたら、その都度、その部分を聴かせて確認する。適宜楽譜を配布してもよい。その際、感受したことも述べさせ 2-2 と関連付ける。</p> <p><予想される発言></p> <ul style="list-style-type: none"> ・第1主題(その雰囲気と冒頭のユニゾン) ・第1主題と第2主題の対比 ・短調の部分と長調の部分の対比 	<p>関① 鑑②</p> <p>鑑①</p>

	<p>2-4 「最後にもう1つ、アインシュタインの言葉を紹介します。これを読み、WS1の問いを考えてみてください。次の時間に発表してもらいます。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスの実態に応じて、それぞれの特徴ごとにグループ(「主題探究班」「旋律探究班」「追いかけて探究班)を分け、集中して教えさせてもよい。 ・以下を提示する。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>もし、わたしが物理学者にならなかつたら、おそらく音楽家になっていたでしょう。わたしはよく音楽のようにものを考えます。音楽のように白昼夢を見ます。音楽用語で人生を理解します。わたしは音楽から人生のほとんどのよろこびを得ています。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・時間があれば、この曲について以下のことを述べてもよい。 <ul style="list-style-type: none"> ・「モーツァルトの人生の中で最高につらい時期に書かれた」¹⁾もの(母の死)。 ・モーツァルトのヴァイオリンソナタの中でこの曲だけが短調であること。 ・「ヴァイオリンソナタ」ではあるものの、「ヴァイオリンの伴奏によるピアノソナタ」とも言われていること。 	E①
<p>2 3. 《ダッタン人の踊り》を聴いて、楽曲の構造を理解する。</p>			
2	<p>3-1 「前の時間は、アインシュタインの愛したモーツァルトの曲を聴きましたが、この時間は、化学者で作曲家でもあるボロディンが作曲した《ダッタン人の踊り》を鑑賞します。まず一度通して聴いてみましょう。この曲にもいろいろ魅力的な『仕掛け』がありますが、全体の雰囲気や特徴を考えながら聴いてください。あとで感じ取ったことを述べてもらいます。」</p> <p>3-2 「まず、曲全体の雰囲気について感じたことを述べてもらおうかな。」</p> <p>3-3 「他に、これは正解はありませんが、化学者だからこそ、と思われるような特徴はありましたか。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ボロディンのことについて、以下を簡単に説明する。 <ul style="list-style-type: none"> ・少年時代、音楽への興味とともに化学に熱中した。 ・ペテルブルク大学卒業、化学と医学を専攻。卒業後陸軍病院に勤務。後にハイデルベルク大学に留学し化学を専攻。その後、ペテルブルク大学の教授となる。医学博士。 ・医科学研究のため旅行中、シューマンの作品を知り強い影響を受けた。 ・医科大学の中に女性の産科課程を設立するために奔走した。 ・生涯わたって化学者であり作曲家であった。 ・板書する。 <p>< 予想される発言 ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・東洋的な感じ ・民族舞踊の感じ ・場面転換がはっきりしている 等 <ul style="list-style-type: none"> ・板書する。 ・意見が出にくいかもしれないが、化学とは全く 	関① 鑑②

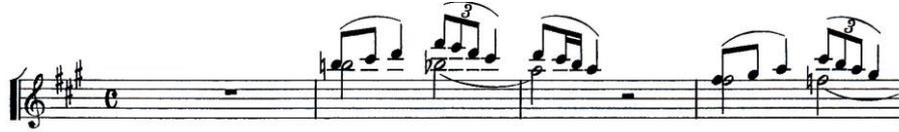
3-4 「この曲は次の5つのテーマが現れます。ピアノで弾いてみますね。」

違った面を表したかったのでは、といった意見も期待できる²⁾。

・以下の譜例を黒板に掲示して、ピアノで弾いて認識(知覚・感受)させる。

鑑①

<テーマA>



<テーマB>



<テーマC>



<テーマD>



<テーマE>



3-5 「それからこの曲は、大きく8つの部分に分かれています。それではもう一度、全曲を通して聴きます。WS2を見て下さい。部分の区切れは、そこに示してあるテーマが出てきたり、テンポや拍子が変わったりしたところです。そして、各部分で感じ取ったことや、特徴をメモして行って下さい。」

・クラスの実態に応じて、鑑賞中、部分が変わった時に、そのことを示してもよい。
 ・速度記号の意味についてはあらかじめ説明しておく。
 ・クラスの実態に応じて、一人一部分、ないはいくつかの部分を担当させて、そこに集中させて聴かせてもよい。

3-6 「では、メモしたことを基に、各部分で感じ取ったことや特徴を発表してもらいましょう。」

・WS2を拡大して黒板に掲示したり、黒板をWS2のように区切っておいたりして、そこに板書していく。
 ・適宜、各部分を再度聴かせながら確かめていく。
 ・各部分のテーマやテンポと関連付けて述べさせたり、関連を確認したりしていく。

鑑①

3-7 「最後に、もう一度聴きますので、この曲全体の『味わい』はどんなところにあるか、考えてみましょう。WS2の下の欄に、書いてください。鑑賞中に書いてもかまいません。」

・WS2は、次時のトークで用いる。

鑑②

3	<p>4. 人間が音楽を愛好する理由を考える。</p>
	<p>4-1 「これまで、アインシュタインが愛したモーツァルトの曲、そして化学者でもあったボロディンの作品を聴いてきました。科学と芸術、という皆さんはどう思うでしょうか。両極にあるように思っている人もいるかもしれませんね。また、『彼は文系だ』とか、『彼女は理系の才能がある』などと言ったりしませんか。文系と理系も両極にあるように思われがちですね。さて、今日のテーマは『人が音楽を愛する理由』です。『愛に理由などない』かもしれませんが、何か理由があつて…、といつても、いやいやさせられるような理由ではなく、「愛さずにはいられない」というような、自然に湧いて出るような音楽を希求する感情です。では、再度、モーツァルトとボロディンを聴いてみましょう。モーツァルトの美しさ、皆さんが書いたボロディンの「味わい」を、もう一度感じてみてください。」</p> <p>4-2 「それではトークンタイムです。人はなぜ音楽を愛好するのか、自由に話し合ってみましょう。」</p>
	<p>5. 科学的な視野と芸術的な視野の両方をもつこと（＝真実と美の両方を追求すること）の意味を理解する。</p> <p>5-1 「さて、最後になりますが、再びアインシュタインの言葉を2つ紹介します。1つは、私たち教師に対しての言葉です。」</p> <p>5-2 「そしてもう一つはこれです。」</p> <p>5-3 「この意味はわかりますね。科学には法則や理論などの客観的といわれる真実とそこに美しさがあります。一方、音楽や芸術にも美しさもありますし、それをもたらしている客観的な要因、たとえばここで学習したテンポとか旋律などがありますね。人間が社会で生きていく上で、客観的にものごとを捉えることと、そこにある美しさや楽しさ、味わいなどを感じ取ったり感動したりすることの両方が必要なのですね。」</p>
	<p>•WS1、2を手元に置きながら鑑賞させる。</p> <p>•グループごとに話し合せて、出た意見を発表させてもよい。</p> <p>•教師はファシリテーターとなり、時折、以下のような発言が出るようにいざなう。</p> <ul style="list-style-type: none"> •鑑賞曲と関連付けた発言 •WS1、2に書いたことを基にした発言。 •「文系と理系に分けられるか」という問いを投げかけそれに対する発言。 •なぜ、一流の科学者で音楽を愛好している人が多いかについての発言。 <p style="text-align: center;">等</p> <p>•クラスの実態に応じ、「文系－理系」「芸術－科学」のような「二分法」について対話が進んだ場合には、資料1を配布してもよい。そこには、寺田寅彦についての記述もある。</p> <p style="text-align: right;">E①</p> <p>•以下を提示する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>創造的な表現をすることと知識を得ることに喜びを感じさせることが、教師にとって最高の技術です。</p> </div> <p>•以下を提示する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;"> <p>学ぶこと、そして一般的に、真実と美とを追求することは、われわれが一生涯子どもでいることを許されている活動範囲である。</p> </div> <p>•上の2つのアインシュタインの言葉を基に意見を求めながら、この意味を理解させる。</p> <p>•クラスの実態に応じて、左の内容を生徒から引き出してもよい。</p> <p style="text-align: right;">E①</p>

アインシュタインの言葉は、以下より引用。1-1「わたしたちが体験しうる…」：ジュリー・メイヤー&ジョン・P・ホームズ編『アインシュタイン 150 の言葉』(Discover), p. 52、2-2「深く探求すればするほど、…」：同, p. 55、2-4「もし、わたしが物理学者…」：同, p. 108、5-1「創造的な表現をすることと…」：同, p. 91、5-2「学ぶこと、そして一般的に、…」：同, p. 85。

- 1) CD (UCCG-1255) の解説 p. 7 より。
- 2) 「彼の科学者としての積極的で均齊のとれた世界観が、彼の芸術的思想、善良な人間的性格とあいまって、その音楽に神経質さのない、強靱な骨格と肉付けを与えられている」という記述もある。平凡社『音楽大事典』, 5, p. 2388

9. 資料：

◆ワークシート1

今日聴いたモーツァルトの音楽を思い出しながら、次のアインシュタインの言葉について、以下の問いをあなたなりに考えてみましょう。

もし、わたしが物理学者にならなかったら、おそらく音楽家になっていたでしょう。わたしはよく音楽のようにものを考えます。音楽のように白昼夢を見ます。音楽用語で人生を理解します。わたしは音楽から人生のほとんどのよろこびを得ています。

問1：アインシュタインはどうして、物理学者にならなかったら音楽家になっていたと思っているのでしょうか？

問2：「音楽のようにものを考える」とは、どのようなことだと思いますか？

問3：「音楽用語で人生を理解する」とは、どのようなことだと思いますか？

◆ワークシート2

	第1の部分	第5の部分
テーマ	テーマA	テーマE
テンポ	Andantino	Presto
感じ取ったこと		
	第2の部分	第6の部分
テーマ	テーマB	テーマB・E
テンポ	Andantino	Moderato alla breve
感じ取ったこと		
	第3の部分	第7の部分
テーマ	テーマC・A	テーマE
テンポ	Allegro vivo	Presto
感じ取ったこと		
	第4の部分	第8の部分
テーマ	テーマD	テーマC・A
テンポ	Allegro	Allegro con spirito
感じ取ったこと		
この曲全体の「味わい」はどんなところにあると思いますか？		

◆ 資料 1

世間ではしばしば真偽、美醜、硬軟などの“二分法”が使われる。また“分類”といって、近い物同士を括り、系統化する手もある。この“便宜的区分け”には、良し悪し両面があることを説明したい。

良い面は言うまでもなく、理解、説明、組織運営のために、とても便利なことだ。関連する（と思われる）知識を同じ整理棚に纏めれば、解りやすく覚えやすい。だからたとえば、大学での教育・研究は学部に分かれ、学部には諸科学が割拠する。官庁や企業に省や部・課があるのも同じことだ。

でも先刻ご承知の通り、このタテ割りが必然的に視野狭窄をおこす。二分法や分類を金科玉条と考えると、正しい判断が出来なくなるのだ。たとえば最先端の学術研究は“未踏の智”を求めて茫漠たる森羅万象を縦横無尽に探検する。だから、便宜的に創られた人工環境にたじろぐのは自縄自縛だ。未知の暗闇を探るレーダーの範囲を先入観で絞るのは、愚の骨頂である。二分（たとえば文・理、生物学・物理学）の境界線は、実は線ではなく見過ごされた沃野なのだ。それに気づいて線の中に越境すれば、新天地が待っている。

学問の発展を妨害する二分もある。よく評論家的科学者が“本質的でない研究”と決めつけることがある。そもそもサイエンス研究は本質の探究なのだ。その使命を忘れて、頭ごなしの“本質／非本質の二分”は本末転倒で、自分は自然の奥深さを知らない、と白状しているようなものである。

科学者は謙虚であって欲しい。「科学の進歩を妨げるものは素人の無理解ではなく、むしろ科学者自身が科学の使命と本質を忘れてしまっていることによるのだ」という趣旨の寺田寅彦の警告に心すべきである。

東京大学名誉教授 和田 昭允「分類の良し悪し」（平成24年4月26日付日本経済新聞夕刊「あすへの話題」）

（宮下 俊也）

1. 題材の趣旨：

和田昭允（東京大学名誉教授）は言う。「『全体・部分最適化』の対象は政治、経済、産業、学術、教育そして地域社会、家庭、個人、のハードとソフトの両方、なんでもだ」（資料1参照）と。音楽や芸術もまた、部分の最適化が図られ全体が最適化されて創られたものと言えるだろう。音楽の「部分」とは、音楽を形づくっている要素や要素同士の関わり合いであり、「全体」とは部分が総体化してできあがる楽曲であり、作品である。部分からでは表れず、全体になってはじめて熟成され醸し出されてくる質がある。「曲想」がそうだ。「サイエンスは“部分の部分”を求めて素粒子に辿り着き、“部分が作る全体”を追って宇宙の果てを探る」（資料1参照）と和田は述べる。音楽を鑑賞するということもこれに似ているところがある。部分を求めて美の源泉を探り、全体を掴んで美を味わい共感する。鑑賞教育で大事なことは、音楽への関わり方として、部分へ迫ることと全体へ迫ることの両方ができることであり、それを教えなければならない。

人生において音楽を聴くとき、部分ばかりを気にしては何か空しい。一方、部分を知ればもっと深く音楽を理解できる。人を理解するときも、社会を理解するときも、自然や宇宙、政治や経済、そして音楽以外の多様な芸術を理解するときも同じではないか。和田の主張もそう言っているように思える。そのことを、本題材によって教える。

教材として取り上げるラヴェル作曲の《ボレロ》は、掌の上で小さな細胞が少しずつ増え見事な花を咲かせるように、部分から全体への発展がよくわかる。《ボレロ》を鑑賞する経験を通して、音楽や芸術を全体と部分の両面から捉えることの大切さを理解させたい。

2. 指導内容・ねらい：

【指導内容】・音楽の構造

・要素と音楽全体の構成

【ねらい】・楽曲の構成原理（要素）の知覚と感受

・構成原理がもたらす雰囲気や構成美の理解

3. ESD として獲得を期待する力（「ガイド」より）：

- ・音楽をはじめとする芸術作品などの抽象的な事物を、部分と全体の両側面から認識できる力
- ・事物や事象を多面的・総合的に捉え、考える力

4. 思考させるテーマ（「ガイド」より）：

- ・⑩『木を見て森を見ず』という比喻は、一般的にどのような時に使われるのでしょうか。音楽や芸術を鑑賞する時に『木を見て森を見ず』とはどういう意味になるのか、例を挙げながら意見を述べ合ってみましょう。」

5. 教材：

- ・ラヴェル作曲 《ボレロ》
- ・和田昭允著「全体と部分」（日本経済新聞夕刊『あすへの話題』平成 24 年 2 月 9 日付夕刊）

6. 題材目標：

- (1) 《ボレロ》の構造を理解することを手がかりに、対象を全体と部分によって捉えることについて興味・関心をもつ。
- (2) 《ボレロ》で繰り返されるリズムと旋律、発展をもたらしていく楽器の音色、強弱、テクスチャなどの働きを知覚・感受し、発展した全体を、発展していく過程と関連させて理解し味わう。
- (3) 身の回りにあるあらゆる事物が、全体と部分で成り立っていることを理解し、芸術を理解するときにも全体と部分の両面で捉えていくことの意味と重要性について考え、意見を述べる。

7. 評価計画：

評価の観点	評価規準	評価方法・対象
音楽への関心・意欲・態度	関① 《ボレロ》における「全体と部分」について意欲的に理解しようとしている。	発言・観察
鑑賞の能力	鑑① 《ボレロ》を貫くリズムと2つの旋律、及び発展をもたらすための要素を知覚し、その発展過程と楽曲全体の雰囲気や曲想を感受している。 鑑② 《ボレロ》の特徴を、「全体と部分」の観点で理解している。	発言・観察 発言
ESDとして獲得を期待する力 (方向目標として継続的にアセスメントしていく観点)	E① 音楽や芸術を鑑賞するとき、あるいは身の回りの事物と関わる時、「全体と部分」の両面で捉えることの意味と重要性について、意見を述べることができる。	発言・WS

8. 題材の指導計画：

時	学習活動の内容と教師の発問例	指導上の留意点	評価
1	1. 「全体と部分」の意味について理解する。		
	1-1 「まず、配布した文章『全体と部分』(配布資料1)を読みましょう。特に下線部①と②については、どういう意味なのかを考えながら読んでください。」	<ul style="list-style-type: none"> 理解が難しい場合は、適宜教師が説明してもよい。 <p><導きたいこと></p> <ul style="list-style-type: none"> 絵具(の分子)は「部分」。それによって描かれるモノリザは「全体」。絵画も部分によって全体が創られていくのだが、絵具の分子のどのような作用によってモノリザが描かれているのか、というような鑑賞は、普通はしない。ダ・ヴィンチ(作者)や時代背景を考えながらモノリザを理解していくのだろう。 <p><導きたいこと></p> <ul style="list-style-type: none"> 人間グループを「全体」とすると個人が「部分」、機械「全体」とすると部品が「部分」。すなわち、グループや機械をよいものにするには、人間一人一人、あるいは部品一つ一つをよいものにしていかなければならない。 <p><導きたいこと></p> <ul style="list-style-type: none"> 「部分」は要素や要素同士の働き、「全体」は要素や要素同士の働きによってできあがる楽曲全体。 	E①
	1-2 「この文章、理解できましたか。①の部分はどういうことを言っているのでしょうか。」		
	1-3 「では②の部分はどういうことを言っているのでしょうか。」		
	1-4 「それでは音楽にあてはめるとどうなるのでしょうか。小学校や中学校で、速度、強弱、旋律といった音楽を形づくる要素について勉強したと思いますが、音楽の「全体と部分」は何でしょうか。」		
	2. 《ボレロ》の「全体と部分」を理解する。		
	2-1 「ラヴェル作曲の管弦楽曲《ボレロ》を鑑賞します。一度通して聴きますので、『全体と部分』、特に、『部分』は何か、そして『部分』がどのように『全体』へとつくり上げられていくかに注目して聴いてみましょう。」	<ul style="list-style-type: none"> 1回目の全曲鑑賞。 	関①
	2-2 「聴いてみて何か気が付いたことはありますか。」	<ul style="list-style-type: none"> 知覚されたことと感受されたことを分けて板書する。 	鑑①

	<p>2-3 「まず、リズムについて確認してみましょう。もう一度聴きますので、リズムをたたいてみてください。」</p> <p>2-4 「もうひとつ、2種類の旋律がある、という気付きがありましたので、確認してみましょう。」</p> <p>2-5 「さて、この曲の特徴として、ごく小さなものから徐々に壮大なものへと発展していく構造はわかったと思いますが、具体的に何がどう変化していくのか、皆さんが気付いたことを基に考えてみたいと思います。」</p>	<p><知覚できたこととして予想される発言></p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 同じことの繰り返し(反復の連続) 2) 一定のリズムが終始繰り返される。 3) 2種類の旋律がある。 4) 次第に大きく発展していく。 5) 楽器が増えていく。 6) 同じ楽器でも少しずつ強さを増して演奏されている。 <p>・知覚できているかを確認し、楽曲全体にわたって小太鼓などによって演奏されていることを理解させる。</p> <p>・楽曲の途中まで聴かせ、旋律Aが出てきたら右手を、Bが出てきたら左手を挙げる、などの方法で知覚を確認する。</p> <p>・クラスの実態に応じて、上記 4)5)6)のすべて、あるいはどれか1つに絞って次のような方法で行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 楽曲の推移に即し、主として旋律を演奏する楽器を WS に記していく。あるいはあらかじめ楽器名を記しておいて出現ごとに選ばせる。 ② 楽曲の推移と出現する楽器を示した図(音楽之友社版平成24年3月検定教科書『高校生の音楽①』 p.39 のような)を与え、指で追っていく。 ③ 演奏の映像を視聴させながら、出現楽器を確認していく。 ④ 演奏の映像を視聴させながら、指揮者や演奏者の動作とともにダイナミクスの変化を確認していく。 <p style="text-align: right;">等</p>	<p>鑑①</p> <p>鑑①</p> <p>鑑① 鑑②</p>
2	3. 《ボレロ》の「全体と部分」を捉え、そこから受けるイメージを他の事物に置き換えて述べる。		
	<p>3-1 「《ボレロ》の部分が、一定のリズムや旋律、楽器(の音色)、強弱とすると、部分がどのように発展しているか、言葉で述べてみましょう。再度全曲を聴きながら考えてください。」</p> <p>3-2 「《ボレロ》と同じような仕組みで部分が全体となっているもので、音楽以外に何か思いつくものはありますか。グループで考えてみましょう。その時、部分は何か、それがどうして《ボレロ》に似ているのか、合わせて考え、イメージとともに発表してください。」</p>	<p>・2回目の全曲鑑賞。</p> <p><導きたい発言></p> <p>・「一定のリズムの上に2つだけの旋律を使って、楽器が増え、音量が増し、色々な音色が加わって、一つの大きな楽曲となる。」</p> <p><予想される意見></p> <p>・ビルなどの大きな建築物</p> <p>…部分は1階部、2階部…、鉄筋、ビルの色。鉄筋が一貫した軸になっているのでリズム、それにだんだん階が積み上がっていくので。</p> <p>・「大きなかぶ」</p> <p>…部分はかぶを引くおじいさんからねずみま</p>	<p>関① 鑑②</p>

	<p>3-3 「面白いですね。世の中にはこのように『部分』が発展して『全体』になっているものはたくさんあります。和田昭允さんも『なんでもだ』と言っています。ところで『木を見て森を見ず』という諺を知っていますか。十二単やミルクレープを例にとると、どういうことになりますか。」</p> <p>3-4 「そうですね。でも、森全体を見ることも大事ですが、森に生える木一本一本についても見ることは大事なことだと思います。それでは最後に、皆さんがこれから生きていく上でいろいろな音楽や芸術を鑑賞していくことになると思いますが、《ボレロ》の「全体と部分」について学んだことを踏まえながら、どのようなことに気を付けて音楽や芸術を鑑賞したらよいか、WSにまとめてみましょう。</p>	<p>で。引く人や動物がだんだん増えていって、最後にクライマックスとしてかぶが抜けること。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・十二単 …部分は一枚一枚の着物。一枚一枚違う色彩や模様の着物を重ねていって最後は美しい十二単になる。 ・ミルクレープ …部分は一枚一枚のクレープと、間に挟まれる生クリーム。クレープとクリームは2つの旋律に相当する。それを交互に重ねていって1つのスイーツとして完成される。 <p><求めたい発言></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「美しい十二単全体を見ずにわざわざ一枚ずつどんな着物かをはがして見たり、ミルクレープをクレープとクリームとに分解して食べたりするようなこと。」 ・WS に文章として記し、その後発表させたり掲示したりして共有する。 	E①
--	--	--	----

9. 資料：
配布資料1

サイエンスは「全体の構造・性質は部分の相互作用が演出する」という、いわゆる要素還元論だ。だから“部分の部分”を求めて原子から素粒子に辿り着き、“部分が作る全体”を追って宇宙の果てを探る。

石頭は、では絵具分子の相互作用でモナリザが描けるか?とくる。私はシンプル人間だが、さすがにそこまで単細胞ではない。①絵具に全責任を負わせるのは理不尽だから“全体”を拡張して探し回り、ダ・ビンチ(絶対必要部分!)を発見。さらに天才を生んだルネサンスという時代背景も調べ、^{うなず}頷くことになる。こうして“柔軟な頭脳”は、全体を納得ゆくまで^{ひろ}拡げて考える。

では生物は? 人間みたいなケッタイなものが、材料分子を集めただけで出てくる条理はない。その不条理を実現した40億年の進化という“歴史効果”は、またの話題に。

「全体と部分」がわれわれの日常で身近にくるのは、人間グループや機械など、何らかのシステムを創ろうとするときだ。②そこでは全体の最適化に向けて、部分の最適化(満足)を図ることが最重要課題となる。

システム創りではまず、一番大切なことを頂点に据える。これがピラミッドのキャップストーンで、この下に支援部分を積み、それらの全体最適化の戦略を立てる。

③成功のコツは、全体と部分を総合して考えた計算と調整だ。全体は、部分の^{すべ}総てに対応している。戦略は部分を全体になじませ、部分をもり立てる。この^{インセンティブ}鼓舞激励で全体と部分を、互いに助け合う発展サイクルに持ち込む。いうまでもなく、④この「全体・部分最適化」の対象は政治、経済、産業、学術、教育そして地域社会、家庭、個人、のハードとソフトの両方、なんでもだ。

◆ ワークシート

音楽や芸術を鑑賞するとき、「木を見て森を見ず」とはどういうことでしょうか。また「全体と部分」の両面で鑑賞することについて、音楽、美術、書道、演劇、バレエ、ダンスのうちから1つを鑑賞するときを想定して、あなたの考えを述べなさい。なお、《ボレロ》の鑑賞で学んだことも含めて書きなさい。

(宮下 俊也)

1. 題材の趣旨：

楽曲の構造を把握するためには、楽曲全体の構成とともに、作曲者が意図して記したモチーフやハーモニー、リズム等、音楽を構成する諸要素の意図する内容を把握する必要がある。生徒たちにそのような音楽理解のための方略をあらかじめ学習させておくことで、生徒は作曲者の意図や思いを自分たちで楽曲の中から発見できる喜びを味わうことができ、音楽文化への興味関心を深めることができるであろう。

本題材では導入として、ジャズ音楽を言語の音声的特徴との関わりでとらえ、音楽が人間の生活に密着した文化であることを感じ取らせる。続いて、ラヴェルの音楽に用いられているジャズの要素を見出すことをとおして、ジャズが遠くヨーロッパの音楽にまで影響を及ぼし、新しい芸術作品を創り出すインスピレーションとなったことから音楽文化の発信と伝播について考えさせる。さらに、当時のヨーロッパとアメリカとの関係から社会状況を想像させ、音楽が社会状況を写し取る鏡であることも実感させることで、音楽が社会創造に寄与することを理解させたい。

2. 指導内容・ねらい：

【指導内容】・音楽によって喚起されるイメージや感情

・要素や構造がもたらす曲想

【ねらい】・楽曲全体の構成やそれがもたらす質を基にした音楽の多様性の理解

3. ESD として獲得を期待する力（「ガイド」より）：

- ・（音楽）文化の多様性を理解し、尊重する態度

4. 思考させるテーマ（「ガイド」より）：

- ・ ⑱「いろいろな国の音楽の特徴を聴き取り、それぞれの曲想を味わい、曲想を生み出している要素や構造の特徴と、その国の風土や文化、生活との関わりなどを考え、音楽の多様性や文化の有り様について話し合ってみましょう。」

5. 教材：

- ・ アフリカ系アメリカ人のスピーチ（英語）の録音
- ・ 北米系アメリカ人のスピーチ（英語）の録音
- ・ 黒人霊歌《SWINGLOW SWEET CHARIOT》（器楽曲）
- ・ Joe Zawinul 《BIRDLAND》（例として）
- ・ M. ラヴェル作曲 《ピアノ協奏曲ト長調 第1楽章》

6. 題材の目標：

- (1) ジャズの特徴やそれに影響を受けた西洋音楽を理解し、音楽文化の発信や伝播を基に、社会と音楽との関わりや音楽の多様性について考えることに興味・関心をもつ。
- (2) ジャズの特徴となる要素の働きを知覚・感受し、ジャズの要素を取り入れたラヴェルの創作意図を当時のヨーロッパとアメリカとの社会情勢を踏まえて考えを述べることができる。
- (3) 音楽文化の発信や伝播を基に、社会と音楽との関わりや音楽の多様性について考え、意見を述べるができる。

7. 評価計画：

評価の観点	評価規準	評価方法・対象
音楽への関心・意欲・態度	関① スピーチの音律的要素に着目して取り組んでいる。 関② スピーチと曲との音律的特徴の共通点について、積極的に考えようとしている。 関③ ラヴェルの曲の中から、ジャズの要素を主体的に探そうとしている。	観察・WS WS・発言 WS・発言
鑑賞の能力	鑑① ラヴェルの曲の中からジャズの音律的特徴を探し、その部分の気分や雰囲気、具体的に説明している。 鑑② ラヴェルがジャズの要素を使って作品を創った意図を想像し、当時の社会状況を関連付けて説明している。	WS・発言 WS
ESD として獲得を期待する力 (方向目標として継続的にアセスメントしていく観点)	E① 本学習内容と関わらせて、「社会と音楽との関わり」について、自分の見解を示している。	発言・WS

8. 題材の指導計画：

時	学習活動の内容と教師の発問例	指導上の留意点	評価
1	1. 言葉の音声的特徴を比較する。		
	1-1 「これからAさんとBさん、2人の英語のスピーチを聴き比べます。スピーチの内容を理解する必要はありません。スピーチそのものを音楽のようにとらえてください。AさんとBさん、それぞれの特徴の違いをまとめてみよう。」	・グループごとに討議の時間を取り、話し合いの内容をグループの代表者が発表する。	関①
	2. 言葉の音声的特徴と音楽の音律的特徴との共通点を探る。		
	2-1 「次に曲を一曲《(SWINGLOW SWEET CHARIOT)》聴きます。今度は先ほどのAさんのスピーチと、この曲との共通点をさがして、まとめてみよう。」	・どんな観点で聴きとれば良いのか、例示等を用いながら学習の目的を明確にする。	関②
1	3. 言葉と音楽とが密接な関わりをもっていることを理解する。		
	3-1 「今までの例から、言葉と音楽とがとても深く関わっているという推測ができます。それでは、Bさんと関わりが深い音楽はどのようになるだろうか。Bさんのスピーチから類推し、言葉で説明してみよう。」	・「軽さ、洗練さ、明るさ、テンポの良さ」等の言葉が生徒から引き出せるよう補助発問を用意する。 ・例示にふさわしい曲を用意し、共感的にとらえさせる。	関②
2	4. ラヴェルの音楽表現について考える。		
	4-1 「まずラヴェルが作曲した《ピアノ協奏曲ト長調》の第1楽章の前半、時間にして3分弱を聴きます。音楽がゆったりとした部分になると、前回学習したジャズの雰囲気をもらったところが聴こえてきます。曲の中からその部分を確認するように聴いてください。」	・ほとんどの生徒が初めて聴く曲であることを想定し、鑑賞のポイントを事前に示しておく。 ・クラリネットが奏でる第2主題が本時のポイントであることを示す。	関③ 鑑①
	4-2 「この作品はフランスの作曲家であるラヴェルが書いた作品ですが、このようにアメリカの音楽であるジャズの要素を取り入れて作曲されています。今度は1楽章全体を聴いてみます。前半にも出てきたジャズの要素が、後半にも出てくることを聴き取ってください。ジャズの要素がどのような部分に現れて、どんな楽器で演奏されているか、わかる範囲でメモを取りながら聴きましょう。時間は約8分ほどです。」	・メモは聴き取りのための意識付けの役割をもたせるためのもので、楽器についての知識が乏しい生徒にも負担とならないよう配慮する。	
5. ラヴェルがジャズ要素を作品に用いた理由を考える。			

<p>5-1 「この作品の中で、ジャズの要素が現れることによって、どんな表現上の効果が現れるかを感じ取りましょう。」</p> <p>5-2 「この作品の中にジャズの要素が入っていることは、世の中の人々にどんな印象を与えたのかを考えよう。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ジャズの要素が気怠さ、ルーズ感を感じ取らせるとともに新しい響きであることにも目を向かせる。 ・作品は作曲者側の意図とともに、それを受け取る鑑賞者側からの見方の両面があることに気付かせる。 	鑑②
6. 時代背景を踏まえながら、音楽作品のもつ主張や影響を考える。		
<p>6-1 「19 世紀末から 20 世紀初頭のヨーロッパとアメリカとの文化的関係や社会情勢を踏まえて、ラヴェルが作品をとおして主張したかったことを考えましょう。そして、作品が世の中に出ることによって、その他の作曲家への影響や、音楽ばかりでない社会そのものへの影響などを、自由に話し合ってみよう。」</p> <p>「ラヴェルが活躍する以前のヨーロッパの音楽に親しんでいた人々が、このような作品を耳にした時の印象を想像したり、当時ヨーロッパから見て後進地域であったアメリカに対するヨーロッパの人々の『文化に対する誇り』を想像したりしてみると、ラヴェルが考えていたことが見え始めると思います。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・思ったことを自由に発言できる環境を整える。 ・他の生徒の意見も取り入れながら、自分の意見をまとめさせる。 ・社会との関わりを踏まえていない意見については、作品を受け止めた側の印象を想像させる。 	E①

9. 資料 :

◆ 学習ワークシート

1年 _____ 組 _____ 番 氏名 _____

「社会と音楽との関わり -文化の成り立ちや意味を感じ取りながら-」 No. 1

(1) スピーチを聴き取ろう

Aさんのスピーチの特徴		Bさんのスピーチの特徴
Aさんのスピーチと《SWINGLOW SWEET CHARIOT》との 共通点 (雰囲気やその雰囲気をつくる音の特徴)		Bさんのスピーチから類推されるのはどんな音楽だろう か その特徴を類推しよう
雰囲気		
音の特徴		

「社会と音楽との関わり -文化の成り立ちや意味を感じ取りながら-」 No. 2

(2) ラヴェル作曲 《ピアノ協奏曲ト長調 第1楽章》を聴こう

① 鑑賞メモ

ジャズの要素が現れる部分	演奏している主な楽器	その他気づいたこと
(例) 最初のゆったりした部分 ピアノの独奏の後	クラリネット (E♭クラリネット)	メロディーがトランペットに引き継がれていく

② 話し合いの材料

ラヴェルが作品の中にジャズの要素を取り入れたことについて、下の表に整理し、自由に意見交換をしよう

曲の中にジャズの要素が現れる表現上の効果 - どんな雰囲気がつくられるか	
曲の中にジャズの要素を取り入れることによる人々への影響 - 受け止める人々の印象	
ラヴェルがジャズの要素を取り入れた理由 - どんなことを主張したかったのだろうか	
上記を踏まえて話し合いで発言する内容 - 自分の見解	
話し合いの中で気づいたこと - 自分の見解の変化	

(水口 俊彦)

1. 題材の趣旨：

「創造力」は、我が国においても世界においても、「21世紀型能力」として今後の教育で育成する資質・能力の中核に据えられている。音楽教育において求める創造力は、単に音楽表現における創造性だけではなく、新しく、持続可能な社会、文化をつくり出していくことに寄与するイノベーション能力であり、音楽の認識を基盤に、音楽に対する思考力と感性を伴って育成される。また、創造力はイメージする力が源泉となる。これまでの音楽鑑賞教育においてもイメージをもつことは常に求められてきたが、それもまた、単に楽曲に対するイメージをもたせるだけの学習では、「21世紀型能力」としての創造力育成は予定調和を期待するにとどまる。

本題材は、ドビュッシーの音楽鑑賞を通して、21世紀を生きる上で「イメージすること」の意味と重要性について考え、自分なりの意見をもたせようとする。またそこでは鑑賞の原理に基づき、表現者（作曲家）のイメージネーションや革新性と、それによってもたらされた鑑賞者（自分を含めて）のイメージや感情の変化とを併せて考え、人間にとってイメージする力が持続可能な社会創造に寄与することを音楽鑑賞学習の基盤として据えさせたい。

2. 指導内容・ねらい：

【指導内容】・音楽によって喚起されるイメージや感情

・鑑賞によって得られる自己のイメージや感情

【ねらい】・喚起されたイメージと自己の感情やその変化の音楽的要因の理解

・音楽が人間の感情に変化をもたらす特質をもつものであることの理解

3. ESDとして獲得を期待する力（「ガイド」より）：

・イメージをもって新たなもの、社会、時代をつくり出していくことの理解と実践力

4. 思考させるテーマ（「ガイド」より）：

・㊸「イメージするということは、人間にとってどのような意味や重要性があるのかを考え、意見を述べ合ってみましょう。」

5. 教材：

・ドビュッシー作曲 交響詩《海》より第2楽章《波の戯れ》

・ドビュッシー作曲 ベルガマスク組曲より《月の光》

・ドビュッシー作曲 前奏曲集 第1巻より《野を渡る風》

・エリック・カール著 もりひさし訳 絵本《うたがみえる きこえるよ》（偕成社）

6. 題材目標：

- (1) ドビュッシーの音楽表現、及びイメージを媒介とした「音楽と鑑賞者との関係」（ドビュッシーと自分→ドビュッシーと鑑賞者→音楽と人間）について興味・関心をもつ。
- (2) ドビュッシーの3作品についてのイメージとその要因を言葉で述べることができる。
- (3) ドビュッシーの音楽表現について理解し、自分が抱いたイメージをもとに、「人間にとってイメージすることの意味と重要性」について考え、述べることができる。

7. 評価計画：

評価の観点	評価規準	評価方法・対象
音楽への関心・意欲・態度	関① 鑑賞曲に対して積極的にイメージをもつことに取り組んでいる。 関② ドビュッシーの表現や主張について、自分にもたらされたイメージをもとに積極的に考えようとしている。	発言 発言・WS
鑑賞の能力	鑑① 鑑賞曲に対してイメージをもち、それをもたらした要因を、音楽を形づくっている要素の働きから見つけ、イメージと要因とを関連付けて述べている。 鑑② ドビュッシーによる表現の特徴を理解している。	発言・WS WS
ESD として獲得を期待する力 (方向目標として継続的にアセスメントしていく観点)	E① 本学習内容と関わらせて、「人間にとってイメージすることの意味と重要性」について明確な意見を示している。	発言・WS

8. 題材の指導計画：

時	学習活動の内容と教師の発問例	指導上の留意点	評価
1	1. 絵から音をイメージする。		
	1-1 「『うたがみえる きこえるよ』の絵から、どんな音が聴こえるかな。そして、どうしてその音が聴こえてきたのか、絵の色や形などを理由に言葉で述べてみましょう。」	・述べられた音について、音の質感とそれ以外、それらの根拠、に分けて板書する。	
	2. 音楽から「見えるもの」をイメージする。		
	2-1 「今度は逆に、これから聴く音楽からどんな風景が見えてくるかな。見えてきた風景を、理由とともに言葉で述べてみましょう。そのときにはリズムや音の高さといった音楽の要素とともに述べてください。」	・曲名は伝えない。 ・WS にメモを取りながら聴かせる。 ・述べられたイメージを板書する。 ・他者の意見も WS に分けて記入させる。 ・要因について板書追記する。	関① 鑑①
	2-2 「今、皆さんから出された『見えたもの』と、その要因を板書しましたが、これらに注目し、確認しながらもう1度、今の曲を聴いてみましょう。」		
	3. イメージは過去の経験を資源に描き出されることを理解する。		
	3-1 「絵を見て音が浮かんだり、音楽を聴いて風景が浮かんだりするように、匂いを嗅いだり、物を味わって食べたりした時に、何かを思い浮かべることってあるよね。つまりイメージ。イメージって、過去の経験があるから、新しい経験を得たときに、過去の経験から引き出されるのかもしれないですね。」	・色を見て、味、音、温度などがイメージされることを例に挙げる。	
	3-2 「ではもう一度《波の戯れ》を聴きます。皆さんがイメージしたものは、過去のどのような経験から引き出されたものかを考え、述べ合ってみましょう。」	・述べられた経験とイメージの関わりを板書で示す。	鑑②
	4. 楽曲の音楽的特徴とイメージとの関連を理解する。		
	4-1 「皆さんがもったイメージを引き出させた音楽的要因を、いくつか提示してみますよ。」	・ピアノで全音階や並進行する和音などを弾き、《波の戯れ》で使われていることを確認させる。また、長音階や短音階と比較聴取する。 ・楽曲の構造がはっきりしている既習の曲を取り上げ、《波の戯れ》との構造の違いを確認させる。	鑑②
2	5. ドビュッシーの音楽表現について考える。		
	5-1 「ところで以前聴いた《ブルダバ》と、この《波の戯れ》はどちらも標題がついた音楽だけれど、何か相違点はあるかな。」	・既習の絶対音楽と、標題音楽について確認する。 ・既習曲《ブルダバ》と《波の戯れ》はどちらも標題をもつ音楽であるが、この2つは一括りにて	鑑②

	<p>7-2 「最後に、WS に書いた皆さんの意見を、述べ合ってみましょう。」</p> <p>7-3 「イメージをもつことは何かを創造するための源になるので すね。それは、音楽や美術を創造していくためばかりではな く、皆さんがこれから生きていく社会や世界を創造していくた めにも、必要なことなのです。」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ドビュッシー ・印象派(印象主義) ・《海》(《波の戯れ》)《月の光》《野を渡る風》の3曲名のうち一部、または全部。 <p>・自分と他者の意見を確かめさせながら、《波の戯れ》《月の光》《野を渡る風》を聴く。</p>	
--	---	--	--

9. 資料：

◆ ワークシート

音楽ワークシート

1年_____組_____番 氏名_____

『イメージする』ということは、人間にとってどのような意味や重要性があると思うか、あなたの意見を述べなさい。

次の条件にしたがって、書きなさい。

条件1 この3時間の学習を踏まえること。

条件2 以下の語句を使用すること。

- ・ドビュッシー
- ・印象派（印象主義）
- ・『海』『月の光』『野を渡る風』の3曲名のうち一部、または全部

(宮下 俊也・大熊 信彦・多賀 秀紀)

1. 題材の趣旨：

事例1で取り上げた《秘儀I》の作曲家西村朗氏は、音楽に目覚めたきっかけは小学校5年生の時に聴いたシューベルトの《軍隊行進曲》であったという。それはまるで、不思議の国のアリスがウサギに導かれて穴に落ち、そこから穴の中で様々なできごとに出会ったように、西村氏もその後、様々なクラシック音楽と出会っていったと述べている¹⁾。

高校生一人一人が持っている「音楽が好きだ」という気持ちは、15年ほどの人生の中でいつ、どのようにして形成されてきたのだろう。また、クラシックが好き、J-Popが好き、といった音楽ジャンルについての嗜好も、どのような体験から生まれてきたのだろう。それは、それぞれがもつ音楽に対する価値観の形成過程とも言える。

物事の価値を判断するときは、必ず自分の価値観が規準となっている。規準がなくては価値判断も批評もできないはずで、諸外国の音楽カリキュラムを見ても、美的判断ができるようになるために、低年齢の段階から「規準(criterion)をもつ」ことを求めている。「自分にとっての音楽の価値」を考え判断させるとき、自分が価値判断するときの規準はどのようなものなのか、その規準はどのような経験でできたものなのか、といったことを高校生自身に問いかけてみたい。

本題材は、自分のこれまでの人生を振り返り、音楽との出会い、音楽活動や嗜好の履歴、感動体験などを自分史として表し、現在の自分の音楽に対する価値観を認識させ、人々の価値観によって音楽文化が創られていることについて考え、今後の音楽鑑賞における批評活動につなげていくことを目的とする。

2. 指導内容・ねらい：

【指導内容】・音楽の鑑賞における批評

・自分にとっての音楽の価値判断

【ねらい】・音楽や芸術に対する「価値」の理解

・価値判断するために必要な規準の理解

3. ESDとして獲得を期待する力（「ガイド」より）：

- ・音楽や芸術の本質（自分や社会にとっての価値）を積極的に考え、見抜き、その結果を語り合える力
- ・音楽や芸術を含む様々な文化の創造と持続発展のために、的確な批評ができる力

4. 思考させるテーマ（「ガイド」より）：

- ・㉗「鑑賞した音楽に対して自分が判断した価値は、自分のこれまでのどのような経験から判断されたものか考え、述べてみましょう。」

5. 教材：

- ・シューベルト作曲 《軍隊行進曲》D. 733 第1番 管弦楽編曲版
- ・生徒が選んだ数曲

6. 題材目標：

- (1) 自分ももつ音楽に対する価値観の形成過程について、興味をもって考える。
- (2) 自分や他者が価値を認めた音楽について、その音楽の構造を知覚・感受し、自分や他者の価値観を理解する。
- (3) 音楽に対する価値観は過去の音楽経験から形成されたことを知り、今後自分の価値観が音楽文化の創造に関わることを理解する。

7. 評価計画：

評価の観点	評価規準	評価方法・対象
音楽への関心・意欲・態度	関① 他者や自分の音楽に対する価値観の形成過程について興味をもっている。 関② 人間の価値観によって音楽文化が創造されていることに関心をもっている。	観察・発言・ 「音楽自分史」 発言・WS
鑑賞の能力	鑑① 自分や他者が価値を認める音楽について、その音楽の構造を知覚・感受して、自分や他者の価値観を理解する。	発言
ESD として獲得を期待する力 (方向目標として継続的にアセスメントしていく観点)	E① 鑑賞者の価値観に基づく評価によって音楽文化が創造されていることを理解する。	発言・WS

8. 題材の指導計画：

時	学習活動の内容と教師の発問例	指導上の留意点	評価
1	1. 作曲家西村朗氏の音楽に対する価値観形成の発端を考える。		
	1-1 「まず、ある動画を見てみます。これは現代の日本の代表的作曲家、西村朗さん自身による、クラシック音楽との出会いの話です。」	<ul style="list-style-type: none"> ・サイトは以下の通り。 https://www.youtube.com/watch?v=htOjrU7w0BM ・西村朗『クラシックの魔法ー スピリチュアル名曲論』(講談社) pp.1-4 を読ませてもよい。 	
	1-2 「西村さんが語っているシューベルトの《軍隊行進曲》を聴いてみましょう。西村さんが『胸キュンとなった』と述べている中間部について、あなたはどうか感じたかを後で述べてもらいます。」	<ul style="list-style-type: none"> ・書籍では、「やわらかな中間部分で、フツとやさしく短調に転じます。ちょっとエキゾチックで物悲しくてスパイシー！自分の中で眠っていた感覚がキューンと目覚めるような感じがしました」と記されている。 	関① 鑑①
	1-3 「この曲が ABA の形式で作られていることを確認しましょう。B の部分になったな、と思ったら手を挙げてくださいね。」	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽用語「トリオ」を教える。 	鑑①
	1-4 「次に、西村さんが『胸キュンとなった』中間部を聴いてみましょう。どうして『胸キュンとなった』のかを考えながら聴いてください。」	<ul style="list-style-type: none"> ・鑑賞後、発言させる。 ・転調についての意見が出たら、「転調」という語の理解を確認する。続いてその部分を再度聴かせ、長調から短調、短調から長調に戻ることを確認する。 	
	1-5 「このトリオの部分について、あなたはどうか感じましたか。あるいは転調されることでどのような雰囲気を感じたり、気持ちが変わりましたか。」	<ul style="list-style-type: none"> ・再度中間部を聴かせて発言させる。 	鑑①
	2. 「音楽自分史」を作る。		
	2-1 「さて、西村さんは小学校5年生の時の、偶然で衝撃的な《軍隊行進曲》との出会いで音楽に目覚め、やがて作曲家になっていきました。皆さんも全員、音楽は好きだと思っているでしょうけれど、今の自分の音楽に対する価値観、つまり、この音楽は好きだとか、この音楽は自分には合わない、といったものは、自分の生い立ちの中でどのような経験から出来上がったものなのでしょうか。資料1は、私の音楽経験のヒストリー、つまり『音楽自分史』です。少し説明しましょう。」	<ul style="list-style-type: none"> ・教師自身の「音楽自分史」を提示して、ポイントを説明する。ポイントとなる点は以下の通り。 <ul style="list-style-type: none"> ・出会った曲 ・出会ったエピソード ・その時に形成された価値観 ・その価値観がその後の経験とどう関わっているか(変わったことや変わらず今に繋がっていること、等) ・その「音楽自分史」に出てくる曲を鑑賞させて説明するとよい。 	鑑①

	2-2 「このように、今度は皆さん自身の『音楽自分史』を作ってみましょう。これから書き始めますが、家に帰って完成させてもよいです。そして、次の時間に『音楽自分史』に出てきた曲を何か1つ、持って来てください。」	<ul style="list-style-type: none"> ・フォーマットは資料2を参考にするとよい。 ・プライバシーに関わることも予想されるので、発表の是非を記載させるようにする。 ・次の時間までに曲名を聞き、教師が用意してもよい。 	
2	3. 音楽に対する価値観の成立について考える。		
	3-1 「皆さんの『音楽自分史』について発表してもらいましょう。その後で質問があったら尋ねてください。」	<ul style="list-style-type: none"> ・発表したい生徒数人にさせる。 ・適宜、教材提示機などを使って発表させる。 ・上記のポイントについて共有できるように、発表者に尋ねたり、全員で考えさせたりする。 	鑑①
	3-2 「Aさんのエピソードの中で出てきた曲を用意していますので、みんなで聴いてみましょう。その曲の特徴や皆さんが感じ取ったことを基にAさんの価値観を確認してみましょう。」	<ul style="list-style-type: none"> ・発表する生徒の曲を鑑賞しながら進める。 ・「Aさんは、この曲のこのところに感動したんだな」「私とは違う価値観なんだな」というような意見を求め、共感し合ったり価値観の違いを認め合ったりするようにトークを展開させる。 ・取り上げた曲において生徒が感動した個所の音楽的構造などについて、確認させながら進める。 	鑑①
	4. 人々の音楽に対する価値観によって音楽文化が創られていくことについて考える。		
	4-1 「これまでの発表やトークで、音楽に対するいろいろな価値観があることを知りましたね。共感したり、自分の価値観とは違うな、と思ったりしたことでしょう。音楽や芸術に対する価値観は人によって多様であり、そのことを認め合っていかなければなりませんね。最後に、一人一人音楽についての価値観をもつことは、音楽文化を創造していく上でどのような意味があるかを考え、述べ合ってみましょう。」	<ul style="list-style-type: none"> ・述べ合ったことに関連させて、一人一人が価値観をもって、音楽を評価したり批評したりすることによって、音楽文化が創られていくことを理解させる。その時、音楽の長い歴史の中で、今もなお残っている音楽は、人々の評価を経て残っていること、また逆に衰退していった音楽もたくさんあることを、例えば映画『アマデウス』のストーリーなどを紹介しながら伝えていく。 	関② E①
	4-2 「この2時間の授業や、『音楽自分史』を作成してみてわかったことをワークシートに書いてください。」		E①

1) 西村朗『クラシックの魔法 ―スピリチュアル名曲論』(講談社), pp.1-2。他に、西村朗『曲がった家を作るわけ』(春秋社) pp. 48-51も興味深い。

9. 資料 :

◆配布資料 「教師の音楽自伝史」と作成のポイント

年代	エピソード
昭和36年 4歳	<ul style="list-style-type: none"> ・誕生。生まれた時から家にピアノと電蓄とレコードがあった。
5歳	<ul style="list-style-type: none"> ・保育園に入園したが、すぐにいやで行かなくなり、家で「おかあさんといっしょ」を毎日欠かさず見ていた。 ・「おかあさんといっしょ」で《こたりのうた》を「いい曲だ」と思った。音楽に感動したのは人生の中でこれが初めてだったと思う。<u>やがて音大で勉強していた時に、《こたりのうた》の和音の仕組み（「借用和音」というものであることを知る）の美しさがある時「いい曲だ」と思った原因であることを知ることになる。</u>
6歳	<ul style="list-style-type: none"> ・電蓄で、シューマンの《トロイメライ》を聴き、ひどく気に入って何度も何度も聴いた。バイオリンによる演奏だったが、<u>今もバイオリンの音色が好きなのはこの経験からだと思う。</u>
小学校4年生	<ul style="list-style-type: none"> ・母がピアノ教室をしていたため、土曜日は生徒が弾くブルクミュラーが聴きたくなくても聞こえてきていた。今もブルクミュラーを聴くと、土曜日の雰囲気が出てならない。
中学校1年生	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノを習いに行く。当時、男がピアノを弾くことは珍しく、「男のくせにピアノ弾いとる」と言ってからかわれた。それがいやで、以後、人には言わないことにした。
中学校2年生	<ul style="list-style-type: none"> ・偶然《トロイメライ》を弾くことになる。この曲が《子どもの情景》という曲集の1曲であることを知る。ピアノの先生にも褒められて、ますます好きになる。今も大好きな曲の一つで、自分の葬式には《トロイメライ》をかけてもらおうと決めている。
中学校3年生	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスや学年の合唱でピアノ伴奏をする。「男のくせに」とはあまり言われなくなった。伴奏をすることでどこか優越感を感じていた。
中学校3年生	<ul style="list-style-type: none"> ・小遣いで桜田淳子のレコードを買ったり、麻丘めぐみのポスターを天井に貼ったりした。ポスターはすぐさま親にはがされた。
中学校3年生	<ul style="list-style-type: none"> ・ポピュラーの楽譜を買って弾いていたら、母に楽譜を庭の池へ投げ捨てられた。クラシック以外はいけない、というメッセージだったか、レッスンのためにもっと練習せよ、という怒りだったかは、今もわからない。音大に入って自分の音楽観の狭さを感じるようになるが（他の友人はクラシック以外の知識もたくさんもっていることを知る）、それはこの時の母のせいだ、と責任転嫁している。
高校1年生	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽の授業で、ベートーヴェンの交響曲第9番について、4楽章の冒頭に1楽章から3楽章までのテーマが出て否定され、歓喜の旋律が出てくることを先生が熱く語ってくれ、<u>4楽章には大変感動した。</u>この影響を受けて、フルトヴェングラーのレコードを聴きまくった。ここで音楽の構造について強い関心が沸いたが、ベートーヴェンの人間性や時代的背景を知ろうとは当時思わなかった。

このように曲名を書く。

このように後になって振り返ったことも書く。

今の価値観が出来上がったと思われる経験を示す。

感動体験を書く。

◆資料2

私の音楽自分史

氏名 ()

年代	エピソード
この音楽自分史を公開してもよいですか。 よい 控えてほしい	

◆ワークシート

この2時間の授業や、「音楽自分史」を作成してみてわかったことを書きましょう。また、自分や人々の音楽に対する価値観がこれからの音楽文化を創っていくことについても、あなたの考えを述べなさい。

(宮下 俊也)

1. 題材の趣旨:

ユネスコの芸術教育世界会議において採択された「ソウル・アジェンダ」(2010)には、世界に求める芸術教育の目的の一つとして「芸術教育にある社会や文化の健全化を果たす特質を認識し、発展させる」と掲げられている。

深刻な貧困や犯罪に苦しむベネズエラでおこった音楽教育プログラム「エル・システマ」の設立者、ホセ・アントニオ・アブレウ博士はこう述べる。「音楽は社会の発展の要因として認識されなければならない。なぜなら最も高度なセンスにおいて音楽は最も高度な価値、連帯、調和、相互の思いやりと言ったものをもたらすからである。そして音楽には全共同体の統一させる能力と崇高な感情を表現することのできる能力があるのだ」¹⁾。「エル・システマ」や、東日本大震災の復興に対して様々な音楽活動で支援しようとした事実などは、音楽が社会に貢献した具体的事例であると言える。

一方、音楽は社会の健全化を果たすための手段にはなり得るが、それは音楽の直接的な目的ではないという考えをもつ人もいよう。このことについて現代の高校生はどう考えるだろうか。本題材は、理念を論理的に追求する討論やディベートではなく、鑑賞を通して理解したり感じたりしたことを基に、音楽の社会的貢献について考え、意識をもたせることを目的とする。

2. 指導内容・ねらい:

【指導内容】・音楽の背景となる風土や文化・歴史など

・人間と音楽との関わり

【ねらい】・生活や社会における人々と音楽との関わり方の理解

3. ESDとして獲得を期待する力(「ガイド」より):

・音楽を「ピースメイキング」として捉え、音楽が自分の生活や社会の健全化に貢献できることを理解し、そのために行動できる力

4. 思考させるテーマ(「ガイド」より):

・㊸「音楽が社会に果たす役割は何か、話し合ってみましょう。」

5. 教材:

・「エル・システマ」についての資料

・DVD『魂の教育 エル・システマ ー音楽は世界を変えるー』におけるシーン

・グスターボ・ドゥダメル指揮、シモン・ボリバル・ユース・オーケストラによる《マンボ》(L. バーンスタイン作曲)
(CD:UCCG-50056)

・東京少年少女合唱隊による演奏による《OVER THE RAINBOW》(<http://www.lsot.jp/>)

・「絆project」石巻、女川、東松島の小・中・高校生による《ありがとう》(<http://www.ustream.tv/channel/kizuna-project1>)

6. 題材目標:

(1) 音楽による社会貢献について、鑑賞を基に積極的に考え、自分の意見をもつ。

(2) 鑑賞曲の背景を理解し、理解したことと感じ取ったことを基に、その音楽が人々にどのような影響を与えているかを考え、述べる。

(3) 音楽は社会の健全化に役立つかどうかについて、他者と討論しながら自分の考えをまとめる。

7. 評価計画:

評価の観点	評価規準	評価方法・対象
音楽への関心・意欲・態度	関① 鑑賞曲の背景の理解と、演奏者の心情を想像することに積極的に取り組んでいる。 関② 音楽による社会貢献について、意欲的に考え自分の意見を述べている。	観察・発言 発言・WS
鑑賞の能力	鑑① 鑑賞曲の背景と、演奏者の心情を基に、その音楽が人々に与える影響について理解している。	発言・WS
ESDとして獲得を期待する力 (方向目標として継続的にアセスメントしていく観点)	E① 鑑賞で感じたことや理解したことを踏まえ、音楽による社会貢献について自分の意見を持ち、明確に述べている。	発言・WS

8. 題材の指導計画：

時	学習活動の内容と教師の発問例	指導上の留意点	評価
1	1. 本題材で考えるテーマを明確化する。		
	1-1 「配布したワークシート1を見てください。そこに記されている考えについて皆さんはどう思いますか。少し時間をとりますので、これに対する自分の考えを〔自分の意見〕の欄に簡単に記してください。その際、ただ『そう思う』『そう思わない』だけではなく、理由も添えてくださいね。理由には『自分のこれまでのこういう経験からそう思う』というように書けるといいですね。」	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスの実態に応じて、ホセ・アントニオ・アブレウの言葉の意味を説明する。 	関②
	1-2 「書いたことを述べてもらいます。自分とは異なる意見が出たら、その下の欄にメモしてください。」	<ul style="list-style-type: none"> ・板書する。 ・肯定的な意見ばかりだったら、「音楽には果たして『全共同体を統一させる力』があるのかな」、「社会の発展の要因となっているのかな」といった揺さぶりをかける。 	
2. 「エル・システマ」について知り、シモン・ボリバル・ユース・オーケストラによる演奏曲を鑑賞する。			
2	2-1 「『エル・システマ』について、簡単に説明します。」	<ul style="list-style-type: none"> ・以下のポイントを説明する。 <ul style="list-style-type: none"> ・ベネズエラの社会的状況と「エル・システマ」が生まれた背景、及びホセ・アントニオ・アブレウの見解(WS1)。 ・「エル・システマ」によって音楽教育を受けた子どもたちの背景。 ・適宜、DVD『魂の教育 エル・システマ ―音楽は世界を変える―』を視聴させると理解しやすい。 	関① 鑑①
	2-2 「それではシモン・ボリバル・ユース・オーケストラによる演奏で、バーンスタイン作曲の《マンボ》を聴いてみましょう。演奏者や、演奏を聴く人々の心情を想像しながら聴いてください。そしてワークシート2の『自分』の欄にまとめてみましょう。」	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスの実態に応じて、DVDによる映像によって鑑賞させてもよい。 	
	2-3 「この2つについて述べ合ってみましょう。自分とは異なる意見が出たら、『他者』の欄にメモしてください。」	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽や映像のどんなところからそのように想像したのかを述べさせる。 ・板書する。 <p><予想される発言></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「貧しい子どもたちが成長してこんなに立派な演奏ができるようになったのかと驚いた。演奏者自身の心も満たされているのではないか。」 ・「生き生きと演奏されていた。演奏する姿からも演奏することが楽しくてしかたがないように思われた。」 ・「鑑賞する人は、演奏者の境遇を知っているとと思うので、よけい感動したのではないか。」 	
3. 東日本大震災の復興を支援しようとした演奏と、支援に対する感謝を世界に伝えた演奏を鑑賞する。			
3-1	「さて、日本では東日本大震災を経験しましたが、音楽によって人々の苦しみを和らげ、元気や勇気を与えようとした活動が多く見られました。また、音楽によって被災者との絆が	<ul style="list-style-type: none"> ・その例を挙げさせてもよい。 ・《OVER THE RAINBOW》と《ありがとう》の演奏を鑑賞させる。《OVER THE RAINBOW》は 	

<p>できた例もあります。2つ紹介しますので鑑賞しましょう。最初の《OVER THE RAINBOW》は皆さんが被災者だったらという気持ちで、また《ありがとう》は支援した気持ちになって聴いてみてください。」</p> <p>3-2 「これらの音楽からどのようなことを感じましたか。演奏や演奏者の気持ちも合わせて述べてください。」</p>	<p>2011年5月31日・6月2日に録音されたもの。《ありがとう》は支援に対する感謝を音楽によって世界に発信したものであり、演奏の冒頭には高校生による英語のメッセージが述べられ、演奏中には支援した国々の国旗を掲げて感謝を表している。そのことを鑑賞の前に伝える。</p> <p>・単に「嬉しい気持ちになった」「絆が繋がった」などではなく、音楽や演奏がどうだったからそう思った、というように述べさせ、音楽によって人々が繋がったことを共有させてゆく。</p>	<p>鑑①</p>
<p>4. 「音楽が社会に果たす役割は何だろうか？」をテーマに討論する。</p>		
<p>4-1 「これまで『エル・システム』や東日本大震災の支援に関わる音楽を鑑賞し、音楽が社会に果たす役割などについていろいろな考えをもつことができたと思います。しかし一方で、音楽のそうした役割は音楽の本質そのものではなく、芸術として美を追求するものだ、という考え方もあります。もちろん役立つことは否定されるものではないですが、皆さんはこのことについてどう思いますか。『音楽が社会に果たす役割は何だろうか?』というテーマで、討論してみましょう。」</p>	<p>・考える時間を与え、これまで学んできたことも踏まえるように指示する。</p> <p>・クラス全体で討論してもよいし、グループごとに討論し、そこで出た意見を発表させてもよい。</p> <p>・本題材で扱った貧困、災害のみならず、どのようなことで社会に貢献するか、など具体的に考えさせる。</p> <p>・考える手がかりとして、次のようなキーワードを与えてもよい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人間 ・感情 ・感動 ・平和 ・コミュニケーション 	<p>関② E①</p>
<p>4-2 「ワークシート3を見てください。今、討論したことも参考にして、次の時間までにこの問いに対するあなたの考えを書いてきてください。最後に《マンボ》をもう一度かけますので、この問いについて頭の中で考えを巡らしながら聴いてみましょう。」</p>	<p>・WS3の留意事項について、丁寧に説明して確認させること。</p> <p>・提出された記述を集約して生徒に返したり、音楽室に掲示したりして、意見を共有する。</p>	<p>E①</p>

1) Abreau, as quoted in Tunstall, p. 273 より。邦訳はウィキペディアによる。

9. 資料：

◆ワークシート1

「音楽は社会の発展の要因として認識されなければならない。なぜなら最も高度なセンスにおいて音楽は最も高度な価値、連帯、調和、相互の思いやりと言ったものをもたらすからである。そして音楽には全共同体を統一させる能力と崇高な感情を表現することのできる能力があるのだ。」

ホセ・アントニオ・アブレウ (José Antonio Abreu)

〔自分の意見〕

〔自分とは異なる他者の意見〕

◆ワークシート2

	演奏者の心情について想像したこと	鑑賞者（自分を含めて）の心情について想像したこと
自分		
他者		

◆ワークシート3

音楽が社会に果たす役割は何でしょう。考えられる役割を例に挙げながら、理由とともに述べなさい。その時、授業で聴いた、シモン・ボリバル・ユース・オーケストラ・オブ・ベネズエラの演奏を聴いて感じたことや考えたことにも触れなさい（ワークシート2の記述も参考にしてよいです）。

(宮下 俊也)

1. 題材の趣旨：

この題材では、人の心を動かす音楽の存在について多面的に捉え、「音楽と人、音楽と社会とがつながること」「人が音楽を通じて力になれること」について考え、「音楽が伝えてくれるもの」について鑑賞を通じて理解することを目的とする。

この題材で取り上げる曲《A SONG FOR JAPAN》は、スティーヴン・ヘルフェルストが東日本大震災直後に作曲したもので、東日本大震災被災者の方々のために音楽で応援することをねらいとして、海外のトロンボーン奏者、および日本人メンバーを含め日本とゆかりのある海外のトロンボーン・グループが協力して立ち上げた企画、演奏である。

1 時間目は「題名と音楽」の関係に着目し、作曲家の視点に立って鑑賞をする。このプロジェクトが世界へ発信した時の演奏から、「音楽家として災害復興に貢献できることは何か？」という思いと祈りを音楽にのせ、世界中のトロンボーン奏者へとつなげていく演奏である。2 時間目に鑑賞する映像は、実際に被災地に赴いて活動されている陸上自衛隊中央音楽隊トロンボーン・セクションによる《A SONG FOR JAPAN》の演奏を鑑賞する。1 時間目に場面ごと（フレーズごと）のつながりとそれぞれの音楽的特徴を理解し、曲に対する自分なりの思いを深める学習を土台に、2 時間目の鑑賞では、様々な思いを胸に被災地の人々を前に奏でられる深い音色から、1 時間目の鑑賞と視点を変えた別の思いを重ねることができる演奏である。

曲本来の美しさと作曲家や演奏者の意図を重ねて理解し、「音楽が人々に与える力」について話し合い、音楽によって人々に幸せをもたらすために高校生としてできること、また、社会人になった時にできることについて様々な意見が深まることをねらいとした。

2. 指導内容・ねらい：

【指導内容】・音楽の背景となる風土や文化・歴史など

・人間と音楽との関わり

【ねらい】・生活や社会における人々と音楽との関わり方の理解

3. ESD として獲得を期待する力（「ガイド」より）：

・音楽を「ピースメイキング」として捉え、音楽が自分の生活や社会の健全化に貢献できることを理解し、そのために行動できる力

4. 思考させるテーマ：

・㊸「いつの時代、どこの国に生まれたとしても、音楽や芸術が人々に幸せをもたらすことができるとしたら、そのために、今の自分たちには何ができるだろうか、話し合ってみましょう。」

5. 教材：

・スティーヴン・ヘルフェルスト (Steven Verhelst) 作曲 《A SONG FOR JAPAN》(日本に捧ぐ歌)

・【鑑賞映像 A】"A SONG FOR JAPAN" by trombonists from all over the world

<YouTube> <http://video.search.yahoo.co.jp/search?rkf=2&ei=UTF-8&p=A+song+for+japan>

・【鑑賞映像 B】A Song for Japan by Central Band Trombone Section

<YouTube><http://video.search.yahoo.co.jp/search?rkf=2&ei=UTF-8&p=A+song+for+japan>

6. 題材目標：

- (1) 《A SONG FOR JAPAN》について作曲者の意図、楽曲の仕組み、自分の感情の変化を理解し、それらを基に「災害復興や幸せな社会づくりのために音楽で自分たちにできること」を考えることに興味・関心をもつ。
- (2) 《A SONG FOR JAPAN》の特徴として、トロンボーンの音色、旋律の重なりや移り変わりを知覚・感受し、楽曲全体のイメージをもって作曲家や演奏者の主張を理解できる。
- (3) 《A SONG FOR JAPAN》の主張や自分の感情の変化と関連付けて「音楽が人々に与える力」を理解し、「災害復興や幸せな社会づくりのために音楽で自分たちにできること」について考え、述べることができる。

7. 評価計画：

評価の観点	評価規準	評価方法・対象
音楽への関心・意欲・態度	<p>関① 鑑賞曲に対してトロンボーンの音色と旋律の重なり、旋律の移り変わりと感情の変化との関わり合いについて積極的にイメージをもつことに取り組んでいる。</p> <p>関② 曲が生まれた背景と社会への影響や作曲家・演奏者による表現の特徴に関心を持ち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。</p>	<p>発言</p> <p>発言・WS</p>
鑑賞の能力	<p>鑑① 鑑賞曲に対してイメージを持ち、それをもたらした要因を、音楽を形づくっている要素の働きから見つけ、イメージと要因とを関連付けて述べている。</p> <p>鑑② 作曲の意図や取組、表現方法や主張について理解し、自分にもたらされたイメージと音楽、それを演奏する人の思いを重ね合わせながら、「音楽が伝えてくれるもの」について価値を深めている。</p>	<p>発言・WS</p> <p>発言・WS</p>
ESDとして獲得を期待する力 (方向目標として継続的にアセスメントしていく観点)	E① 本学習内容と関わらせて、「災害復興や幸せな社会づくりのために音楽で自分たちにできること」について考え、そのことに対する明確な意見を示している。	発言・WS

8. 題材の指導計画：

時	学習活動の内容と教師の発問例	指導上の留意点	評価
1	1. 《A SONG FOR JAPAN》の映像①を鑑賞し、自分の感情の変化とその要因を認識する。		
	<p>1-1 「トロンボーンの音や演奏は聴いたことがありますか？どんな印象を持っていますか？隣同士その印象を伝え合ってください。」</p> <p>1-2 「これから1つの曲を世界中のトロンボーン奏者がつなげていく映像《A SONG FOR JAPAN》を視聴します。どんなところで心が動かされたか？そして、どんな変化がそうさせたのか？映像から演奏者の様子、演奏場面、旋律等で気がついたこと、印象に残っていることなど具体的に挙げて、その理由を言葉で述べてみよう。」</p> <p>1-3 《A SONG FOR JAPAN》プロジェクトのメッセージを読む(資料①)。</p>	<ul style="list-style-type: none"> トロンボーンの音色について、今までの経験の中から隣同士印象を語る。 トロンボーンの音色を意識したことのない生徒、様々なイメージをもっている生徒等、各自の音色を捉えるスタートラインを確認する。 映像を視聴する 心の変化を感じたポイントについて、具体的に映像の場面を挙げながら第一印象を話し合う。 生徒同士の対話 教師と生徒との対話 資料を読み、作曲の背景とその思いについて関心をもつ。 	関①
2. トロンボーンの音色と旋律の重なり、旋律の移り変わりと感情の変化との関わり合いについて知覚・感受する。			
	<p>2-1 「トロンボーンの音色はどう感じたかな？」</p> <p>2-2 「トロンボーンの旋律が重なったり、旋律が変化していったりすることによって、どんな感じをもたらしたかな？」</p> <p>WS① 観点A トロンボーンの音色から感じること 観点B 演奏者とその旋律について 観点C 旋律の移り変わりと感情の変化 観点D 旋律・曲想が醸し出す特徴</p>	<ul style="list-style-type: none"> 心の変化と音色、音楽の変化に気づきながら鑑賞する。 音色、旋律、音の質感とそれ以外、それらの根拠、に分けて隣同士ワークシート上で意見を共有する。 (WS①-1の観点A、B、C、Dで知覚・感受する。) (WS①-2は題名を創りだすまでのイメージメモとして使用する。) 	関①

3. フレーズごとに浮かんだイメージに題名をつけ、旋律・曲想が醸し出す特徴と重ね合わせ、なぜそう感じたかについての解釈と価値判断をする。		
3-1「今度は演奏者が移り変わるタイミングでそのフレーズごとで感じたイメージに題名を付けてみよう。その題名はどんな音楽の様子、変化でつけられたか考え、もう一度確認しながら聴いてみよう。」	<ul style="list-style-type: none"> ・WS①-1の観点で鑑賞しながら、各自がイメージしやすいフレーズから題名を考えていく。 ・題名は、聴きながらWS②に記入する。 ・その理由にも注目しながら鑑賞する。 	鑑①
3-2「自分が付けた題名は、どのような音楽的特徴から付けられたものか。旋律・曲想が醸し出す特徴と重ね合わせ、なぜそう感じたかについて伝え合おう。」	<ul style="list-style-type: none"> ・班でそれぞれの意見を共有する。 ・互いに意見を交流し、気が付いたことを伝える。 	
3-3「この音楽が伝えてくれるものは何だと思いますか。あなたがつけた題名や感じたことを基に考えてみましょう。」	<ul style="list-style-type: none"> ・教師と生徒との対話 ・この音楽の価値について自分なりの意見をもたせ、WSに記入する。 	鑑②
2 4. 《A SONG FOR JAPAN》の映像②を鑑賞し、トロンボーンの音色に注目して演奏者の主張を考える。		
4-1「今回の鑑賞の映像は、実際に被災地に赴いて活動されている陸上自衛隊中央音楽隊トロンボーン・セクションのみなさんによる《A SONG FOR JAPAN》の演奏を鑑賞してみましょう。どんなことが伝わってきますか？」	<ul style="list-style-type: none"> ・トロンボーンの音色から、演奏者の願いや祈りを感じ取り、前回同様、心が動いた瞬間について、その理由とともに発問する。 ・教師と生徒との対話。 	鑑②
4-2「トロンボーンの音色について、今日の演奏からはどのようなイメージが伝わってきますか？前回の演奏と今日の演奏の、それぞれのよさを比較してみよう。」		
5. 『音楽が人々に与える力』について話し合い、災害復興や幸せな社会づくりのために音楽によって自分たちにできることは何かを話し合う。		
5-1「資料2、3を読んで、曲本来の美しさ(音楽のエネルギー)と作曲家の思いを重ねてみよう。その取組が未来へどのようにつながっていくとよいと思いますか？」	<ul style="list-style-type: none"> ・この演奏から伝わってくる、音楽のよさや美しさ、演奏者の主張とを重ね合わせ、意見を引き出して、「音楽が人々に与える力」を再確認する。 	E① 関②
5-2「『音楽が人々に与える力』について話し合おう。」		
5-3「このプロジェクトでは様々なアンサンブルの形態で演奏できるように、楽譜を無料配信しています。『現代だからできること』の取組の中で、ネットで世界中がつながることが提案されていますが、これからまだ継続的に支援するために、皆さんにできること、活動、イベント等、具体的に実現できそうなことを企画してみましょう。」	<ul style="list-style-type: none"> ・4-2 までの学習活動から感じたことを土台にし、災害復興や幸せな社会づくりのために音楽によって自分たちにできることは何か話し合う。 ・話し合ったことを班ごとにまとめ発表する。 (共有方法:①ポスターセッション、②ギャラリートーク 等) 	

9. 資料 :

◆ 資料①

資料①

"A SONG FOR JAPAN" プロジェクトより転載

"A Song For Japan"のサイトへようこそおいでくださいました。このプロジェクトは、洋の東西、プロアマ、個人・グループなどを問わず、世界中のトロンボーン吹きが東日本大震災被災者の方々のために音楽で応援することを狙いとして、海外の日本人トロンボーン奏者たち、および日本人メンバーを含み日本とゆかりのある海外のトロンボーン・グループが協力して立ち上げました。プロジェクト企画メンバー一同、震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈りし、被災されたみなさまに謹んでお見舞いを申し上げます。

今回の震災は、日本観測史上最大のマグニチュード(M)9.0の一回の地震と津波によるものではありません。その後の一週間でM5.0以上の地震がなんと262回にもおよび、一日当たり数十回の余震が断続的に続いています。また、実際の範囲は最も大きな被害を受けた東北や関東にとどまらず、まるで日本各地の震源たちがおたがいに反応し合っているかのように次々と震源地を変えては大きな地震を起こしています。高さ数十メートルともいわれる巨大津波は内陸10kmまで猛威をふるい、多くの市町村を一瞬にしてのみ込み、27,000人以上の死者と行方不明者を出しました。ところによっては日本や世界各国から現地入りしたレスキュー隊が生存者ばかりか収容すべき遺体すらまったく発見できないほどの悲惨さです。また、壊滅的な被害を受けた町が多く、ライフラインが断たれ、一度は間一髪の非難をして助かったはずの人が、食糧や水の不足、真冬並みの極度の寒さに耐えられるだけのヒーターの燃料の不足、医療機器や薬品の不満足などのために命を落とすケースも・・・。生き残った方々の中には、瓦礫と泥の山と化した故郷の町を離れることを余儀なくされた人たちも大勢います。

地震と津波の猛威はすさまじく、日本がいったいどれほどの大きさの災害と相対していたのかが、数週間たった今現在もわかってないほどです。壊滅的な被害を受けた地域が元気を取り戻し復興が完了するまで、いったいどれくらいの年月がかかるのか予想すらつきません。繰り返し襲ってくる脅威と闘い、家族や友人を失い、家や故郷を失い、職場を失い、食糧や水の不足に苦しみ、未来への不安で途方に暮れて始まった道のりは、私たちの想像をはるかに超える長く険しいものでありましよう。支援活動は震災直後の一時だけのものではなく継続して行くことが不可欠ですし、義援金をはじめとした応援活動も、長く継続・持続されていくことが大切です。東北・北関東の被災地の人々が元の平和な生活を取り戻すことができるその日まで、世界中がエールを送り続けることで、被災地の人々にとっていくらかの心の支えになればと思います。

出典 : http://www.jat-home.jp/song_for_japan.html より引用 (2015. 3. 10 確認)

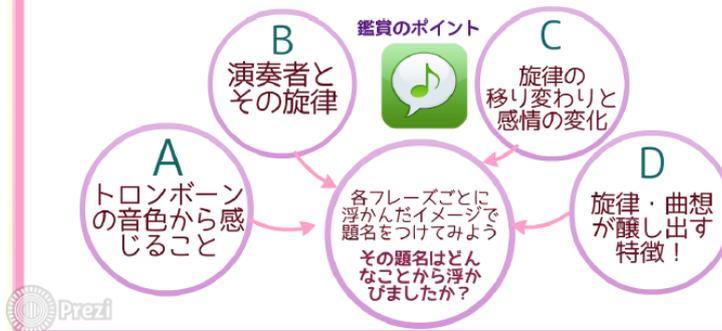
◆ ワークシート ①-1

曲の特徴を捉えよう！

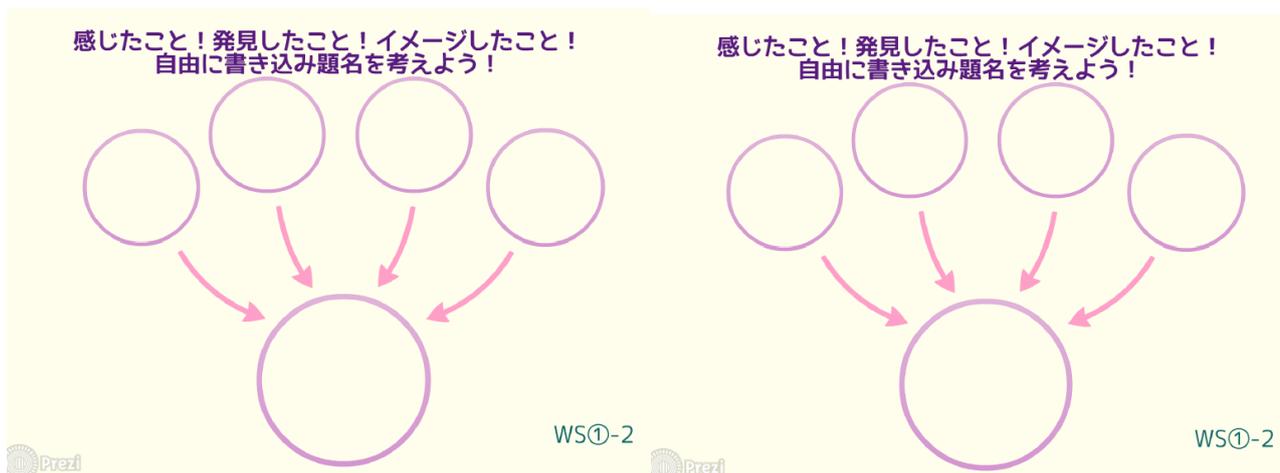
WS①-1

音楽と感情と題名

トロンボーンの音色と様々な演奏者によって旋律（フレーズ）が繋がっていく構成に注目しながら、どんなところに心が動かされたのかを感じ取り、話し合おう。



◆ ワークシート①-1 ①-2



※WS①-2はカードとして1人に数枚配り、思いついたことを自由に記入し発想を集約するメモとして活用する。

◆ ワークシート②

音楽が伝えてくれるもの

感じ取ったことをもとに各フレーズの題名を考えよう

1	2	3	4	5
6	7	8	9	10
11	12	13	14	

出典（写真）：〈YouTube〉 <http://video.search.yahoo.co.jp/search?rkf=2&ei=UTF-8&p=A+song+for+japan> より引用
(2015. 3. 10 確認)

◆ ワークシート③

WS③

実際に被災地へ赴いて活動されている陸上自衛隊中央音楽隊トロンボーン・セクションによる演奏です



①この演奏から感じたことを話し合おう！

②「音楽が人々に与える力」について話し合おう！

③『災害復興や幸せな社会づくりのために音楽によって自分たちにできることは何か』について企画者になって考えてみましょう。

出典（写真）：〈YouTube〉<http://video.search.yahoo.co.jp/search?rkf=2&ei=UTF-8&p=A+song+for+japan> より引用（2015. 3. 10 確認）

◆ 資料2

資料②

A Song For Japanプロジェクト・マネージャー 品川隆氏からのメッセージ

日本在住のトロンボーン吹きの皆様へ
 大震災からこの一年、世界中で本当に多くの人々が日本に想いを馳せてくださり、様々な形で支援の輪が広がっていきました。このA SONG FOR JAPANもそのひとつで、昨年のこのフェスティバルの中止が決まったまさにその頃発起されました。その後多くのトロンボーン奏者のみなさんが結束・協力していただき、さらにトロンボーンという楽器の枠を越えて、いろいろな音楽シーンで演奏されるようになりました。

トロンボーンは、元来は人間の生死と深い歴史的なかわりをもつ楽器であり、他の楽器では成し得ない至上のハーモニーが醍醐味であります。そしてしばしば抱かれがちな印象とは正反対の(?)美しいメロディが奏でられることに、トロンボーン吹き以外の人々が気づいてくださったと思っています。仲間と立ち上がって何かのために一緒に活動する様子は、まさにトロンボーン吹きならではだと思います。

また日本は欧米から距離があるにもかかわらず、以前から非常に多くのアーティストたちが訪れている特別な国です。日本にゆかりのある外国人奏者たち、そして外国で活躍する日本人音楽家たちが、日本のために演奏したり、チャリティバザーを開催したり、ストリートライブやコンサートで義援金を集めたりと、力を尽くしてくださっています。震災から一年が経とうとしている今も、様々な活動が世界各地で継続的に行われていることを、私たちは忘れてはならないでしょう。

個人にできることは限られていますが、それを継続することは決してできないことではありません。音楽というのは、物質からは得がたいものを人々に届ける力があると思います。それと同時に、あの大震災で起こったこと、今も闘っている方々がたくさんいるということを心に留めておくための大切なツールだと思っています。このA Song For Japanがトロンボーン界で生まれ、トロンボーン吹きたちによって広がっていったことを誇りに思う、という声が世界各地から多く寄せられています。

"3.11"に開催される今回のフェスティバル。ぜひ声を掛け合って東京・滝野川会館に結集しましょう。そして犠牲になった方々へ祈りを捧げ、被災地で奮闘されている方々へエールを送りましょう。現役バリバリの方も、今ちょっと腕に自信がないという方も、それぞれの想いをサウンドに乗せて演奏し、世界へ向けて「ありがとう！日本は頑張っているよ！」と"返信メッセージ"を発信してみませんか。もちろん、ご家族、お友達、同僚の方々もフェスティバルにお誘いしましょう。

トロンボーンの輪が広がり、心の絆が深まりますように。
 2012年3月11日
 A Song For Japanプロジェクト・マネージャー 品川隆

出典：http://www.jat-home.jp/song_for_japan.html より引用（2015. 3. 10 確認）

1. 題材の趣旨：

東日本大震災では、多くの尊い命が失われた。生き残った人々は、その悲しみを乗り越え、失われた命への思いを抱き続けながら、これからの人生を生きていかねばならない。そのような状況の中で、「音楽の力」が注目された。そのことは、音楽を表現することで生活へのエネルギーを取り戻したり、音楽を聴くことで失われた命や風景が一変してしまった故郷への思いなどを音楽と重ね合わせて心の安定を図ったりした人々の姿に表れていた。

本題材では、「祈りの音楽」として長く歌われており、芸術音楽の起源とされている「グレゴリオ聖歌」と「声明」の鑑賞を通して、それぞれの音楽を味わい、特徴を理解することで、人間と音楽との関わりについて考える。さらに、その学習を踏まえて「ニグロ・スピリチュアル」を鑑賞し、様々な民族がもつそれぞれの歴史的・文化的背景を尊重し、世界全体として持続可能な社会づくりのために、自分は何ができるかを考え、音楽文化を尊重すること＝人命を尊重すること、に深い関心を寄せられるようにしたい。

2. 指導内容・ねらい：

【指導内容】・音楽の背景となる風土や文化・歴史など

・人間と音楽との関わり

【ねらい】・生活や社会における人々と音楽との関わり方の理解

3. ESDとして獲得を期待する力（「ガイド」より）：

・自分と音楽、人間と音楽との関わりに関心をもち、音楽文化を尊重する態度

4. 思考させるテーマ（「ガイド」より）：

・㊸「いつの時代、どこの国に生まれたとしても、音楽や芸術が人々に幸せをもたらすことができるとしたら、そのために、今の自分たちには何ができるだろうか、話し合ってみましょう。」

5. 教材：

- ・グレゴリオ聖歌より 《Ave verum corpus》
- ・真言声明より 《理趣経》
- ・ニグロ・スピリチュアルより 《Swing Low, Sweet Chariot》

6. 題材目標：

- (1) 楽曲が生み出され、育まれてきた時代や地域、人々の生活の影響などによる音楽表現の特徴に関心をもち、人間と音楽との関わり、及び多様な音楽文化を尊重することの大切さを理解し、人々に伝えるためにできることについて主体的に考える。
- (2) 声の音色、旋律、強弱を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感受しながら、楽曲の文化的・歴史的背景による表現の特徴を理解して、楽曲や演奏を解釈したり、それらの価値を考えたりして、音楽に対する理解を深め、よさや美しさを創造的に味わって聴く。
- (3) 鑑賞曲の音楽表現の特徴について理解し、人間と音楽の関わりについて関心をもち、「人間にとっての『祈り』」を通して、多様な音楽文化を尊重することの大切さを理解し、人々に伝えるためにできることを考え、述べる。

7. 評価計画：

評価の観点	評価規準	評価方法・対象
音楽への関心・意欲・態度	<p>関① 《グレゴリオ聖歌》《声明》が生み出され、育まれてきた時代や地域、人々の生活について理解する学習に関心をもっている。</p> <p>関② 《グレゴリオ聖歌》《声明》《Swing Low, Sweet Chariot》において、それぞれの文化的・歴史的背景による音楽的な特徴に関心を持ち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。</p>	<p>発言・観察</p> <p>発言・WS・観察</p>
鑑賞の能力	<p>鑑① 声の音色、旋律、強弱を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感受しながら、楽曲の文化的・歴史的背景による表現の特徴を理解している。</p> <p>鑑② 鑑賞曲それぞれの表現の特徴を知覚・感受しながら、文化的・歴史的背景を理解して、それぞれの価値を考え、音楽に対する理解を深め、よさや美しさを創造的に味わって聴いている。</p>	<p>発言・WS</p> <p>WS</p>
ESD として獲得を期待する力 (方向目標として継続的にアセスメントしていく観点)	E① 本学習内容と関わらせて、自分と音楽、人間と音楽との関わりに関心を持ち、音楽文化を尊重することの意味や重要性を理解し、それを人々に伝えるために自分ができることについて明確な意見を示している。	発言・WS・観察

8. 題材の指導計画：

時	学習活動の内容と教師の発問例	指導上の留意点	評価
1	1. 自分の「おすすめの名曲」を紹介し合う。		
	1-1 自分の「おすすめの名曲」をあげ、それについて理由を含めてペアで互いに紹介し合う。	・互いに音楽のよさを共感できる雰囲気をつくれるよう配慮する。	
	2. 音楽を聴いて印象をもつ。		
2-1 「これから聴く音楽はどんな印象がするかな。印象を言葉にしてみよう。」	<ul style="list-style-type: none"> ・曲名は伝えない。 ・WS にメモを取りながら聴かせる。 ・述べられたイメージを板書する。 ・他者の意見も WS に分けて記入させる。 	関①	
2-2 「その印象は、どのような音楽の特徴からイメージされたのか、述べてみよう。」	<ul style="list-style-type: none"> ・要因(音楽の特徴)について板書追記する。 		
2-3 「今、皆さんから出された印象と、その要因(音楽の特徴)を板書しましたが、これらに着目し、確認しながらもう一度、今の曲を聴いてみよう。」			
3. 鑑賞曲が成立した時代や地域のことを推察する。			
3-1 「では、この2つの音楽が生まれた背景について、皆さんが捉えた音楽の特徴を踏まえながら考えてみたいと思います。その際、声の音色や響き、旋律の動き方や強弱から、どの時代に、どの地域やどのような場所で歌われていたものか、グループで話し合いながら推察してみよう。」	<ul style="list-style-type: none"> ・補助資料として、教会と寺の写真なども提示し、ふさわしい場所はどちらか、など建築物の違いなども手がかりにしながら考えさせる。 ・話し合いが進みにくいグループには、単旋律、男声のみの演奏など音楽的な特徴に着目させ、普段聴いている音楽と比較しながら考えるよう助言する。 ・グループごとに話し合った内容については適宜、発表して全体共有を図る。 		
3-2 「今、聴いた2つの音楽は『グレゴリオ聖歌』と『声明』です。それでは、グループで話し合ったことを確認しながら、それぞれ1回ずつ聴いてみよう。」			

<p>7-1 「この学習を通して、『人間と音楽との関わりを踏まえ、音楽文化を尊重することの大切さと、そのことを世界の人々に伝えるために自分ができること』についての意見を WS に書いてみよう。」</p> <p>7-2 「最後に、WS に書いた皆さんの意見を述べ合ってみよう。」</p> <p>7-3 「自分が生活している社会の音楽文化を大切にすることはもちろん、他の国や地域の音楽文化を尊重することは、互いを認め合うことにつながり、社会全体の平和につながっていくことになるのですね。」</p>	<p>・本題材で扱った内容を踏まえさせるため、以下の条件を与えて記述させる。</p> <p><条件1> この3時間から学んだ「音楽文化を尊重することの大切さ」を述べること。</p> <p><条件2> 以下の語句を使用すること。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人間にとっての音楽 ・自分が(に)できること ・《グレゴリオ聖歌》《声明》《Swing Low、Sweet Chariot》の3曲名のうち一部、または全部。 <p>・自分と他者の意見を確かめさせながら、《グレゴリオ聖歌》《声明》《Swing Low、Sweet Chariot》を聴く。</p>	<p>E①</p>
--	--	-----------

9. 資料：
◆ ワークシート

「人間と音楽との関わり - 『祈りの音楽』を通して-」

____年 ____組 ____番 氏名_____

I 2つの音楽を聴き比べてみよう。

	音楽A	音楽B
音楽の印象	【自分】	【自分】
	【他の意見】	【他の意見】
音楽の特徴	【自分】	【自分】
	【他の意見】	【他の意見】

II 2つの音楽が成立した背景を考えてみよう。

時代	【理由】	【理由】
地域	【理由】	【理由】
場所	【理由】	【理由】

Ⅲ 2つの音楽に関する事柄を調べてみよう。

	「 」 (音楽A)	「 」 (音楽B)
調べた事柄		

Ⅳ 「ニグロ・スピリチュアル」を鑑賞しよう。

音楽の印象		
音楽A、Bとの 共通点や相違点	【共通点】	【相違点】

Ⅴ アフリカン・アメリカンの人々は、どのような思いでこの歌を歌ったか、考えてみよう。

Ⅵ 「人間と音楽との関わりを踏まえ、音楽文化を尊重することの大切さと、そのことを世界の人々に伝えるために自分ができること」を書いてみよう。

<条件1> この3時間から学んだ「音楽文化を尊重することの大切さ」を述べること。

<条件2> 以下の語句を使用すること。

- ・人間にとっての音楽
- ・自分が (に) できること
- ・《グレゴリオ聖歌》《声明》《Swing Low, Sweet Chariot》の3曲名のうち一部または全部。

(山内 尚)

1. 題材の趣旨：

中学校でも文楽の鑑賞は行われ、「三業一体」について指導されていることと思う。高校生に対して文楽を通して習得せたいことは、三業一体から日本人の美意識や機微、感性を捉え、さらに、何かと何かが合わさる「合わさり方」に見られる日本文化の特色を理解しようとする主体的な意識であると考え。

今後ますます地球規模の文化的グローバル化が進んでいく中で、互いの感性を尊重し合ったコミュニケーションが求められる。それは人間理解、多文化理解の根底に関わるものである。そのためには、日本人の感性は伝統文化と関わってどのように培われてきたのか、また他国の人々はどのような感性をもっているのかを考え、理解していかなければならない。例えば文楽の魅力を世界に発信する時、三業一体の意味だけを伝えても日本伝統文化としての文楽を発信することはできない。

本題材では、三業一体が日本人の感性とどのように関わるのか、また、伝統のみならず現代における日本文化の特色として、三業一体と通ずるものはあるのかどうか、などを考えさせる。その際、「あうんの呼吸」、「気配を感じ取る」、「静と動」などのキーワードがポイントになるだろう。それらを通して、日本の美や日本人の美意識、文楽や日本伝統音楽も含めた日本文化への愛着と、今後の文化創造へと繋がる視点をもたせたい。

2. 指導内容・ねらい：

【指導内容】・音楽の背景となる風土や文化・歴史など

・他芸術と関わった総合芸術における音楽

【ねらい】・総合芸術における作品の精神の理解

3. ESDとして獲得を期待する力（「ガイド」より）：

・「総合芸術の多様性を理解し、尊重する態度」

4. 思考させるテーマ（「ガイド」より）：

・⑳「異なる何かと何かを融合させて、新たなモノやコトを創り出すことができないか、身の回りを見渡しながら考え、意見を出し合ってみましょう。」

5. 教材：

・文楽《卅三間堂棟由来》

6. 題材目標：

- (1) 三業一体から日本人の感性について意欲的に考える。
- (2) 三業一体を理解し、日本人の感性と関わらせながらその美を感受する。
- (3) 三業一体の美と、それを生み出した日本人の感性を理解し、何かと何かが合わさってできる日本文化特有の「合わさり方」について考える。

7. 評価計画：

評価の観点	評価規準	評価方法・対象
音楽への関心・意欲・態度	関① 《卅三間堂棟由来》の太夫の声、三味線の音、人形の動きの合わさり方に関心をもって鑑賞している。 関② 三業一体に見られる日本人の感性について意欲的に考えている。	観察・発言 発言・WS
鑑賞の能力	鑑① 物語を伝えるために、太夫、三味線、人形の動きがどのような関わり方をしているかを理解している。 鑑② 三業一体の美を、日本人の感性と関わらせて感受している。	WS・発言 発言
ESDとして獲得を期待する力 (方向目標として継続的にアセスメントしていく観点)	E① 三業一体を通して考えた日本人の感性を基に、何かと何かの合わさり方について考えることができる。	観察・発言・WS

8. 題材の指導計画：

時	学習活動の内容と教師の発問例	指導上の留意点	評価
1	1. 「三業一体」について知る。		
	1-1 「中学校で文楽を鑑賞した経験があると思います。そこで『三業一体』について学んだことと思いますが、まだそのことを理解していない人も含めて、あらためて三業一体と、そこに見られる美しさや、凄さ、そして日本人の感性を考えてみたいと思います。」	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスの実態に応じて、「文楽」についての簡単な説明が必要になる。ポイントは以下の通り。 <ul style="list-style-type: none"> ・太夫による語り、三味線(太棹)、人形(三人遣いによる)による、300年以上の歴史をもつ大阪発祥の伝統芸能であること。 ・他の人形劇とは異なる点があること。 	
	1-2 「まず、今日鑑賞する《卅三間堂棟由来》のあらすじを簡単に紹介しますね。」		
	1-3 「それでは『お柳のクドキ』の部分を鑑賞してみましょう。その時、太夫の声、三味線の音、人形の動きや表情の3点に注目し、それらの特徴を見つけ出す意識で聴き、WS1にメモしてください。鑑賞後、そのメモを基に述べてもらいます。」	<ul style="list-style-type: none"> ・映像で鑑賞する。 ・状況に応じて、数回視聴させる。 ・発言は、3つに分けて板書し、さらに感じ取った雰囲気を繋げて記す。 ・発言させる時には、以下の点に注意する。 <ul style="list-style-type: none"> <太夫について> <ul style="list-style-type: none"> ・声の出し方、音色、感情表現 ・「ヤ、ヤ、ヤ」の部分を真似させる。 <三味線について> <ul style="list-style-type: none"> ・音の強弱、音色、リズムの変化、間 ・語りとの関係 <人形について> <ul style="list-style-type: none"> ・人形の動き、表情 ・人形を遣う人の表情 	関① 鑑①
	1-4 「次に、太夫、三味線、人形の関わり方に注目してみましょう。まず、音声を消して人形の動きだけを観てみます。その後で音声を加えてみます。音声が加わることでどのように雰囲気が変わるか考えながら鑑賞してください。鑑賞後、これを観て感動したことも含めて述べてもらいます。」	<ul style="list-style-type: none"> ・ここは、「太夫・三味線」と「人形」との関係に焦点を当てる学習。 ・1-3と同様、「お柳のクドキ」の場면을視聴させる。 ・感動したことも含めることを重視する。 ・発言は板書する。 <p><気付かせたいこと></p> <ul style="list-style-type: none"> ・音声がなくても緊張感があること ・人形の微細な動きや表情 ・人形の動きは変わらなくても、音声が加わることによって人形の表情についての感じ取り方が変化すること 	鑑①
	1-5 「これまでのところをまとめてみましょう。この図(WS2の拡大版を掲示する)のA、B、Cについて、意見を述べてください。出されたことはWS2に記して行ってください。」	<ul style="list-style-type: none"> ・互いにどのような効果を与え合っているかを考え、理解させる。 ・クラスの実態に応じて、数回視聴させてもよい。 	鑑①
2	2. 三業一体の美を味わい、日本人の感性と関わらせて理解する。		
	2-1 「前の時間では、太夫と三味線(浄瑠璃)、太夫と人形、三味線と人形の二者の関係について学びましたが、この時間は、三者の関係について考えてみたいと思います。WS2で	<ul style="list-style-type: none"> ・映像で鑑賞する。 ・ポイントを伝えて鑑賞させる。 	関① 鑑②

<p>言うと、太線で囲った枠ですね。それでは《卅三間堂棟由来》の『木遣り音頭の段』の部分鑑賞しましょう。ポイントは、太夫、三味線奏者、人形を遣う人の視線です。鑑賞後、感動したこと、感じ取った美しさ、発見したこと、不思議に思ったことなどを述べてもらいます。」</p> <p>2-2 「今、『どうやって合わせるんだらう』とか、『指揮者がいない』、といった疑問や発見が述べられました。まず、文楽において太夫、三味線、人形が一体となっていることを『三業一体』と言います(WS2のDに記入させる)。そして、これは文楽の最大の特徴の一つです。例えば、今まで鑑賞してきたオペラでは、オーケストラと歌手が指揮者のもとで合わせていましたね。では、文楽では何を頼りにして合わせるのでしょうか。もう一度『木遣り音頭の段』の部分鑑賞しますので、考えてみてください。WS のEにメモを取りながら鑑賞してもよいですよ。」</p> <p>2-3 「人形遣いも一つの人形について三人が操っているように(主遣い、左遣い、足遣い)、文楽ではそれぞれの異なる仕事が一體となって表現されています。また、三業を合わせるのは本番前の舞台稽古1回だけだそうですよ。こうした三業一体の特質をキーワードで挙げるとすると、どんな言葉が思い付きますか。私だったら『あうんの呼吸』かなあ。」</p>	<p><次の学習に繋げることのできる発言></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「互いを見合っていない。」 ・「どうやって合わせるの？」 ・「指揮者はいないの？」 ・「太夫が指揮者役でリードしているのではないか」 <p>・「三業一体」という語について理解させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オペラやオーケストラなど、比較の例を示すとよい。 ・グループで話し合わせてもよい。 <p><次の学習に繋げることのできる発言></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「互いを見ることなく感じ取っているのではないか。ものすごく鋭い感性が働いているのではないか。」 ・「音を聴いて(聴覚を働かせて)合わせているのではないか。太夫の声が激しくなると三味線も激しい音になり、人形の動きも激しくなっているのだ。」 ・「互いを見なくても一体化できるように、厳しい稽古を重ねているのではないか。」 <ul style="list-style-type: none"> ・人形遣いについては踏み込んで説明してもよい(「足十年、左十年」と言われ、主遣いになるには20年以上の修行が必要なことなど)。 ・2-2で出した意見を参考にして、キーワードを考えさせる。「あうんの呼吸」など、例示するとよい。 <p><予想されるキーワード></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「気配を感じ取る」 ・「静と動」 ・「鋭い感性」 ・「言わなくてもわかる」等 	<p>鑑②</p> <p>関②</p>
<p>3. 三業一体を通して考えた日本人の感性を基に、何かと何かを合わせることができる日本文化やその特色について考える。</p>		
<p>3-1 「今、挙げられたキーワードは日本人の感性と共通している面があるかもしれません。それを確かめるために、このキーワードに沿って『何かと何かを合わせることができる日本の文化』をグループで考えてみましょう。伝統文化でもよいですし、現在の日本の文化を表すものでもよいですよ。後で発表してもらいますが、その時、日本人のどのような感性によるものか、そしてそこにはどのような美しさがあるかを含めて述べてください。」</p> <p>3-2 「文楽は、世界無形文化遺産に指定されていますが、大阪市の経済の影響を受けて存続が危ぶまれています。これまで考えてきた日本の文化の特色や日本人の感性と合わせて、文楽の魅力を世界に発信する文章を考えてみましょう。WS3に記述して、次の時間に提出してください。英語で書いてもいいですよ。最後にもう一度、《卅三間堂棟由来》の『お</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・例として、能や歌舞伎(文楽と同じように、指揮者がいなくて合わせる)、相撲(立ち合いで呼吸を合わせる)、おもてなし(迎える人が客の表情から求めていることを感じ取ってコミュニケーションを成立させる)などを示してもよい。 <ul style="list-style-type: none"> ・次時で全員に配布したり、発表し合ったりさせてもよい。 ・他の部分を視聴させてもよい。 	<p>E①</p> <p>E①</p>

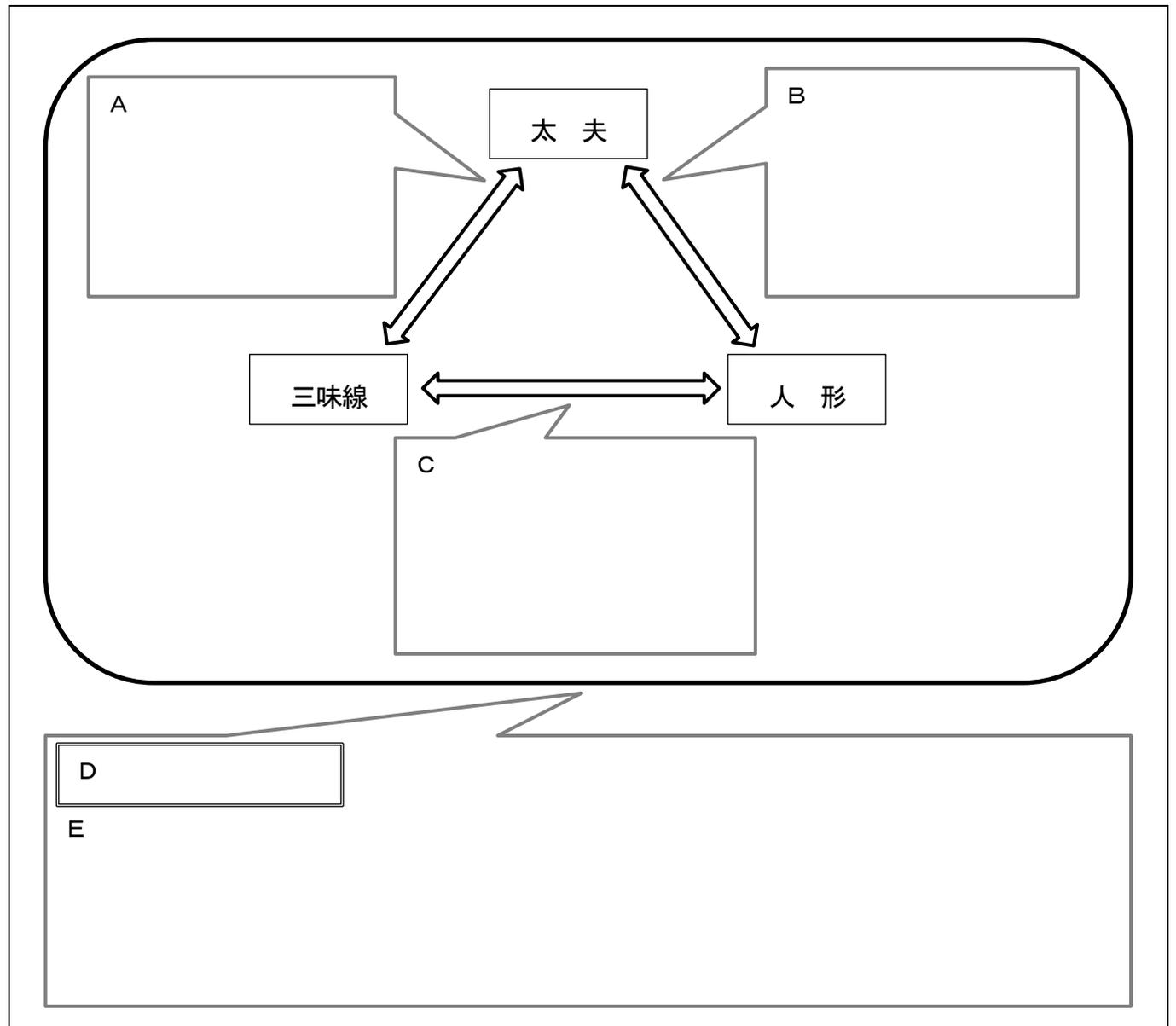
	柳のクドキ』の部分を見せますので、伝えたいことの構想を 考えながら鑑賞してください。」		
--	--	--	--

9. 資料：

◆ワークシート1

	太夫の声	三味線の音	人形の動き
発見した特徴			
感じ取った雰囲気など			

◆ワークシート2



◆ワークシート3

この学習を通して学んだことを踏まえて、文楽の魅力を世界に発信する文章を書きましょう。その際、自分の考えと、以下の言葉のすべてを用いること。英語で書いてもよいです。

- ・ 三業一体 (Sangyo-ittai)
- ・ 日本人の感性 (Japanese sensitivity)
- ・ 日本の文化 (Japanese culture)

※ 本題材計画やワークシートは、平成 26 年度 第 56 回近畿音楽教育研究大会（奈良大会）での越尾直美教諭（奈良市立富雄中学校）による研究授業（「文楽の魅力」）を参考に、高等学校レベルに改編したものである。

（宮下 俊也）

1. 題材の趣旨：

本題材は、我が国の伝統的な芸能における音楽の役割や魅力を味わい、それらを手掛かりとして、特に総合芸術としての歌舞伎に焦点を当て、文芸・舞踊・演劇など様々な分野との結び付きを意識するとともに、歌舞伎が多くの諸芸能の要素を取り入れながら江戸の町民文化として独自の発展を遂げたことを理解し鑑賞する題材である。

具体的には、《京鹿子娘道成寺》などの鑑賞を通して、我が国の伝統音楽における声の音色の特徴と表現上の効果との関わりを感じ取ったり、謡、義太夫節、長唄などの音楽の特徴を理解したりしたことを基に、歌舞伎の音楽が能や文楽などの音楽の影響を受けながら江戸の町民文化として発展し、今日まで続いていることを理解して鑑賞する。そして、伝統文化を継承し創造・発展させていくことの意識化を図る。

2. 指導内容・ねらい：

【指導内容】・音楽の背景となる風土や文化・歴史など

・人間と音楽との関わり

【ねらい】・生活や社会における人々と音楽との関わりを理解

・音楽文化の継承や発展への貢献についての理解

3. ESD として獲得を期待する力（「ガイド」より）：

- ・過去に築かれた音楽文化や伝統を尊重し、その持続発展に貢献しようとする力
- ・総合芸術の多様性を理解し、尊重する態度

4. 思考させるテーマ（「ガイド」より）：

- ・④「身の回りに伝統の継承と創造的に発展した例があるか意見を出し合ってみましょう。また、それらが人々にとってどのような意味があるか考えてみましょう。」

5. 教材：

- ・初世 杵屋弥三郎 作曲《京鹿子娘道成寺》（宝暦 3 年（1753 年）初演）
- ・観世小次郎信光 作（伝）《道成寺》（室町時代後期初演）

6. 題材目標：

- (1) 我が国の伝統音楽の特徴と、これまでの継承と発展の経緯を理解し、伝統を継承し創造的に発展させることについて興味・関心をもつ。
- (2) 《道成寺》《京鹿子娘道成寺》の音楽の特徴となる要素を知覚・感受し、歌舞伎の成立について理解して、それらのよさや美しさを味わって聴く。自分が抱いたイメージをもとに、「伝統を継承し創造することの意味」について考え、述べることができる。
- (3) 伝統文化を継承し創造的に発展させていくことについて、その意味を考える。

7. 評価計画：

評価の観点	評価規準	評価方法・対象
音楽への関心・意欲・態度	<p>関① 我が国の伝統音楽の声の音色の特徴と表現上の効果との関わり、楽曲の文化的・歴史的背景、謡、義太夫節、長唄のそれぞれの特徴に関心をもち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。</p> <p>関② 歌舞伎の音楽が、能や文楽などの音楽の影響を受けながら、江戸の町民文化として発展し、今日まで続いていることを理解して鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。</p>	<p>観察・発言・WS</p> <p>観察・発言・WS</p>
鑑賞の能力	<p>鑑① 謡、義太夫節、長唄の音色、リズム、旋律、テクスチュアを知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感じながら、それぞれの音楽の特徴を理解して聴いている。</p> <p>鑑② 『道成寺』と『京鹿子娘道成寺』のそれぞれの音色、リズム、速度、旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感じながら、声の音色の特徴と表現上の効果との関わりを感じ取り、謡、長唄のそれぞれの特徴についての理解を深め、よさや美しさを創造的に味わって聴いている。</p> <p>鑑③ 音色、リズム、速度、旋律を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気などを感じながら、『京鹿子娘道成寺』の文化的・歴史的背景を理解したり、自分にとっての楽曲の価値を考えたりして、我が国の伝統的な音楽に対する理解を深め、よさや美しさを味わって聴いている。</p>	<p>観察・発言・WS</p> <p>観察・発言・WS</p> <p>観察・発言・WS</p>
ESDとして獲得を期待する力 (方向目標として継続的にアセスメントしていく観点)	E① 本学習内容と関わらせて、「伝統を継承し創造することの意味」について明確な意見を示している。	発言・WS

8. 題材の指導計画：

時	学習活動の内容と教師の発問例	指導上の留意点	評価
1	1. 我が国の伝統音楽の種類やその音楽的な特徴、文化的・歴史的背景に関心をもち。		
	1-1 「日本の舞台芸術とその音楽のイメージについてクラス全体で自由に話し合い、内容を〈WS I〉にまとめよう。」		関①
	1-2 「今から視聴するA～Cの3種類の舞台芸術から、声や楽器の音色の特徴や感じ取った雰囲気について、それぞれ〈WS II〉にまとめよう。」	<ul style="list-style-type: none"> ・芸術の種類は伝えない ・〈WS II〉の記述をクラス全体で交流する。 ・それぞれの芸術の種類やその音楽の種類、文化的・歴史的背景を示す。 A：〈羽衣〉…能（京・武家）…謡 B：〈義経千本桜〉…文楽（大阪・町民）…義太夫節 C：〈鰯魚唄〉…歌舞伎（江戸・町民）…長唄 	
	2. 《京鹿子娘道成寺》の音楽について、声の音色を中心として、その特徴を知覚・感受する。		
	2-1 「《京鹿子娘道成寺》という歌舞伎から第一段〔道行〕と第八段〔クドキ〕の場面を聴取します。それぞれの声や楽器の音色と旋律の特徴を〈WS III〉にまとめよう。」	<ul style="list-style-type: none"> ・一度目は映像と併せて視聴し、出語りや出囃子などの舞台の様子も意識させる。 ・二度目は声や楽器の音色や旋律の特徴を捉えやすくするため、音声のみ聴取する。 	
	2-2 「道行とクドキはそれぞれ謡、義太夫節、長唄のどれに似ているだろう。」	<ul style="list-style-type: none"> ・〈WS III〉を根拠として自分の考えを表明する。 	
	2-3 「どうやら、音楽の特徴から考えると、歌舞伎には長唄だ	<ul style="list-style-type: none"> ・歌舞伎における義太夫節は「竹本」と呼ば 	

	けでなく、義太夫節が使われているようだね。」	れることを補足する。	
3. 我が国の伝統音楽の種類とその文化的・歴史的背景との関連について自分なりの意見をもつ。			
3-1	「能、文楽、歌舞伎が発展した時代や地域、担い手とそれぞれの音楽の特徴とはどんな関連があるだろうか。ここまですり取ったことや感じたことを基に〈WSIV〉に仮説を立ててみよう。」	<ul style="list-style-type: none"> ・ 仮説をクラス全体で共有する。 ・ 述べられた仮説を板書で整理し、以下の点を導くとともに、それらを基に、道行とクドキを再度視聴する。 <ul style="list-style-type: none"> ○ 華やかな町民文化と厳かな武家の文化 ○ 三味線を用いる町民文化 	鑑①
2 4. 本時で扱う能と歌舞伎の場면을視聴し、楽曲の雰囲気や声や楽器の音色を知覚・感受する。			
4-1	「前回観た歌舞伎の他に、能にも《道成寺》という作品があるので比べてみよう。」		
4-2	「《花の外には松ばかり〜》と《乱拍子》という舞を視聴するよ。舞の雰囲気や声や楽器の音の音色の特徴について〈WSV-①〉にまとめよう。」	<ul style="list-style-type: none"> ・ 能の謡を視聴する。 ・ 謡や謡ガカリという言葉は5・2まで使わない。 	
4-3	「声の音色や速度について聞き取ったことや感じたことを〈WSV-②〉に記入しよう。」	<ul style="list-style-type: none"> ・ 4人のグループでワークシートの内容を交流する。 	
4-4	「歌舞伎の方も視聴してみよう。」	<ul style="list-style-type: none"> ・ 歌舞伎の謡ガカリを視聴する。 	
4-5	「能と歌舞伎が同じ詞章、つまり同じ歌詞でうたっていたのに気付いたかな。ところで、歌舞伎の長唄の特徴である三味線の音はあったかな。」		
5. 謡と謡ガカリをうたったり、うたったことを通して意見を交換したりして、それぞれの特徴を感じ取る。			
5-1	「グループで、音の高さや音のつながり方を示す記号を用いて、能と歌舞伎のうたの旋律を〈WSV-③〉に視覚化してみよう。」	<ul style="list-style-type: none"> ・ 能と歌舞伎の視聴教材に合わせてうたい方を真似したり、それぞれの音楽的な特徴を比べてたりしながら進める。 	
5-2	「歌舞伎の方の楽譜を見てみよう。謡ガカリと書いてあるね。これは『謡風に』という意味なんだ。つまり、能の要素を歌舞伎に取り入れたんだね。だから歌舞伎の三味線も使われていなかったんだね。」	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「謡ガカリ」という能の謡に影響を受けた音楽が歌舞伎にあることを知らせる。 	
6. 音楽的な特徴と表現上の効果との関わりについて、自分なりの意見をもち、クラス全体で交流する。			
6-1	「能の謡や乱拍子を取り入れる際、『京鹿子娘道成寺』の謡ガカリと乱拍子にどんな工夫をしたか、聞き取ったことや感じ取った効果を中心に、あなたが作者になったつもりで考えてみよう。舞踊、衣装などの音楽以外の芸術的要素も含めて考え〈WSVI〉にまとめよう。」	<p>生徒の意見（例）</p> <p>「作者は、歌舞伎の華やかさと能の落ち着いた雰囲気をうまく合わせています。一見、歌舞伎の色が強いような気がしますが、能独特の間を大事にして作っているところから、今は華やかな歌舞伎の方が人気になっているけど、その歌舞伎に混ぜつつ能の文化を残したいという気持ちがあると思います。」</p> <p>「作者は、テンポを速くして、声のトーンを高く音量を上げることによって、華やかさや明るさを表現しているの、当時の江戸の華やかで明るい町民文化を表現していると思います。」</p>	鑑②

3	7. 歌舞伎のよさや美しさについて、自分なりの価値判断をし、創造的に味わって聴く。	
7-1 「長唄の音楽的な特徴を述べるとともに、歌舞伎《京鹿子娘道成寺》が江戸時代から町民に愛され、現在まで250年以上も上演され続けている理由を考え、具体的な場面を挙げて〈WSⅧ〉にまとめよう。」	<ul style="list-style-type: none"> ・《京鹿子娘道成寺》をダイジェストで鑑賞し、意見をもつ。 	関② 鑑③
7-2 「身の回りに伝統の継承と創造的に発展した例があるか意見を出し合ってみましょう。また、それらが人々にとってどのような意味があるか考えてみましょう。」	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの学習を踏まえ、個人で考えたことを発表し合い、意見交流する。 ・意見交流したことを基に、謡と謡ガカリを再度鑑賞する。 	E①

9. 資料：
◆ ワークシート

日本の伝統をつたえる

～ 京鹿子娘道成寺に見る日本の音楽文化 ～

年 組 番

I 日本の伝統的な舞台芸術の種類、その声や楽器がどんな音か、舞台の雰囲気などについて知っていることやイメージを、自由に意見交換してみよう。※参考になった意見は、青で記入しよう
メモ

II Iについて、A～Cにおける代表的な演目を視聴し、声や楽器の音色、リズム、音のつながりなどを上段に、またそれらがつくる全体の雰囲気を下段にまとめよう。

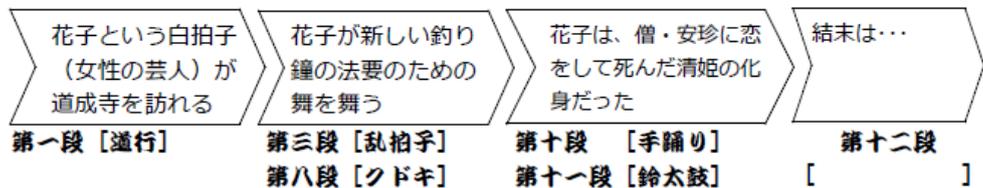
舞台芸術の種類	室町～戦国/安土桃山	江戸時代 (1603～1868年)
A _____ () 中心	『羽衣』(室町後期) 声や楽器 雰囲気	→ 式楽となる
B _____ () 中心		『義経千本桜』(1747年)
C _____ () 中心		『京鹿子娘道成寺』(1753年) 『勧進帳』(1840年)

III 『京鹿子娘道成寺』から二つの場面を聴いて、音楽の特徴について表に整理してみよう。

聴く視点		第一段 [道行]	第八段 [クドキ]
声	音色・リズム・ 音のつながりなど		
	音色・リズム・ 音のつながりなど		
声に対する 楽器の役割			
雰囲気 (曲想) は? どれに似てる?		A B C	A B C

IV A～Cの舞台芸術が発展した時代や地域、担い手 (文化的・歴史的背景) とそれぞれの音楽の特徴とは、どんな関連があるか、聴き取ったことや見たこと、得た知識などを基に仮説を立ててみよう。

『京鹿子娘道成寺』のあらすじと舞踊



V 『道成寺』と歌舞伎『京鹿子娘道成寺』の一場面について、①声や舞の雰囲気や印象など、感じたことをまとめよう。さらに②声の音色や速度について文章でまとめ、③音の高さ・つながり方などを詞章の上に√などの線を用いて楽譜化しよう。※詞章を / で区切ってもいいです

能 謡	①声の雰囲気・印象	舞【乱拍子】の雰囲気・印象
	②声の音色・速度	
	③音の高さ・つながり方	
シテ	はな ほか まつ 花の外には松ばかり 花の外には松ばかり 暮れそめて鐘や響くらん	かね ひび

歌 舞 伎 謡 力 カ リ	①声の雰囲気	舞【乱拍子】の雰囲気・印象
	②声の音色・速度	
	③音の高さ・つながり方	
唄方	花の外には松ばかり 花の外には松ばかり 暮れそめて鐘や響くらん	

VI 『京鹿子娘道成寺』の謡ガカリと【乱拍子】にどんな工夫をしたか、Vで聴き取ったことや感じ取った効果を中心に、あなたが作者になったつもりで考えてみよう。舞踊、衣装などの音楽以外の芸術的要素も含めて考えてみよう。

.....
.....
.....

VII ①能の謡と比較しながら長唄の特徴を説明しよう。その際、声の音色、音のつながり方、速度、使われている楽器などの視点から説明しよう。

②『京鹿子娘道成寺』が江戸時代から庶民に愛され、現在まで250年以上も上演され続けている理由を考え、具体的な場面を挙げて書こう。

.....
.....
.....
.....
.....
.....

思いを寄せていた僧・安珍に裏切られた少女・清姫が怒りのあまり蛇体に変身し、釣り鐘に逃げ込んだ安珍を釣り鐘と共に焼き殺した事件以来、道成寺には鐘はなく女人禁制となっていた。
数百年が経った桜の頃、新しい釣り鐘が奉納される運びとなり、その法要の日に花子という美しい白拍子が道成寺へやってきた。鐘の法要があると聞き拝ませてほしいという。所化（修行中の若い僧）たちは、舞を舞うことを条件として入山を許してしまう。舞いながら次第に鐘に近付いていく花子を見て、所化たちは花子が清姫の化身だということによりやく気付くが…

(島田 聡)

1. 題材の趣旨：

演奏者にとって、楽譜から作曲者の意図やメッセージを読み取ることは欠くことのできない重要な作業である。一方、鑑賞者にとって、楽譜はどのような意味があるのだろうか。耳を通して聴き取った音楽から作曲者について考え、想像することはこれまでの鑑賞学習でも行ってきたが、この「音楽Ⅱ」では、楽譜と聴こえてくる演奏との両面から、作曲者のメッセージ(主張、思い、意図など)を考え、批評へと結び付けたい。

これまで、楽譜に記された音楽用語や記号については「人間が時代や地域を超えて音楽を共有し、音楽文化の継承・発展を可能にさせるものであることへの理解」や、「音楽用語や記号から作曲者の表現意図についての思考と解釈」を学習のめあてとして扱ってきた。本題材では、現代音楽を教材として、その楽譜に示された音、記号、用語などから作曲者が表現したかったことについて想像し、考える。そして実際の鑑賞を通してそれを確認し、最後に作曲者自身の言葉によるメッセージを知る。その学習を通し、音楽を文化として継承していくための一方法として楽譜が存在していることを再認識し、加えて、楽譜でさえもそれを伝えきることのできない限界性と、その限界に演奏者や鑑賞者が入り込んで音楽を創造していくことについて理解する。そして、音楽以外において、伝える側と受け取る側が一つのシンボルを基に共有したり創造し合ったりしていく例についても考える。

この授業はおもに、美術館での鑑賞教育として取り上げられている「ギャラリー・トーク」の手法で進める。教師は、答えが一つとは限らないオープンな問いを投げかけ、生徒同士が対話することによって様々な発見を促していきたい。

2. 指導内容・ねらい：

【指導内容】 ・音楽を共有する方法

・音楽を共有するための音楽用語や記号

【ねらい】 ・音楽用語を適切に用いた批評

3. ESDとして獲得を期待する力(「ガイド」より)：

・抽象化されたシンボルから具体、背景を想像する力

4. 思考させるテーマ(「ガイド」より)：

・④「作曲者が楽譜に書いた記号や用語から、作曲者のメッセージを想像してみましょう。同じように、作者が記号やシンボルなどを用いて受け取り側に何かを伝えようとしている例を探し、述べ合ってみましょう。」

5. 教材：

・北條美香代 作曲 《Duo —in a strained time— for violin and violoncello》(CD: ALCD-70)

6. 題材目標：

- (1) 楽譜(そこに記された音楽用語や記号など)から作曲者のメッセージ(主張、思い、意図など)を意欲的に読み解き、鑑賞によって自分が感じ取ったことと結び付けながら楽譜の意味について興味・関心をもって考える。
- (2) 楽譜(そこに記された音楽用語や記号)から読み取ったことと、その部分を聴いて知覚・感受したことを比較し、それを踏まえて楽曲全体を批評する。
- (3) 楽譜を介して音楽が継承・発展していくことや、楽譜で伝えられることの限界を受け手が埋めていくことによって音楽が創造されていくことを理解し、それを踏まえて、生活において抽象化されたシンボルから具体を想像することの大切さを考える。

7. 評価計画：

評価の観点	評価規準	評価方法・対象
音楽への関心・意欲・態度	関① 楽譜に記された音楽用語や記号について、自分が知覚・感受したことを基にその意味を意欲的に考えている。 関② 作曲者のメッセージを考えながら意欲的に鑑賞曲を聴いている。	発言 観察・発言
鑑賞の能力	鑑① 知覚・感受したことを基にしながらか楽譜に示された音楽用語や記号の意味について考えている。 鑑② 作曲者の主張、思い、意図などを楽譜から読み取り、楽曲全体を批評できている。	発言・批評文 発言・批評文
ESD として獲得を期待する力 (方向目標として継続的にアセスメントしていく観点)	E① 楽譜のもつ意味を、音楽文化の創造という視点で理解している。 E② 生活において抽象化されたシンボルから具体を想像することの大切さについて考え、述べることができる。	発言・批評文 発言・批評文

8. 題材の指導計画：

時	学習活動の内容と教師の発問例	指導上の留意点	評価
1	1. 《Duo —in a strained time— for violin and violoncello》を鑑賞する。		
	1-1 「まず、2002 年に日本人の作曲家によって創られた曲を聴いてみます。全体を通してどのような雰囲気が感じられたか、演奏されている楽器は何か、の2点に注目して聴いてください。聴き終わった後、この2つについて述べてもらいます。」	<ul style="list-style-type: none"> ・曲目は伏せて全曲聴かせる。 ・鑑賞後、この2点について述べさせる。「雰囲気」については、雰囲気とそれを感じた根拠とに分けて板書する。 	
	2. 未知の記号や用語について、音楽を聴きながらその意味を推測し、作曲者のメッセージ（主張、思い、意図など）を考える。		
	2-1 「この曲は、北條美香代さんという作曲家によって創られた《Duo —in a strained time— for violin and violoncello》という曲です。題名の意味はわかりますね。演奏はチェロとヴァイオリンでしたね。」	<ul style="list-style-type: none"> ・曲名を理解させる。 	
	2-2 「次に、この曲の楽譜を見てみましょう。北條さんの手書きの譜面です。まずこれを見て、何か感じたことはありますか。そしてこの譜面の中で、これまで皆さんが見たことがない記号や用語があったら述べてください。」	<ul style="list-style-type: none"> ・発言は板書する。 <p><感じたこととして予想される発言></p> <ul style="list-style-type: none"> ・小節線があるところとないところがある。 ・拍子もあるところとないところがある。 ・以前、バッハの手書きの楽譜を見たことがあり、作曲家つてもっと雑に書くかと思っていたけど、意外ときれいに書かれている。 <p style="text-align: right;">等</p> <p><発見が予想される記号や用語></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ <i>sfz</i>, <i>sffz</i>, <i>sfffz</i>, <i>ppp</i>, <i>fff</i>, ハ音記号, 2.5/4, <i>Tempo rubato</i>, <i>appassionato</i>, <i>espressivo</i>, <i>dolce</i>, <i>rapidly</i>, <i>meno mosso</i>, <i>allarg.</i>, <i>con fuoco</i>, <i>dolente</i>, <i>morendo</i>, 等 	
	2-3 「これらの意味は、音楽辞典を調べればわかることですが、それが記されている部分を聴いて、どんな意味かを考えてみましょう。まず、楽譜の1ページ目を見てください。そこにある、 <i>appassionato</i> と <i>espressivo</i> は音楽の表情を表す用語ですが、どのような意味だと思いますか。1ページの部分を聴いてみますので、その演奏から感じたことを基に述べ合ってみましょう。」	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスの実態に応じて、他の部分を取り上げて、そこに書かれている他の記号や用語を扱ってもよい。 ・鑑賞と関連付けて進めること。 ・<i>appassionato</i>と<i>espressivo</i>に分けて、発言された意見を板書する。 ・述べ合った後、<i>appassionato</i>と<i>espressivo</i>の辞典的意義(「熱情的に」「表情豊かに」)を 	関① 鑑①

<p>2-4 「では、作曲した北條さんは、そこにどのような思いを込めて <i>appassionato</i>、<i>espressivo</i> と記したか考えてみましょう。『熱情的に』『表情豊かに』といっても、いろいろな表現や、表現の幅があると思いますが、作曲者は演奏者にどのような熱情や豊かな表情を求め、何を伝えなかったのか、もう一度その部分を聴きながら想像してみてください。その後で意見を述べ合ってみましょう。」</p>	<p>伝える。</p> <ul style="list-style-type: none"> •対話によって進める。適宜、途中で何度か鑑賞させ、意見を確認していく。 •正解を求めて考えるのではなく、対話を通していろいろな考え方や感じ方があることを知り、それが対話の目的であることを伝える。 <p><予想される対話></p> <ul style="list-style-type: none"> •「<i>ff</i>→<i>p</i>→<i>f</i>→<i>mp</i>→<i>f</i>→<i>mp</i>→<i>ffp</i>→<i>fff</i>と強弱の大きな幅をつけながらも次第に <i>fff</i>までもっていくので熱情的な感じを求めたかったんだと思う。」 •「その逆で、曲の出だしたから熱情的な演奏を求めたくて、強弱の大きな幅と盛り上がり求めたんだと思う。 •「フェルマータで最初の主張が終っていると思う。何かこれから起こりそうな最初の主張だから熱情的なチェロの響きを求めたんだと思う。」 •「フェルマータの空白を挟んで、<i>appassionato</i> と全然違う穏やかさを表したかったんだと思う。」 •「<i>espressivo</i> のところは聴いていてすごく悲しくて切ない感じがしたので、そんな気持ちをもって演奏して、って言っているような気がする。」 •「<i>espressivo</i> で弾くのは、その下の段の <i>ppp</i> のところまでだよ。そこからまた違う雰囲気演奏しているから。」 •「そうかなあ。その後も音は強いけれど表情豊かに弾いた方がいいように思うけど…。」 	<p>関② 鑑①</p>
<p>2-5 「では、もう1箇所について考えてみましょう。5ページから6ページにかけて、ヴァイオリンとチェロの間に点線が記されていますね。それぞれのパートが楽譜通りに演奏していけばよいのですが、この点線は何を意味しているのでしょうか。これも作曲家からのメッセージの一つかもしれません。その部分をかけますので、聴き終わった後、意見を述べ合ってください。」</p>	<p>•クラスの実態に応じて、他の部分を扱ってもよい。</p> <ul style="list-style-type: none"> •対話によって進める。適宜、途中で何度か鑑賞させ、意見を確認していく。 •正解を求めて考えるのではなく、対話を通していろいろな考え方や感じ方があることを知り、それが対話の目的であることを伝える。 •対話の内容に応じ、以下のプログラムノートを紹介して、曲名との関連を考える対話に進めてもよい。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>独奏ヴァイオリンと独奏チェロの対峙によって紡ぎだされる凝縮された時間を描き出すことを想像した。ヴァイオリンとチェロ、張りつめた空気の中でせめぎ合い、互いを削り取り、頂点へと向かい、その結果としてひとつの「うた」へ到達するのである。</p> <p>(北條美香代(CD: ALCD-70, p.12 より))</p> </div>	<p>関② 鑑①</p>

		<p><予想される対話></p> <ul style="list-style-type: none"> ・「音が鳴る順番を示しているように思う。」 ・「でもそれだったら、点線がなくても楽譜どおり弾いていけば大丈夫なはずだよ。」 ・「自分のパート譜だけを見ないで相手の譜も見るように促しているのでは。」 ・「ここにある五連符や六連符は、本当は一人で演奏させたかったんじゃないかな。」 ・「自分が弾いた1つの音から相手の弾く次の音へ繋げるように指示しているのでは…。」 	
2	3. 作曲者からのメッセージから楽譜の意味を考える。		
	<p>3-1 「さて、この曲の作曲者、北條美香代さんからメッセージ(資料1)が届いています。読んでみましょう。」</p> <p>3-2 「このメッセージから、何かわかったことはありますか。」</p> <p>3-3 「今回は、作曲者から文章でメッセージが送られてきたわけですが、このようなことはあまりないことですね。なぜなら、楽譜そのものが作曲者から演奏者や鑑賞者へのメッセージだからです。でも、北條さんのメッセージにも書かれているように、楽譜で伝えられるメッセージは限られている、ということがわかりましたね。つまり、書かれている楽譜を深く読み込んでそこから作曲者の主張や思い、意図などを想像し、そこに、演奏者は自分の主張や思いなどを加え、また鑑賞者は作曲者と演奏者の主張や思い、意図などを想像して批評し、そのようにして音楽が創られていくのだと思います。」</p> <p>3-4 「そう考えると、楽譜は表現を伝えるためのシンボル(抽象化した記号)とも言えますが、音楽以外でも何かそれに似たものはあるでしょうか。述べ合ってみましょう。」</p> <p>3-5 「いろいろな意見が出ました。最近では、地図は見なくてもインターネットで世界各地の地形や街並み、風景等がわかりますし、直筆での手紙も少なくなりました。逆に、絵文字やメールでのスタンプのように、言葉で表すには苦労するような微妙な感情などをシンボルに置き換えて伝える方法も多くの人々が利用するようになってきました。これからの社会を生きていく上で、シンボルから具体を想像することのできる力は</p>	<p>・2-4、2-5 で話したことと関連付けてまとめていく。</p> <p>・クラスの実態に応じて、3-3 について考えさせてもよい。</p> <p>・日本伝統音楽の口伝のような伝統の受け継がれ方も例として挙げる。</p> <p>・以下のような発言が予想されるが、楽譜のように文化の継承に近いものと、それとは比較的距離があるものに分かれることも気付かせる。</p> <p><予想される例></p> <ul style="list-style-type: none"> ・脚本家が書いた演劇やドラマの台本 ・地図(地形や風景を記号化したものであり、地図を見てその風景を想像できる) ・天気図(気圧配置などを読みって、現在の天気を知ったり今後を予想したりできる) ・直筆の手紙(「字は体を表す」と言われるように、字から書いた人の人柄などが推測できる) 等 <p>・生活の中で、抽象化されたものから具体を想像したり、そのものに対するイメージをもったりすることの大切さを考える。</p> <p>・特に、文化を受け継いでいく際にその能力が必要であることも導く。</p>	<p>E①</p> <p>E②</p> <p>E②</p>

なぜ必要なのか考え、述べ合ってみましょう。」		
4. 作曲者へ批評文を書く。		
<p>4-1 「それでは最後に、もう一度じっくり《Duo – in a strained time – for violin and violoncello》を鑑賞しましょう。そして、今度は鑑賞者である皆さんから北條さんへメッセージを書いて、それを送ろうと思います。次の条件を満たしてWS1に書いてみましょう。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 楽曲全体を聴いて感じたことやイメージしたことを理由とともに書く。 2. 楽譜から読み取ったことを含めて書く。 3. 1.と 2.を根拠にして、「この曲が自分に与えた影響」を書く。 4. 楽譜や演奏から、北條さんに聞きたいことがあればそれも書く。 	<p>・単なる感想文ではなく、本学習で学んだことを踏まえた批評文になるように、条件を満たして書くように指示する。</p> <p>・3.の「この曲が自分に与えた影響」は、価値判断の結果となる。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>送り先: 〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学 音楽教育講座 北條美香代研究室 mkyhojo@nara-edu.ac.jp</p> </div>	鑑②

9. 資料:

◆ 北條美香代 作曲 《Duo —in a strained time— for violin and violoncello》の楽譜 (全曲)

(作曲家より掲載許可済み。複写も可。)

Duo ~ in a strained time ~
for violin and violoncello

北條美香代

Tempo rubato (♩ = ca. 63)
appassionato

Violoncello

ff p f mp f mp sffz

espressivo.

fff mf mp p

pp mp + dim. ppp mp f

mf f ff

f mf dim. p

dolce
pp *p* *pp*
 3
 6
 5

mp *p* *mf* *dim.*

ppp *p* *mp* *mf* *p* *ppp* *poco a poco cresc.*
meno mosso poco
 4:3

a poco accel.
(cresc.) *f*

rapidly
mf *cresc.*
 6
 7

3/4 (♩ = 54 ca) 2/4 3/4

8va
ff
f
mp

2/4 4/4

mp
f
ff

2/4 3/4

dim.
f
mp
sfz
mf

Handwritten musical score for the first system, consisting of two staves. The music features complex rhythmic patterns with sixteenth and thirty-second notes. Dynamic markings include *mf*, *f*, and *sfz*. Fingering numbers 5, 6, and 7 are indicated for various notes. The key signature has one flat.

Handwritten musical score for the second system, consisting of two staves. It includes time signature changes to $\frac{2.5}{4}$ and $\frac{3}{4}$. The music continues with complex rhythmic patterns and dynamic markings such as *sfz*, *f*, and *ff*. Fingering numbers 5, 6, and 7 are present. The key signature has one flat.

Handwritten musical score for the third system, consisting of two staves. It includes time signature changes to $\frac{3.5}{4}$ and $\frac{3}{4}$. The music features complex rhythmic patterns and dynamic markings including *sfz*, *mf cresc.*, and *ff*. Fingering numbers 5, 6, and 7 are indicated. The key signature has one flat.

© 19316

Handwritten musical score for the first system, consisting of two staves. The music features complex rhythmic patterns with many sixteenth and thirty-second notes. Dynamic markings include *mp cresc.*, *f*, *mp cresc.*, and *ff*. There are also *sfz* (sforzando) markings above various notes. Fingering numbers 5 and 6 are indicated above several notes. The system concludes with a *ff* dynamic marking.

Handwritten musical score for the second system, consisting of two staves. It features triplet markings (3 and 7) and a change in tempo to *allarg.* (allargando). Dynamic markings include *p*, *f*, *ppp*, and *fff*. *sfz* markings are present above notes in the first part of the system. The system ends with a *fff* dynamic marking.

Handwritten musical score for the third system, consisting of two staves. It shows tempo changes to *3/4* (with *accet.* - accelerando) and *2/4* (with *rit.* - ritardando). A tempo marking of $\text{♩} = 63 \text{ ca.}$ is provided. Performance instructions include *sul D* and *sul G*. Dynamic markings include *mp*, *ff*, and *dim.* (diminuendo). Fingering numbers 6 and 5 are indicated. The system concludes with a *ff* dynamic marking.

© 1931

accel.

allarg.

$\frac{4}{4}$ Lento ($\text{♩} = 50 \text{ ca}$)
espressivo, dolente

sul D

sul G

dim. PP

espressivo, dolente

dim. PP

mp

p

7

Handwritten musical score for the first system, consisting of two staves. The top staff begins with a treble clef and a key signature of one flat (B-flat). It contains a sequence of notes with dynamic markings *mp*, *p*, *mp*, and *p*. A five-fingered scale-like passage is marked with a '5' above it. The bottom staff starts with a bass clef and a key signature of one sharp (F#). It features notes with dynamic markings *mp* and *p*. The system concludes with a 2/4 time signature.

Handwritten musical score for the second system, consisting of two staves. The top staff has a treble clef and a key signature of one flat. It features notes with dynamic markings *mf*, *mp*, *mf*, and *mp*. Above the staff, time signatures 2/4, 4/4, 3/4, 5/8, and 3/4 are indicated. A five-fingered scale passage is marked with a '5' above it. The bottom staff has a bass clef and a key signature of one sharp. It contains notes with dynamic markings *mf*, *mp*, and *mf*. A five-fingered scale passage is marked with a '5' above it. The system concludes with a 3/4 time signature.

Handwritten musical score for the third system, consisting of two staves. The top staff has a treble clef and a key signature of one flat. It contains notes with dynamic markings *p*, *pp*, *mp*, *mf*, and *p*. Above the staff, time signatures 3/8, 3/4, 3/8, and 3/4 are indicated. A five-fingered scale passage is marked with a '5' above it. The bottom staff has a bass clef and a key signature of one flat. It features notes with dynamic markings *p*, *pp*, *mp*, *mf*, and *p*. A five-fingered scale passage is marked with a '5' above it. The system concludes with a 3/4 time signature.

© 18310

3/4 4/4

p *mp* *cresc.* *mf* *cresc.*

f *ff* *ff*

dim. *p* *cresc.*

dim. *p* *cresc.*

9

Handwritten musical score system 1. It consists of two staves. The upper staff is in treble clef and contains several chords, some with accidentals (flats and naturals). A dynamic marking of *ff* is present, followed by a *dim.* marking. The lower staff is in bass clef and contains a melodic line with a fingering of 5 and a *ff* dynamic marking, followed by a *dim.* marking.

Handwritten musical score system 2, labeled "(8va.)" at the beginning. It consists of two staves. The upper staff is in treble clef and contains chords with dynamics *mf*, *dim.*, *mp dim.*, *p*, and *dim.*. The lower staff is in bass clef and contains a melodic line with dynamics *mf*, *dim.*, *mp dim.*, *p*, and *dim.*.

Handwritten musical score system 3, labeled "rit." and "(8va.)" at the beginning. It consists of two staves. The upper staff is in treble clef and contains a *pp* dynamic marking with the instruction "morendo", followed by a *ppp* dynamic marking. The lower staff is in bass clef and contains a *pp* dynamic marking, followed by a *ppp* dynamic marking.

10

◆資料1：作曲家からのメッセージ

自作品《Duo in a strained time —for violin and violoncello—》の楽譜表記について

この作品を創ろうと思ったきっかけは、冒頭のチェロソロ部分でした。この部分が契機となり、もう一つの楽器であるヴァイオリンを導きだし、二つの楽器が織りなす対決と調和の世界を曲として結実させたいという思いからでした。そのため、冒頭和音のチェロの音色、表現はとても重要です。頭の中には、私にとっての理想のチェロの音色が聴こえ、また孤高のチェロ奏者がピンと張りつめた空気の中で厳しい表情で演奏するような映像も浮かぶのですが、それを余すこと無く言葉で伝えたり、楽譜に表したりするのは実は至難の業です。楽譜には限界がありますし、たくさん書きすぎるとかえって表現の幅を狭めてしまうことにもなりかねないからです。結局、冒頭部分の弾き方は、「*appassionato* 熱情的に」という楽語で伝えることにしました。単に「*appassionato*」といっても、演奏家によっても様々な「*appassionato*」が存在するでしょう。それは敢えて奏者に委ねています。

一例を挙げると、弦楽器には、ビブラートという、音の高さを保ちながらも音を揺らす、という奏法がありますが、それによって微妙な感情の揺れが表現できる場合があります。このビブラートの掛け方も、冒頭の一つの和音だけでも何通りもあります。実は、「この和音を弾いてから何秒後にビブラートを掛けてください」という楽譜の表記の仕方が出来ない訳ではありません。しかし、敢えてそうはしないのです。奏者は楽譜を見て、自分の気持ち、人生をも、その音に投影し表現します。その時々一瞬の気持ちを音に込めています。音楽は時間の芸術ですから、作曲家としてもそれを尊重したいと考えているのです。同様のことが、「*espressivo* 表情豊かに」の楽語を記した部分にも言えるのです。

逆に、かなり主張、意図を明確に指示した部分もあります。5ページ、6ページのヴァイオリンとチェロの点線については、大変重要な指示です。ここは、この点線で繋がれた音と音が一つの旋律として聴こえてこなければ意味がないのです。二つの楽器が対決しながらも、だんだんと調和していく重要な部分です。この音が繋がれず、別々の音楽を奏でているように聴こえてしまえば、作品の全体の意図が損なわれることとなります。徐々に繋がって行って、それが最後の「うた」に到達するわけですから、ここは譲れない部分です。最後の「うた」部分の布石になっています。

このように、作曲家は、ある程度奏者を尊重してその表現を委ねる部分と、譲れない部分を分けて、楽譜に記しているのです。

北條 美香代

◆ワークシート1

《Duo —in a strained time— for violin and violoncello》の作曲者、北條美香代さんへメッセージを書きましょう。
次の条件を踏まえて書いてください。

1. 楽曲全体を聴いて感じたことやイメージしたことを理由とともに書く。
2. 楽譜から読み取ったことを含めて書く。
3. 1. と 2. を根拠にして、「この曲が自分に与えた影響」を書く。
4. 楽譜や演奏から、北條さんに聞きたいことがあればそれも書く。

----- きりとりせん -----

北條美香代さんへのメッセージ

() 高等学校 () 年 氏名 ()

(宮下 俊也)

事例についての問い合わせ先

島田 聡 satoshi_tp@hotmail.com

水口 俊彦 tmizuguchi58@gmail.com

宮下 俊也 miyashit@nara-edu.ac.jp

宮本 由紀乃 miyamotoy@edu-c.pref.aomori.jp

山内 尚 insegnante.di.musica@gmail.com

第4章

ESD としての音楽鑑賞教育についてまとめた学術論文

この章では次の論文を提示します。

1. 論文1

ESD（持続発展教育）としての音楽科教育

－中学校鑑賞領域の場合－

2. 論文2

ESD としての音楽鑑賞教育

－指導内容と対応させた授業プランの開発と実践－

ESD（持続発展教育）としての音楽科教育

—中学校鑑賞領域の場合—

宮下俊也 奈良教育大学大学院（教職開発講座）
大熊信彦 文部科学省・国立教育政策研究所

（平成25年5月7日受理）

School Music Education as Education for Sustainable Development
(ESD) :
Possibility in the Area of Junior High School Music Appreciation

Toshiya MIYASHITA

(School of Professional Development in Education, Nara University of Education)

Nobuhiko OHKUMA

(Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology / Institute for Educational Policy Research)

(Received May 7, 2013)

Abstract

Education for sustainable development (ESD) is an extremely important educational measure for developing the human resources of today and tomorrow. Naturally, school music education as a form of art education needs to be promoted as ESD, and is more than capable of achieving sustainable development. At present, however, there are only a few cases where school music education is being practiced as ESD, and the very idea of “school music education as ESD” is beyond the awareness of researchers or teachers.

The aims of this paper are twofold: (1) to recognize “competencies and attitudes required for ESD” as the goals accomplished through instruction in the area of junior high school music appreciation and clearly specify those goals as well as the stages to reach them, and (2) to suggest example themes that learners will be encouraged to think about, by taking note of “cogitation” as a means for students to acquire the specified “competencies and attitudes required for ESD”.

Some of the “competencies and attitudes required for ESD” derived from the study include a “competency in perceiving abstractions such as music and artworks through both objective perception and sensitivity,” “competency in communicating one’s own imaginings and emotions to others and in responding to those of others for mutually harmonious communication,” and “competency in making apt criticisms for the creation and sustainable development of a diverse range of cultures, including art.” In addition, themes that learners are encouraged to think about were conceived, such as “Let’s determine the elements of music that can empower those in distress by recalling our own experiences while listening and then discussing our thoughts with other students.”

キーワード：ESD（持続発展教育）、音楽科教育、音楽鑑賞、ソウル・アジェンダ

Key Words: ESD(Education for Sustainable Development), School Music Education, Music Appreciation, Seoul Agenda

1. はじめに

1.1. 問題

教育において音楽は感動の対象であり、思考の対象である。大震災に見舞われ、資源が乏しい我が国において「人材こそが資源」であることがあらためて強く認識される中で、学校における音楽教育（音楽科教育）は、感動と思考を伴ってどのような人材を育成しなければならないのだろうか。また、音楽科教育で身に付けた学力は、これからの社会づくりに対してどのような貢献を果たすものなのだろうか。

今日と未来に生きる人材育成として、「現代的、社会的な課題に対して地球的な視野で考え、自らの問題として捉え、身近なところから取り組み、持続可能な社会づくりの担い手」⁽¹⁾を育成するESD（持続発展教育）は、我が国や世界の教育において必要不可欠であることに疑いをもたない。芸術教育としての音楽科も当然、ESDとして推進していく必要があり、またその可能性を十分にもっている。それは、文部科学省がESDで育みたい力として掲げた「体系的な思考力」「持続可能な発展に関する価値観」「代替案の思考力」「情報収集・分析能力」「コミュニケーション能力」⁽²⁾は、環境教育やエネルギー教育等とは異なる、音楽科教育がもつ特質からもアプローチできると考えるからである。しかしながら、現在のところESDとしての音楽科の実践はごくわずかであり、研究者においても実践者においても「ESDとしての音楽科教育」という意識そのものがもたれていない⁽³⁾。その原因として次の3点が予測される。

第1は、あえてESDを意識しなくても、音楽科が果たす役割にはESDの理念や目的と重なるところがあると捉えられる点。例えば「音楽を愛好する心情」を育てれば生活が明るく豊かなものになる、「音楽文化についての理解」を深めれば音楽の多様性や異文化を理解し尊重する態度が養われる、我が国の伝統音楽を学習すれば伝統文化の尊重と継承の意義が理解できる、といった自明視である。第2は、音楽科で育成した学力が持続可能な社会づくりのための行動力となって実現されるのは、音楽科教育を終えた後に予定調和として結実されていくものとして捉えられる点。第3は、それらゆえ、音楽科の指導内容をESDと関連付けて教えるという発想が生まれにくい点。例えば「音楽を愛好する」ということが人生においてどういう意味をもつのか、多様な音楽文化や伝統音楽を学ぶことで具体的に持続可能な社会づくりにどう貢献できるのか等を、考え、理解させ、行動化を図る学習が授業において展開されていない。

これらは、音楽科で指導する内容一つ一つの本質的な意味にも関わる。すなわち、なぜ歌うのか、なぜ聴くのか、なぜ「共通事項」を教えるのか、といった意味であ

る。そしてその一つ一つの意味は、少なからず持続可能な社会づくりのために行動できる力の育成に繋がっているはずだ。しかし、その繋がりを明確にして指導しない限り、そして予定調和に期待している限り、ESDとしての音楽科教育は果たせない。

ESDとして音楽科が担えることは、我が国においては「教育振興基本計画（平成25年6月14日閣議決定）」（2013）の基本施策2-6の「伝統・文化等に関する教育の推進」⁽⁴⁾や、ESD-J（2006）がESDを通じて育みたい力として示した「自分で感じ、考える力」「問題の本質を見抜く力／批判的思考力」「気持ちや考えを表現する力」「多様な価値観をみとめ、尊重する力」⁽⁵⁾の育成、また国立教育政策研究所による「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度（例）」の7項目のうちのいくつかが該当する⁽⁶⁾。

一方、世界においてはユネスコが2010年に示した「ソウル・アジェンダ」（Seoul Agenda: Goals for the Development of Arts Education）⁽⁷⁾に掲げられている項目、特にGoal3の3a「芸術教育によって、社会が潜在的にもっている創造性や革新性を高める」、3b「芸術教育にある社会や文化の健全化を果たす特質を認識し、発展させる」、3c「社会的責任、社会的結束、文化的多様性、異文化間対話を促進する上での芸術教育の役割を高め、それらを支援する」、3d「芸術教育を通して、平和から持続可能性に至る主要な世界的課題に対応する能力を育成する」等と、それらの下位にある諸項目が該当する（資料1⁽⁸⁾参照）。

音楽科におけるESDは、新たな指導内容を設定しなくても、現行学習指導要領が示す指導内容が持続可能な社会づくりに貢献できる力の育成に繋がっていることと、その力の具体を明確化し、それを育成する指導方法を立案すれば実現をもたらすことができると考える。とりわけ鑑賞領域において新たに求められることとなった批評の能力や、音楽文化の多様性の理解は、ESDとして扱うべき事項として強調されなければならないものと言える。

以上より、本論考はインフュージョン・アプローチ⁽⁹⁾として、中学校音楽科鑑賞領域に限定してこれらを検討し、結果を指導者に提供するものとした。それによって予定調和ではなく、授業においてESDが果たされていくことを期待する。

1.2. 目的

上記の問題をもとに、本論考の目的を以下の2点に定める。

- ① 中学校音楽科鑑賞領域の指導内容によって持続可能な社会づくりに貢献できる力を「ESDとして獲得が期待できる力」と位置付け、その具体と獲得に

至るまでの段階を指導内容ごとに明示する。

- ② 明示した「ESDとして獲得が期待できる力」を獲得させる方法として「思考」に注目し、学習者に思考させるテーマの例を提案する。

1.3. 方法

上記2点の目的に対し、それぞれ以下の方法をとってアプローチする。()内は遂行者。

- ①-1 中学校学習指導要領音楽、及びその解説で示されている記述をもとに、鑑賞領域における具体レベルの指導内容を明示する。(宮下)
- ①-2 それらの指導内容によって求める学力を踏まえ、同時にESDの視点で指導内容を検討し、その学力を身に付けることによって期待できる持続可能な社会づくりに貢献できる力、すなわち「ESDとして獲得が期待できる力」の具体を導く。(宮下)
- ①-3 各指導内容と、「ESDとして獲得が期待できる力」の関係が妥当しているかどうか、獲得までの段階を示して検証する。段階は、その指導内容が求める学力の基盤となるレベルを「Basic Level」、音楽科として求める到達レベルを「Middle Level」、そして「ESDとして獲得が期待できる力」のレベルを「Advanced Level」とする。この段階の繋がりが整合しているかどうかを検証のポイントになる。なお、この段階とAdvanced Levelの項目は、まず宮下が原案を作成し、それを大熊が行政の立場から妥当性と中学校段階に即して適切かどうかを確認する。検討においてはESDに関する先行資料、ソウル・アジェンダを参考にする。(宮下・大熊)
- ②-1 明示したAdvanced Levelを実現させるため方法として「思考」を取り上げ、授業で思考させる具体的テーマの例を宮下と大熊による協議によって決定する。協議では、中学校段階としての適切性や実践可能性を重視する。また思考については、ドイツベルリン州の音楽カリキュラムを参考にする。(宮下・大熊)

2. 中学校音楽科鑑賞領域の指導内容と「ESDとして獲得が期待できる力」の関係

2.1. 鑑賞領域における指導内容の具体

中学校音楽科学習指導要領における鑑賞領域の指導事項は、第1学年、第2学年及び第3学年に共通する3項目があり⁽¹⁰⁾、加えて鑑賞学習の基盤となる〔共通事項〕の2項目が示されている⁽¹¹⁾。これらは次の8つの観点に基づくものである。①音楽の素材としての音、②音楽の構造、③音楽によって喚起されるイメージや感情、④音楽の鑑賞における批評、⑤音楽の背景となる風土や文

化・歴史など、⑥音楽の構造の原理、⑦音楽的な感受、⑧音楽を共有する方法⁽¹²⁾。

さらに、これらの観点に基づく具体的な指導内容として次のものが抽出できる⁽¹³⁾。

- ・音そのものの質感
- ・我が国や諸外国の音楽における様々な声
- ・音楽を成立させる言葉の特性
- ・楽器の音
- ・自然音・環境音
- ・音楽を形づくる要素、要素同士の関わり方とそれらの働きがもたらす質
- ・要素と音楽全体の構成
- ・要素や構造がもたらす曲想
- ・鑑賞によって得られる自己のイメージや感情
- ・イメージや感情の言語化
- ・自分にとっての音楽の価値判断
- ・人間と音楽との関わり
- ・他芸術と関わった総合芸術における音楽
- ・様々な音楽がもつ固有性と共通する普遍性
- ・音楽を共有するための音楽用語や記号

2.2. 「ESDとして獲得が期待できる力」とそこに至る段階

上記の各具体的指導内容に対して基盤的な学力となるBasic Level、中学校音楽科鑑賞領域の到達レベルとして求めるMiddle Level、そしてその先に求めるべき「ESDとして獲得が期待できる力」となるAdvanced Levelを、指導内容ごとに段階的に示しまとめたものが表1である。

2.2.1. Advanced Levelの要点

表1に示したAdvanced Levelの要点は、対応する指導内容についてBasic Level→Middle Levelの順を踏み、関連させながら育成しなければならないことである。それを怠ると音楽から得る感動、音楽の認識、音楽的感受といった音楽科の本質に関わる音楽経験と切り離された知識として求めてしまうことになる⁽¹⁴⁾。鑑賞領域の指導事項に「音楽のよさや美しさを味わうこと」が求められているように、認識や感受を通して音楽のよさや美しさに感動し、その経験を通してAdvanced Levelを獲得させていかなければならない。それが「道徳」や「総合的な学習の時間」とは異なる、教科としての音楽科でなくてはできないESDになる。

2.2.2. 国立教育政策研究所による提示例との関係

Advanced Levelに示した多くの項目は、結果的に国立教育政策研究所が提示した「『持続可能な社会づくり』の構成概念(例)」⁽¹⁵⁾(以下、構成概念)に相当するもの

となった。特に「人を取り巻く環境（自然・文化・社会・経済など）に関する概念」の「環境」を「文化・社会」として焦点化させた場合、ESDとして音楽科が果たせる人材育成がより鮮明になる。

例えば、「(音楽)文化の多様性を理解し、尊重する態度」(表1③④⑤⑪)は、構成概念の「I多様性」に該当し、多種多様な楽曲や音楽文化が築き上げられてきた(いる)ことを知り、それを尊重することによって(音楽)文化を持続発展させるという趣旨をもつ。

また、「自己のイメージや感情を他者に伝え、他者のそれを受け止めて互いに協調的なコミュニケーションを図れる力」(同⑫)や「音楽を『ピースメイキング』として捉え、音楽が自分の生活や社会の健全化に貢献できることを理解し、そのために行動できる力」(同⑬)は、構成概念の「人(集団・地域・社会・国など)の意思や行動に関する概念」の「V連携性」や「VI責任性」に該当する。音楽鑑賞での学びや感動の経験が原動力となり、平和の創造や災害復興等のために行動できることを期待するものである。

3. 鑑賞授業においてESDを実現させるための思考とテーマ

各指導内容によって「ESDとして獲得が期待できる力」、すなわちAdvanced Levelを実現させるためには様々な方法が考えられるが、とりわけ学習者に思考させることはそのための重要なものであると考える。例えば、過去に築かれた音楽文化や伝統を尊重しその持続発展に貢献しようとすることの重要性を教師が規範として論じても、知識として理解はするけれどもそれを行動に移せる力となるまでには至らないと考えるからだ⁽¹⁶⁾。

このことは、日本学校音楽教育実践学会の課題研究(2009)で報告されたドイツベルリン州の音楽科カリキュラム、「Rahmenlehrplan für die Sekundarstufe I」(「教授大綱」)中等段階(第7～10学年)(2006)における領域「音楽について思考すること」(Nachdenken über Musik)と、それに基づくベルリン州での実践⁽¹⁷⁾から示唆が得られた。

同カリキュラムの領域「音楽について思考すること」では、そのアプローチとして、①時代の変遷における音楽(歴史的テーマとして音楽を思考する)、②社会的文脈における音楽(社会的テーマとして音楽を思考する)、③様々な文化の音楽(民俗学的テーマとして思考する)、④他のメディアとの結びつきにおける音楽(マルチメディアからのアプローチによって思考する)、⑤形成された秩序としての音楽(作曲理論的に音楽について思考する)、⑥音楽の原理(知覚心理学的・自然科学的なテーマとして音楽を思考する)のように、テーマと思考させ

る内容が示されている⁽¹⁸⁾。また、同カリキュラムのシーケンスとして、年齢が高まるにつれて思考の比重が増していることも、我が国の中学校音楽科教育の今後を考える上で参考になる⁽¹⁹⁾。

ベルリン州のカリキュラムに基づく実践では、「西洋音楽史に何故こんなに違う時代があるのか」「どこから様々な様式が生まれたのか」「社会で自分が属している層によって聴く音楽のジャンルが異なるのはなぜか」「(人によって音楽の)好みが異なるのはどうしてか」等、人間と音楽、社会と音楽、自分と音楽、といった関わりについて思考させている⁽²⁰⁾。またこれらは、学習者同士のコミュニケーションをとり、話し合いなどの交流によって多様性と寛容性も身に付けさせようとしている⁽²¹⁾。

このようなテーマについて思考させ、思考の結果得られるものはESDで期待する能力・態度に一致する。よって、表1に示したAdvanced Levelの獲得には、思考、そして思考したことを基にした討論やプレゼンテーション等による学習者同士の交流が効果的な方法であると考えられる。

この考えに基づき、表1のAdvanced Levelを求めるための思考のテーマを検討し、表1に追記する。

4. まとめと今後の課題

4.1. 得られた成果

本検討により得られたことの第1は、音楽科も芸術教育の立場から持続可能な社会づくりに寄与する人材育成を十分に果たすことができる、という確証である。それは現行学習指導要領に示されている指導内容から「ESDとして獲得が期待できる力」を導出できたことによる。

第2は、ESDの視点をもった音楽科授業の立案と実践に寄与できる表1が構成できた点である。最近「ESDの視点をもった〇〇教育」と銘打った実践報告が多くあるが、どこにそれが現れているのか、ESDではない教育とどこが異なるのか、ESDが「なんでもアリ」になってはいないか、という批判的指摘も多くある⁽²²⁾。表1は指導内容と「ESDとして獲得が期待できる力」との繋がり、及びそこに至る段階がともに示されていることから、指導者にとって、音楽科の指導内容が含んでいるESDとして求める具体的内容と、ESDとして扱う場合の指導の道筋がともに明確になるものとする。

第3は、ESDの方法として学習者への思考を求めた点である。表1に例示したテーマは単一の解答があるものではなく、個人の思考と学習集団において他者とコミュニケーションを取りながら共に議論することを求めるものとした。このテーマに取り組むこと自体も、人と関わり繋がることや、異なる意見を受け入れること、建設的な意見を主張し合うといった、ESDそのものであると言える。

表1 中学校音楽科鑑賞領域の指導内容によりESDとして獲得が期待できる力・獲得までの段階・獲得のために思考させるテーマ

指導内容	Basic Level	Middle Level	Advanced Level
	音楽の素材としての音	<ul style="list-style-type: none"> 音楽における音そのものの質感の感受 	<ul style="list-style-type: none"> 音は音楽の素材であることの理解 長さ、高さ、強さ、音色など音のもつ性質の理解
我が国や語外国の音楽における様々な声	<ul style="list-style-type: none"> 様々な声の知覚・感受 	<ul style="list-style-type: none"> 曲種に応じて、固有の声質、声域、発声法、発声法、歌唱法があることへの理解 声の多様性の理解 声の音色を手がかりにした作曲者・演奏者の表現意図についての思考と理解 	<p>【ESDとして獲得が期待できる力】</p> <ul style="list-style-type: none"> ③(音楽)文化の多様性を理解し、尊重する態度 <p>【授業で思考させるテーマ例】</p> <ul style="list-style-type: none"> 「同じ食べ物の匂いでも、国や地域によって好みが全く異なることがあります。『声』についての美意識もそのようなものでしょうか。そうだとしたら、なぜ異なるのか考えてみましょう。」
音楽を成立させている言葉の特性	<ul style="list-style-type: none"> 音楽で用いられている言語の抑揚、アクセント、リズム、音質、語感などの知覚・感受 	<ul style="list-style-type: none"> 言葉の特性がもたらす音楽の特質の理解 言葉の特性からみえる音楽文化の多様性の理解 	<p>【ESDとして獲得が期待できる力】</p> <ul style="list-style-type: none"> ④(音楽)文化の多様性を理解し、尊重する態度 <p>【授業で思考させるテーマ例】</p> <ul style="list-style-type: none"> 「韓国語、中国語、ポルトガル語、スペイン語、フィリピン語、インドネシア語、タイ語、ベトナム語の音声を、音色や抑揚、リズム感に注目して聴き比べてみましょう。そしてそれぞれの違いを述べ合ってみよう。」⁽²⁾
楽器の音	<ul style="list-style-type: none"> 様々な楽器の音の知覚・感受 	<ul style="list-style-type: none"> 楽器の材質、形状、発音原理、奏法による様々な音があることへの理解 楽器の多様性の理解 楽器の音色を手がかりにした作曲者・演奏者の表現意図についての思考と理解 	<p>【ESDとして獲得が期待できる力】</p> <ul style="list-style-type: none"> ⑤(音楽)文化の多様性を理解し、尊重する態度 <p>【授業で思考させるテーマ例】</p> <ul style="list-style-type: none"> 「世界の諸民族の楽器を1つ取り上げ、その地域の自然や風土などから、その楽器の音がそこで暮らす人々に好まれる理由を考え、発表してみましょう。」
自然音・環境音	<ul style="list-style-type: none"> 自然音・環境音の知覚・感受 	<ul style="list-style-type: none"> 自然音・環境音に対する多様な美意識の理解 自然音・環境音と音楽の関わりの理解 	<p>【ESDとして獲得が期待できる力】</p> <ul style="list-style-type: none"> ⑥音環境を保全していく態度 <p>【授業で思考させるテーマ例】</p> <ul style="list-style-type: none"> 「日本人が大切にしてきた音や音環境を調べてみましょう。そしてなぜ大切にしてきたのかを考え、これからは音環境を保全するために、私たちができることは何かを話し合ってみよう。」
音楽を形づくる要素、要素同士の関わり方とそれらの働きがもたらす質	<ul style="list-style-type: none"> 要素及び要素同士の関わり方に対する知覚・感受 	<ul style="list-style-type: none"> 客観的知覚と感受の両側面による音楽の認識 	<p>【ESDとして獲得が期待できる力】</p> <ul style="list-style-type: none"> ⑦音楽をはじめとする芸術作品などの抽象的な事物を客観的知覚と感受の両側面から認識できる力 ⑧事物や事象を客観と主観によって捉え、考える力 <p>【授業で思考させるテーマ例】</p> <ul style="list-style-type: none"> 「最近『美しい』と感じたモノやコトを取り上げ、なぜ『美しい』と感じたのか、その理由を述べ合ってみよう。」 「『客観』と『主観』という言葉の意味を調べ、身の回りにあるものを1つ選び、それについて客観と主観によって捉えた結果を語り合ってみよう。」

	要素と音楽全体の構成	音や要素の働きから生まれる様相の理解 ・要素間の関わりによって生まれる様相の理解 ・音楽の構成や展開の様相の理解	・部分と全体の両側面による音楽の認識	【ESDとして獲得が期待できる力】 ⑨音楽をはじめとする芸術作品などの抽象的な事物を、部分と全体の両側面から認識できる力 ⑩事物や事象を多面的・総合的に捉え、考える力 【授業で思考させるテーマ例】 ・「印象派の音楽と、印象派の絵画に共通するところはどこかを見つけ出し、発表してみよう。」 ・「いろいろなパートが組み合わさって美しさを生み出しているモノやコトを探してみよう。そしてどのような組み合わせ方かを感じたのか、発表してみよう。」
音楽によって喚起されるイメージや感情	要素や構造がもたらす曲想	・それぞれの音楽固有の表情や雰囲気などの感受	・曲想からみえる音楽の多様性の理解	【ESDとして獲得が期待できる力】 ⑪（音楽）文化の多様性を理解し、尊重する態度 【授業で思考させるテーマ例】 ・「いろいろな国の代表的な音楽を聴いて、表情や雰囲気を感じ取りましょう。そして、音楽の特徴について、その国に対するイメージなどと関わらせて考え、話し合ってみよう。」
音楽の鑑賞における批評	鑑賞によって得られる自己のイメージや感情	・音楽によって喚起される自己のイメージの創出と感情やその変化の自覚	・創出したイメージと自己の感情やその変化の音楽的要因の探索 ・音楽が人間の感情に変化をもたらし特質をもつものであることの理解	【ESDとして獲得が期待できる力】 ⑫自己のイメージや感情を他者に伝え、他者のそれを受け止めて互いに協調的なコミュニケーションを図れる力 【授業で思考させるテーマ例】 ・「人によって感じ方が大きく異なると思われる音楽や芸術作品を探し、皆に提示して感じたことを尋ね、その感想を共感的に受け止めて言葉で返してみよう。」
	音楽の鑑賞における批評	・イメージや感情の変化とその要因の言語化 ・価値判断の根拠となる音楽の認識とイメージや感情の変化の自覚	・客観的な根拠を講えた音楽の価値判断 ・価値判断した結果の表現	【ESDとして獲得が期待できる力】 ⑬音楽や芸術の本質（自分や社会にとっての価値）を積極的に考え、見抜き、その結果を語り合える力 ⑭音楽や芸術を含む様々な文化の創造と持続発展のために、的確な批評ができる力。 ⑮社会に存在する事物や事象の価値を的確に判断し、建設的に主張できる力 【授業で思考させるテーマ例】 ・「ベートーベンの『運命』が200年以上も演奏されている理由を考えてみましょう。また、最近生まれたJ-POPがこの先200年以上演奏され続けるかどうか、それぞれの音楽を批評しながら考え、発表してみよう。」 ・「友人や家族が好きな音楽を発表し、その作品を皆で鑑賞しながら、どのような価値を見出しているか話し合ってみよう。」 ・「私たちが音楽や芸術を鑑賞することに役割があるとしたらそれは何でしょう。話し合ってみよう。」

音楽の背景となる風土や文化・歴史など	人間と音楽との関わり	音楽とその背景にある風土・文化・歴史、人間との関わり ・音楽と背景にある風土・文化・歴史、人間との関わり ・音楽と背景にある風土・文化・歴史、人間との関わり	人間にとつての音楽の存在価値の理解 ・社会における音楽が果たす役割の理解 ・音楽文化を創造してきた人間の思考と理解	<p>【ESDとして獲得が期待できる力】</p> <p>①自分と音楽、人間と音楽との関わりに関心をもち、音楽文化を尊重する態度</p> <p>②音楽を「ヒースメイキング」⁽²⁰⁾として捉え、音楽が自分の生活や社会の健全化に貢献できることを理解し、そのために行動できる力</p> <p>③社会に存在する事物や事象の背景を洞察できる力</p> <p>【授業で思考させるテーマ例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「人はなぜ表現するのかを考え、話し合ってみよう。」 ・「心が傷ついた人々に勇気を与える音楽は、どのような要素によってつくられた音楽か、自分の経験をともに、音楽を聴いて確かめながら考え、話し合ってみよう。」 ・「知らない曲を皆で聴き、その作曲者の性格、育った環境、趣味などを想像し、理由とともに述べ合ってみよう。」 ・「世界で起こっている紛争や戦争をなくすために、音楽や芸術が果たせることを考え、話し合ってみよう。」
	他芸術と関わった総合芸術における音楽	総合芸術の理解	<ul style="list-style-type: none"> ・他芸術と関わる音楽が、人・モノ・コト・社会・自然とのつながり・ひらがりのもとに生まれた文化であることの理解 	<p>【ESDとして獲得が期待できる力】</p> <p>④総合芸術の多様性を理解し、尊重する態度</p> <p>【授業で思考させるテーマ例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「異なる文化を取り入れて新たな文化となった例を探し、発表してみよう。」
	様々な音楽がもつ固有性と共通する普遍性	我が国や郷土の伝統音楽、諸外国の様々な音楽に対する特徴の理解	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な音楽がもつ固有性と共通する普遍性の理解 	<p>【ESDとして獲得が期待できる力】</p> <p>⑤過去に築かれた音楽文化や伝統を尊重し、その持続発展に貢献しようとする力</p> <p>⑥自他国の音楽文化を理解し合うために交流できる力</p> <p>【授業で思考させるテーマ例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「長い歴史をもつ奈良市大柳生町の『太鼓踊り』を鑑賞し、毎年行われていた『太鼓踊り』が休止となった理由を考えてみよう。」 ・「伝統文化を継承・存続させるために、あなたや、地域の人々ができることは何かを考え、話し合ってみよう。」
音楽を共有する方法	音楽を共有するための音楽用語や記号	音楽用語や記号の理解	<ul style="list-style-type: none"> ・音楽用語や記号は、人間が時代や地域を超えて音楽を共有し、音楽文化の継承・発展を可能にさせるものであることとの理解 ・音楽用語や記号から作曲者の表現意図についての思考と解釈 	<p>【ESDとして獲得が期待できる力】</p> <p>⑦自他国の音楽文化を理解し、互いの文化の価値などを尊重し合いながら交流できる力</p> <p>⑧抽象化されたシンボルから具体、背景を想像する力</p> <p>【授業で思考させるテーマ例】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「語学を学ぶことと楽譜が読めるようになることとに共通することは何か、考えてみよう。」 ・「写真を見ることよりも地図を見ること、演奏を聴くことよりも楽譜を見ること、の両方に共通して育つ人間の能力は何かを考え、話し合ってみよう。」

4.2. 今後の課題

以下の5点が今後の課題となる。

第1は、表1に基づく授業実践と検証である。それを通してAdvanced Levelのさらなる精緻化と、実践から帰納されるESDの理論化を音楽教育の立場から進めなければならない。

第2は、Advanced Levelに対する評価の在り方の検討である。Advanced Levelは1時間の授業で実現が認められるとは限らず、また知識レベルではなく行動化されなければ実現は認められない。評価方法として、中学校3年間を見通したパフォーマンス評価やルーブリックの作成が必要になるものと予測する。

第3は、細分化された各々の指導内容についてではなく、それらが総体化されて育成される学力が持続可能な社会づくりに寄与する力とどう繋がるかも検討しなければならない。

第4は、表現領域についての検討である。ESDとしての音楽科教育の可能性を主張する時、本稿で扱った鑑賞領域のみでは不十分であることは言うまでもない。

第5は、インテグレーション・アプローチとして他教科や「総合的な学習の時間」との関わり、そしてホールスクール・アプローチとして学校全体の取組の中で音楽学習をどう関わらせていくかを検討しなければならない⁽²⁵⁾。ESDはシステムも含めて教育全体の改革を要請するものであり、この点も重要な課題であると考えられる。

注

- (1) 閣議決定(2013)「教育振興基本計画」, p.50
- (2) 文部科学省国際統括官付(2010)「持続発展教育(ESD)とは」『文部科学時報』, No.1608, p.23
- (3) 実践論文として報告されているものには、川合利幸(2009)「ESDをコンセプトにしたサウンドスケープへのアプローチ」『教育実践総合センター研究紀要』, 第18号, 奈良教育大学教育実践総合センター, pp.247-251や、川合利幸(2012)「ナントをイメージした韓国音楽の指導」『教育実践総合センター研究紀要』, 第21号, 奈良教育大学教育実践総合センター, pp.155-158がある。しかしこれらは、それぞれ「ESDをコンセプトにした」「ESDの理念にもとづいて」と述べられているが、その指導内容やゴールが明確ではなく、その実践によって獲得された学力が持続可能な社会づくりにどのように貢献するのかという指導がなされておらず、ESDが求める理念が果たされた実践にはなっていない。結果的に、従来のサウンドスケープや韓国音楽を扱う授業との差異が見られない。一方、平成24年度全日本音楽教育研究会全国大会で公開された中学校授業「日韓の伝統的な歌唱教育を互いに学び合おう」(長野市立裾花中学校)は、日本と韓国の授業をインターネットによる遠隔システムで同時接続し、韓国の中学生や演奏者とともに「アリラン」を、日本の中学生や演奏者とともに「さくらさくら」を歌い、双方で批評し合ったり感動を共有したりするものであった。この実践がESDであるのだという位置づけは見られなかったが、異文化理解としてESDの理念を十分に

果たすものであった(『溪声』(2013), 第61号, 長野県音楽教育学会, pp.44-47)。

- (4) 前掲書, (1), p.39
- (5) ESD-J(2006)「ESDがわかる!」(冊子)におけるワークシート(2006年1月版)より。
- (6) 国立教育政策研究所(2012)『学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究[最終報告書]』, p.9
- (7) http://www.unesco.org/new/fileadmin/MULTIMEDIA/HQ/CLT/CLT/pdf/Seoul_Agenda_EN.pdf(2013.4.30確認)。
- (8) 資料1は、宮下の翻訳によるソウル・アジェンダの全文と、宮下が各項目のキーコンセプトを検討し、併記したものである。
- (9) 「インフュージョン・アプローチ」については、五島敦子・関口知子(2010)『未来をつくる教育 ESD 持続可能な多文化社会をめざして』, 明石書店, pp.110-112を参照されたい。
- (10) 「音楽を形づくっている要素や構造と曲想とのかかわりを感じ取って(理解して)聴き、言葉で説明するなど(根拠をもって批評するなど)して、音楽のよさや美しさを味わうこと。」「音楽の特徴をその背景となる文化・歴史や他の芸術と関連付けて(関連付けて理解して)、鑑賞すること。」「我が国や郷土の伝統音楽及びアジア地域の諸民族の音楽(我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽)の特徴から音楽の多様性を感じ取り(理解して)、鑑賞すること。」()内は第2学年及び第3学年の3項目。
- (11) 「音色、リズム、速度、旋律、テクスチャ、強弱、形式、構成などの音楽を形づくっている要素や要素同士の関連を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じること。」「音楽を形づくっている要素とそれらの働きを表す用語や記号などについて、音楽活動を通して理解すること。」の2項目。
- (12) 文部科学省(2009)『中学校学習指導要領解説 音楽編』, pp.15-21
- (13) 同上書, pp.15-21の記述から抽出した。なお、[共通事項]に係る観点である、⑥音楽の構造の原理、⑦音楽的な感受、については、鑑賞領域に係る観点である、①音楽の素材としての音、②音楽の構造、③音楽によって喚起されるイメージや感情、の中に含まれるものとして捉えた。
- (14) 前掲書, (2), p.23に記載されている「学び方・教え方」でも、「単に知識の伝達にとどまらず、体験、体感を重視して、探究や実践を重視する参加型アプローチとすること」と示されている。
- (15) 前掲書, (6), p.6
- (16) 注(14)と同様。
- (17) 日本学校音楽教育実践学会編(2012)「ドイツベルリン州のカリキュラムと授業実践」『音楽科カリキュラムと授業実践の国際比較』, 音楽之友社, pp.123-152
- (18) 同上書, pp.130-131
- (19) ドイツベルリン州のカリキュラムと授業実践を検討した中島卓郎は、検討を踏まえて日本における音楽科の課題として「人間にとっての音楽、生活における音楽という視座からも児童・生徒が思考を深めていくこと」を挙げている(同上書, p.149)。
- (20) 前掲書, (17), p.148 ()内引用者
- (21) 前掲書, (17), p.133
- (22) 例えば、「第4回ユネスコスクール全国大会 持続発展教育(ESD)研究大会—ESDの実践上の課題解決に向

けて一」(2013)でのテーマ別交流会や、丸山秀樹氏の講演「E S Dのこれから『なんでもアリ』から基盤構築と意識化へ」(奈良教育大学附属中学校教育研究会(2012)にて)で指摘が見られた。

- (23) 奈良教育大学・吉村雅仁 企画・監修DVD『複言語活動のすすめ』を参考にした。
- (24) 千住博(2010)「芸術とは何か」『WEDGE』, 第22巻, 第10号, 株式会社ウェッジ, pp.56-57
- (25) 「インテグレーション・アプローチ」と「ホールスクール

・アプローチ」については、注(9)と同様。

本論稿は、平成24年度～26年度科学研究費補助金「E S Dを目指す高等学校芸術科音楽のカリキュラムと実践事例の開発」(研究代表者 宮下俊也、基盤研究(C)24531130)の助成を受けて行っている研究成果の一部である。

資料1 「ソウル・アジェンダ」の翻訳と各項目のキーコンセプト

Seoul Agenda: Goals for the Development of Arts Education (2010.7.13)		キーコンセプト
ゴール1	芸術教育を、質の高い教育改善を実現させるための基礎として、また持続可能性をもたせるものとして保障すること。	・教育改善と持続可能な芸術教育の重要性
1 a	芸術教育は、子どもや青年、生涯学習を受ける人々にとって、創造性、認識、感情、美的感性、社会性のバランスのとれた発達の基盤となるものであると断言する。	・芸術教育の理念
	(i) 政策及び(人的・物的)資源の配置を制度化・実施することにより、次の諸局面への持続的なアクセスを保障する。	
	(i)-1 -あらゆるレベルの学校で学ぶすべての学習者のための幅広く全体的な教育の一部として、すべての芸術領域における包括的な芸術学習。	・学校における芸術教育の普及
	(i)-2 -地域コミュニティにおける多様な学習者のための、あらゆる芸術領域にわたる学校外での体験。	・学校外における芸術教育の普及
	(i)-3 -学校内外における、デジタルや他の新しい芸術形式を含む学際的な芸術体験。	・学際的な芸術教育
	(ii) 創造性、認識、感情、美的感性、社会性といったそれぞれの成長発達による相乗効果を高める。	・芸術教育の理念の実現
	(iii) 芸術教育によって学習者の調和のとれた成長を保障するために、質の高い評価システムを確立する。	・芸術教育の評価システム
1 b	芸術教育を通して、教育システムと構造の建設的な変容を促進する。	・芸術教育を取り入れた新教育システムの構築
	(i) 芸術以外の学問分野において、芸術的、文化的側面を取り込んだ教育モデルの構築に取り組む。	・教育全般における芸術的・文化的側面の扱い
	(ii) 教師と学校管理者に対して、芸術教育を通して創造的な文化を築くよう促進する。	・芸術教育による学校文化の構築
1 c	芸術教育において、芸術教育について、そして芸術教育を通して、生涯にわたる世代間の学習システムを確立する。	・生涯教育としての芸術教育システムの確立
	(i) あらゆる社会的背景をもつ学習者が、幅広いコミュニティや制度的環境において、生涯にわたって芸術教育を受けることができるように保障する。	・生涯教育としての芸術教育の保障
	(ii) 年齢層が異なる集団の中で芸術教育を受ける機会を保障する。	・異年齢間における芸術教育の保障
1 d	(iii) 伝統的な芸術に関して知っておくべき事項を受け継いでいくために、年齢が異なる者同士の学習を助成し、世代間の理解を促進する。	・異年齢間と世代間学習による伝統的芸術の継承
	芸術教育を指導し、支持し、そしてその政策を進展させるための力量を確立する。	・芸術教育の指導者養成
	(i) 芸術教育の政策立案過程において、周辺に追いやられた人々や恵まれない人々の集団の参加を含み入れた新しい芸術教育の政策改革を実現していくことのできる実践者と研究者の力量を形成する。	・社会的マイノリティーに対する芸術教育研究と実践者の養成
1 d	(ii) 情報メディアとの関係を強化することにより、コミュニケーションと主張を拡充する。その際、意思疎通のために適切な言語を確立し、情報技術や仮想ネットワーク利用により国家及び地域における既存の構想を相互に結び付けていく。	・グローバルな視点を持つ芸術教育のためのコミュニケーションスキルの育成
	(iii) 芸術教育の価値に対する認識を高め、公的あるいは私的な場での芸術教育のサポートを促進するために、芸術教育が個人や社会にもたらす影響力を伝えていく。	・個人や社会に対する芸術の価値の認識と発信

ゴール2		芸術教育活動とプログラムは、理念的にも実践的にも、ともに質の高いものでなければならない。	・質の高い芸術教育プログラムの開発
2 a		地域のニーズ、社会基盤、文化的背景に対応し、誰もが合意した質の高い芸術教育のスタンダードを開発する。	・質の高い芸術教育のスタンダード開発
	(i)	学校やコミュニティにおける芸術教育プログラムを供給するために、質の高いスタンダードをつくる。	・学校や地域コミュニティにおける質の高い芸術教育のスタンダード開発
	(ii)	芸術教育に携わる教師やコミュニティにおけるファシリテーターに与える正式な認定資格を制定する。	・芸術教育の指導者の資格・認定の制定
	(iii)	芸術教育のために必要となる適切な設備や資源を提供する。	・芸術教育のための設備・資源の提供
2 b		芸術教育における持続可能なトレーニングが、教育者や芸術家、コミュニティにとって利用可能なものであることを保障する。	・芸術教育における教育者と芸術家の質保障
	(i)	持続可能な専門技術学習の仕組みを通して、学校の教員（芸術専門であるなしに関わらず）、また教育に携わる芸術家に、必要な技能と知識を提供する。	・教員の芸術的質保障、及び芸術家の教育的質保障
	(ii)	教員養成のカリキュラムや実習生の職能開発の中で、芸術の原理と教育実践の統合を図る。	・教師教育における芸術教育の原理と実践の統合
	(iii)	教育評価指導やメンタリングなど、教育実践の質のモニタリング手順の開発を通して、芸術教育のトレーニングの実施を強化する。	・芸術教育のトレーニング
2 c		芸術教育における研究と実践との往還を活発にする。	・芸術教育における研究と実践の往還
	(i)	芸術教育の理論と研究を世界的に支援し、理論と研究と実践を繋ぐ。	・芸術教育における理論と実践との融合
	(ii)	芸術教育研究において連携協力を促進し、情報センターや監視所のような国際的な組織を通して、模範となるような実践や研究を広めていく。	・芸術教育の管理と支援機関の役割
	(iii)	芸術教育がもたらす影響について質の高いエビデンスをまとめ、それを公平に広めていくことを保障する。	・エビデンスを携えた芸術教育の影響の候補
2 d		学校内外での芸術教育において、教育者と芸術家との協働を促進する。	・教育者と芸術家の協働の促進
	(i)	学校がカリキュラムに芸術家と教師との協力体制を積極的に取り入れようとすることを奨励する。	・学校教育における教育者と芸術家の協力体制の推進
	(ii)	地域コミュニティ組織が、様々な異なる学習環境での芸術教育プログラムにおいて、教師と協働することを奨励する。	・地域コミュニティにおける芸術教育への教師の参画
	(iii)	様々な学習環境の中で、保護者や家族や地域のメンバーを積極的に巻き込むような文化的プロジェクトを作り出していく。	・保護者や家族、地域メンバーによる文化的プロジェクトの推進
2 e		様々な利害関係者及び産業部門間で、芸術教育のための協力体制づくりを積極的に開始する。	・芸術教育のための異分野間協力体制づくりの開始
	(i)	社会における芸術教育の役割を強化するために、政府内あるいは政府の枠を超えて、特に、教育、文化、社会、保健、産業などの部門間でのパートナーシップを構築する。	・政治・経済界等の異分野組織との協働体制の構築
	(ii)	芸術教育の原理や、政策、実践を強化するために、政府、民間の社会組織、高等教育機関、専門的な学術団体の活動をコーディネートする。	・芸術教育推進のための官・民、教育研究機関等のコーディネート
	(iii)	財団や慈善団体などを含む私的な組織をパートナーとして、芸術教育プログラムの開発に巻き込む。	・私的組織との協働による芸術教育プログラムの開発

ゴール3	芸術教育の原理と実践を、今日の世界が直面している社会的・文化的な課題解決に貢献するために適用する。	・芸術教育の社会的・文化的貢献
3 a	芸術教育によって、社会が潜在的にもっている創造性や革新性を高める。	・芸術教育による社会的創造性や革新性への貢献
	(i) 学校やあらゆるコミュニティでの芸術教育によって、個人の中にある創造的でこれまでにない新しいことを生み出そうとする潜在能力を育成し、また、創造的な市民としての新世代を育成する。	・市民の芸術教育による創造性の育成
	(ii) 芸術教育によって、ホリスティック（包括的）な社会、文化的で経済力のある社会に寄与するような創造的で革新的な実践を促進する。	・芸術教育によるホリスティックで文化的経済的に高い社会づくりへの貢献
	(iii) クリティカルで創造的な思考の源として、コミュニケーションテクノロジーにおける新機軸を利用する。	・コミュニケーションテクノロジーの利用
3 b	芸術教育にある社会や文化の健全化を果たす特質を認識し、発展させる。	・社会や文化の健全性を果たす芸術教育の認識と発展
	(i) 芸術教育にある、以下のような社会や文化の健全化を果たす特質についての認識を促す。	
	(i)-1 - 広範にわたる伝統的・現代的芸術経験の価値	・伝統文化や現代芸術の価値
	(i)-2 - 芸術教育の療法や健康に関わる特質	・療法や健康に関わる特質
	(i)-3 - 文化の多様性や文化間の対話を促進するだけでなく、アイデンティティや遺産を発展させ保護することのできる可能性	・アイデンティティや文化遺産の発展と保護
	(i)-4 - 紛争や災害の後に、そこから回復させることのできる特質	・紛争や災害からの復興
	(ii) 芸術教育の専門家養成プログラムにおいて、社会や文化の健全化に関わる知識を身に付けさせる。	・芸術教育者養成における社会や文化の健全化の教授
(iii) 学習者の教育への参加を増大し、教育から落ちこぼれていってしまうことを減らすために、学習の動機付けのプロセスとして芸術教育を適用する。	・学習の動機付けのための芸術教育の適用	
3 c	社会的責任、社会的結束、文化的多様性、異文化間対話を促進する上での芸術教育の役割を高め、それらを支援する。	・芸術教育による異文化理解や異文化間交流
	(i) 学習者それぞれが持つ具体的な背景を理解することや、少数民族や移住者を含む学習者の地域との関連性に適応した芸術教育実践を促進することを優先する。	・学習者と地域の社会的背景の関連性に適応した芸術教育の促進
	(ii) 多様な文化的・芸術的表現についての知識や理解を促進し高める。	・異文化や芸術の多様性の理解
	(iii) 芸術教育のトレーニングプログラムを支援する中で、異文化間をつなぐ対話の技術、教授法、機材や教材を導入する。	・異文化間交流のためのスキルや教材等の提供
3 d	芸術教育を通して、平和から持続可能性に至る主要な世界的課題に対応する能力を育成する。	・平和や持続可能性に関わる世界的課題の克服への貢献
	(i) 環境、地球規模の移民、持続可能な開発など、広範囲にわたる現代社会と文化の問題を踏まえた芸術教育活動に焦点をあてる。	・芸術教育活動による現代社会が抱える問題へのアプローチ
	(ii) 芸術教育実践における多文化教育の側面を拡大し、世界的視野を持った市民性を育成するため、学習者や教師が異文化間交流することを活発にする。	・多文化理解や世界的視野の育成のための異文化間交流の推進
	(iii) コミュニティにおける民主主義と平和を推進し、紛争終結後の社会の再建をサポートするために芸術教育を適応する。	・芸術教育による平和社会の構築

ESD としての音楽鑑賞教育
— 指導内容と対応させた授業プランの開発と実践 —

宮下俊也
奈良教育大学
大熊信彦
群馬県総合教育センター
多賀秀紀
奈良女子大学附属中等教育学校

Music Appreciation Education through ESD
— Instruction Content and Development of Implementation Plan and Practice —

Toshiya MIYASHITA
Nara University of Education
Nobuhiko OHKUMA
The Gunma Prefectural Education Center
Hidenori TAGA
Nara Women's University Secondary School

Abstract

This paper proposes the development of a specific plan for instruction and practice through ESD (Education for Sustainable Development) for implementing music appreciation education in order to develop capable teachers for the 21st century.

Its objectives are as follows. First is the production of “A Guide to Music Appreciation Instruction through ESD” that aligns content instruction in music appraisal with the capabilities students are expected to acquire through ESD. Moreover, a second objective is to stimulate high school students’ thinking that is required to foster those capabilities. Furthermore, we hope to enhance music appreciation education through ESD in the future by formulating, putting into practice and testing a lesson plan based on this Guide.

Through these proposals, it is hoped that both teachers and students will become aware that the capabilities sought in learning music appreciation can contribute to the development of a sustainable society, and that this will encourage music departments to offer music appreciation classes aimed at the acquisition of “21st century skills.”

I 問題の所在

1. 背景

本論文は、21世紀を生きる人材育成に資する学校音楽教育の在り方を求める研究に位置し、その第1段階として ESD (Education for Sustainable Development = 「持続可能な開発のための教育」)¹⁾ による鑑賞領域の実践について論じるものである²⁾。

ESD が求めるものは、「現代的、社会的な課題に対して地球的な視野で考え、自らの問題として捉え、身近なところから取り組み、持続可能な社会づくり

の担い手」³⁾ として、「多様な人々とともに、対立や相互理解の難しさを超え、新しい価値の発見や創造ができ、また、当事者意識をもち、主体的に行動できる」⁴⁾ ために必要な資質能力・態度である。文部科学省はその具体として、「体系的な思考力」「持続可能な発展に関する価値観」「代替案の思考力」「情報収集・分析能力」「コミュニケーション能力」を掲げ⁵⁾、国立教育政策研究所も「批判」「未来」「多面」「伝達」「協力」「関連」「参加」をキーとする「ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度」の例を示

している⁶⁾。

これらは、21世紀を生き抜くために必要な資質能力と重なるものであり、音楽鑑賞教育においてもその育成に責任を果たす必要がある。しかしその先行実践はわずかであり⁷⁾、理論的研究や議論も活性化していない。またこの数年、ESDに関わる以下の重要な新しい教育政策が国内外において次々と出されているが、日本の音楽教育実践研究はそれに対応しきれていない状況も危惧される。

その第1は、ユネスコが2010年に採択した「ソウル・アジェンダ」(Seoul Agenda: Goals for the Development of Arts education = 「芸術教育の発展目標」)である。その中でESDに関わるゴール3「芸術教育の社会的文化的貢献」については、現行学習指導要領の内容に示されておらず、日本の音楽教育において欠如しているものである⁸⁾。

第2は、2013年に閣議決定された「教育振興基本計画」(第二期)である。音楽科に関わる事項としては、その基本施策2-6に「伝統・文化等に関する教育の推進」が示されているが⁹⁾、単に和楽器を演奏したり、伝統音楽を鑑賞したりするだけでは、そこに示されている「1. 社会を生き抜く力」「2. 未来への飛躍を実現する人材の養成」「4. 絆(きずな)づくりと活力あるコミュニティの形成」¹⁰⁾は実現できない。

第3は、21世紀に対応する資質能力育成を目指す国内外の潮流である。日本では、2013年に国立教育政策研究所によるプロジェクト研究が、「①思考力を中核とし、それを支える②基礎力と、使い方を方向づける③実践力の三層構造」で描いた「21世紀型能力」を提案した¹¹⁾。

世界においては、例えば米国ではすでに「21世紀型スキル」(21st Century skills)を、いわゆる3Rsに加え、「批判的思考力と問題解決」(Critical thinking and problem solving)、「コミュニケーション」(Communication)、「協同」(Collaboration)、「創造力と革新」(Creativity and innovation)の4Csとして示している¹²⁾。また芸術教育では「National Core Arts Standards」(NCAS)が出され、そこでは「Creating」「Performing/Presenting/Producing」「Responding」「Connecting」の4つの柱を立て、それぞれの定義付けを行っている¹³⁾。特に「Connecting」では「芸術的なアイデアや作品を、人間にとっての芸術の意味や芸術以外の物事と関連付けること」とし、ESD

が求める資質能力と重なる。さらに2014年6月4日には、音楽カリキュラム「New National Core Music Standards」が出されたが¹⁴⁾、そこでは各科目の下位に上記芸術教育の4つの柱を置き、さらにそれらの下位に計14項目を掲げ、それぞれに対する「永続的な理解」(Enduring Understanding)と「本質的な問い」(Essential Question)を掲げている¹⁵⁾。

これらより、米国の音楽教育もまた、イメージをもったり、音楽をつくったり、分析・評価したりすることの先に、ESDと重なる「21世紀型スキル」の獲得を身に付けさせようとする方向性が窺える。

2. 問題の確定

以上の背景より、日本における今後に向けての音楽鑑賞教育の問題を導くと次のようになる。

第1は、他の教科・領域、あるいは日本の学校教育全体とともに、音楽鑑賞教育もまた、ESDの視点をもって21世紀における持続可能な社会づくりに貢献する資質能力を育成していかなければならず、上述の教育政策からもその時代が確実に到来していることである¹⁶⁾。

第2として、そのためにはまず学習者に対して、音楽を、あるいは鑑賞を学習することが未来を生きていくためになぜ必要なのか、ということを確認に理解させる必要がある。2010年に国立教育政策研究所が公表した「特定の課題に関する調査結果」によれば、小学生の77.6%、中学生の79.5%が「音楽の学習が好きだ」と感じている反面、「音楽の学習が、将来の生活や社会に出て役立つ」と思っている小学生は59.3%、中学生は49.4%と落ち込んでいる¹⁷⁾。鑑賞学習に当てはめれば、何のために鑑賞するのか、何のために〔共通事項〕を学ぶのか、何のために伝統音楽を聴くのか、何のために批評文を書くのか、といった学びの本質的意義が理解されず、ただ楽しければよい、といった意識で授業を受けている現実が見える¹⁸⁾。それを、「この学習によって身に付けることは、21世紀の世界を生きるためにこういう点で必要なんだ」ということが明確に理解できるようにシフトしていかなければならない。これは「New National Core Music Standards」において「Enduring Understanding」が提示されたこととも共通する。

加えて第3に、教科指導におけるESDについての重要な問題を指摘しなければならない。ESDの実践

は、どの科目にも持続可能性に関わる課題を意識して授業を行う手法、すなわち「インフュージョン・アプローチ」と、複数科目の要素を統合した「インテグレーション・アプローチ」、学校全体で取り組む「ホールスクール・アプローチ」¹⁹⁾がある。しかし、音楽科としてのインフュージョン・アプローチ、すなわち、教科指導としてESDの視点をもった実践は極めて少なく²⁰⁾、音楽が関わるESDの実践事例の多くは「総合的な学習の時間」のようにインテグレーション・アプローチとして教科横断的に扱われている現状がある²¹⁾。環境、資源、平和、平等といった持続可能な社会づくりに関連するキーワードにアプローチする場合、インテグレーション・アプローチは必須となろう。しかしその前に、音楽科において求めるESDとは何か、そして、鑑賞指導によって求めるべき持続可能な社会づくりに貢献する学力とは何かを指導内容に関わらせて明確化させた授業を実践していく必要がある。その上で、そこで育成された学力をコアとして、インテグレーション・アプローチやホールスクール・アプローチへと同心円的に発展させていくことが重要であると考え²²⁾。

II 研究の目的と方法

1. 本論文に至る研究経緯 — 先行研究として —

以上の問題に対し、本論文に至るまでに以下を行ってきた²³⁾。

① ESDの定義についての検討。② 上に掲げた各種教育政策についての検討。③ ESDで求める学力、キー・コンピテンシーについての先行研究検討。④ 「中学校学習指導要領解説音楽編」に示されている鑑賞領域の指導内容とそれらによって求められる「ESDとして獲得を期待する力」、及び③との関連検討。⑤ 「ESDとして獲得を期待する力」を育成する方法として、「思考」を取り入れることの意義と可能性についての検討。⑥ 中学校鑑賞授業に組み込む「思考させるテーマ例」の検討。

これらにより、中学校音楽科における鑑賞領域の指導内容、ESDとして獲得が期待できる力、獲得までの段階、獲得のために思考させるテーマ例を一覧にまとめ、「ESDとしての音楽鑑賞指導ガイド(中学校版)」(以下、「中学校版ガイド」)²⁴⁾として提出した。

2. 本論文に係る研究の目的

上記の研究に続く本論文に係る研究目的は以下の通りである。

高等学校芸術科音楽における鑑賞領域の指導内容と「ESDとして獲得を期待する力」、及びそのために求める「思考させるテーマ例」を一覧にまとめた「ESDとしての音楽鑑賞指導ガイド(高校版)」(以下、「高校版ガイド」)と、「高校版ガイド」に基づく授業プラン「ESDとしての音楽鑑賞実践事例」の1つを開発し、実践とその結果の考察を通して、今後におけるESDとしての音楽鑑賞教育実践への示唆を導く。

3. 研究の方法

まず、高等学校学習指導要領芸術科音楽における鑑賞領域の指導内容を、同「解説」より抽出する。続いて、指導内容のそれぞれと研究経緯の④で確定した「ESDとして獲得を期待する力」を対応させる。さらに高校生に対してその実現を導くための「思考させるテーマ」を、筆者らを含む文部科学省教科調査官、指導主事、音楽科教員8名で構成する研究チームによって検討し、決定する。以上を一覧にまとめて「高校版ガイド」を作成する。なお、本論文では、「中学校版ガイド」で示した中学校指導内容との接続や、中学校の「思考させるテーマ」との関連が見えるよう、二つを合わせて一覧表として掲載する。それを「ESDとしての音楽鑑賞指導ガイド」(以下、「ガイド」)とする²⁵⁾。

次に、「ガイド」に基づく授業プランとして、高等学校芸術科「音楽I」の学習指導案を宮下、大熊、多賀によって作成し、多賀と宮下によって実践する。

最後に、本実践において求める「ESDとして獲得を期待する力」についての評価結果を検討し、本実践とその検討結果を踏まえて、今後への示唆を導く。

III 結果

1. 「ガイド」の作成過程と結果

高等学校学習指導要領芸術科音楽における鑑賞領域の指導内容を抽出した結果、「音そのものの質感」「我が国や諸外国の音楽における様々な声」「音楽を成立させる音楽の特性」他、13項目が得られた(表1参照)。また学習指導要領解説の記述より、それらによって求めるねらいも抽出した。例えば、指導内容「要素と音楽全体の構成」のねらいは「楽曲の構

成原理（要素）の知覚と感受」「構成原理がもたらす雰囲気や構成美の理解」26）である。

次に、ESD の概念、国立教育政策研究所（2012）が示した『持続可能な社会づくり』に関連する概念等』『持続可能な社会づくり』の構成概念の関係』『持続可能な社会づくり』の構成概念（例）』『生

きる力』と ESD で重視する能力・態度との関係』『ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度（例）』²⁷⁾、及びソウル・アジェンダから、抽出した各指導内容に対応するキーコンセプトを基に「ESD として獲得を期待する力」を導いた。その結果「中学校版ガイド」のそれと一致することが確認された。

続いて、各指導内容において「ESD として獲得を期待する力」を求めるための思考のテーマを検討し決定した²⁸⁾。決定のための条件は、指導内容に対する学習を基盤にして思考できるもの、「中学校版ガイド」にあるテーマより難易度が高く高校生の思考テーマとして相応しいもの、鑑賞活動と乖離せず思考の過程で鑑賞と思考が往還できるものとし、またドイツベルリン州の音楽カリキュラムにおいて重視されている思考の視点「先入観に打ち勝ち、自らの価値基準を育てる」²⁹⁾ ことに寄与するものという視点も、自分と音楽との関わりという点で加味した。検討の結果、全 18 テーマを決定した(表 1 参照)。

最後に、指導内容、ねらい、「ESD として獲得を期待する力」、「思考させるテーマ」を指導内容ごとに配列し一覧にまとめて「高校版ガイド」が作成された。表 1 は、「高校版ガイド」と「中学校版ガイド」を合わせてまとめたものである。

2. 「ESD としての音楽鑑賞実践事例」の立案過程と結果

次に、「ESD としての音楽鑑賞実践事例」について、その立案過程を述べる。

本題材で扱う指導内容は、「音楽によって喚起されるイメージや感情」とその下位に位置付く「鑑賞によって得られる自己のイメージや感情」を取り上げた。「ESD として獲得を期待する力」は、「ガイド」から「イメージをもって新たなもの、社会、時代をつくり出していくことの意味と実践力」、「思考させるテーマ」は②「イメージするという行為は、人間にとってどのような意味や重要性があるのかを考え、意見を述べ合ってみましょう。」を選択した。

「イメージをもって新たなもの、社会、時代をつくり出していくことの意味と実践力」は、国立教育政策研究所(2012)が示した「ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度(例)」の「未来像を予測して計画を立てる力」³⁰⁾に相当する。また前述した米国の「21 世紀型スキル」における「創造力と革新」、NCAS の「Connecting」に該当する。しかしそれを現行学習指導要領で求める「鑑賞の能力」と切り離して求めることは避け、「ドビュッシーの音楽表現について理解し、自分が抱いたイメージをもとに、『人間にとってイメージすることの意味と重要性』

について考え、述べることができる。」とする題材目標を設けた。指導計画のプロセスも、鑑賞学習の基礎となる鑑賞曲の特徴的な要素の知覚を基にイメージをもたせ、そのイメージとそれをもたらした要因とを理解させ、それを基に、ドビュッシーの表現意図や作品が人々に与えた影響を考え、最後に「人間にとってイメージすることの意味と重要性」を考え、述べさせる順序で構成した。

評価は、現行の鑑賞領域に関わる 2 観点の他に、「ESD として獲得を期待する力」に対する評価規準を設けた。「ESD として獲得を期待する力」は矢口(2010)が持続可能な社会を構築するために重要な推進方法として強調する「バックキャスト方式」によって形成していくことが妥当であると考えたからである。バックキャスト方式は「目標からみて望ましい方向に釣り上げる・目標から現在を振り返る」という立場を取り、目標は「方向目標」的な性格をもつものとする。現行の評価観点は、題材(単元)で掲げた目標に対してはその題材(単元)で実現を認めていくためのものであるが、「ESD として獲得を期待する力」は、その実現に向かって「ステップを着実にのぼる」³¹⁾ことで育成されるものとする。本題材で設定した評価規準「本学習内容と関わらせて、『人間にとってイメージすることの意味と重要性』について明確な意見を示している。」は、本題材でその実現への「1 ステップ」を見取る規準となる。よって、「ESD として獲得を期待する力(方向目標として継続的にアセスメントしていく観点)」として、他評価観点とは別に新たな枠組みを設けた。指導計画においては、この 1 ステップが実現できるよう②の思考の機会を設け、事前アンケートと第 3 時のワークシートとを比較して評価することとした。

実践は、奈良女子大学附属中等教育学校の第 3 学年音楽選択クラス³²⁾を対象に、2014 年 6 月 11 日・18 日・25 日に、第 1・2 時を多賀、第 3 時を宮下によって行った。

以下に、立案された「ESD としての音楽鑑賞実践事例」を示す。なお、「9. 題材の指導計画」の 7-2 は、実践前に作成した計画にはなく、実践後の検討を通して加えたものである。

ESD としての音楽鑑賞実践事例（高等学校芸術科「音楽 I」）

1. 題材名：「イメージすることの意味 ―ドビュッシーの作品を通して―」（全3時間）

2. 題材の趣旨：

「創造力」は、我が国においても世界においても、「21 世紀型能力」として今後の教育で育成する資質・能力の中核に据えられている。音楽教育において求める創造力は、単に音楽表現における創造性だけではなく、新しく、持続可能な社会、文化をつくり出していくことに寄与するイノベーション能力であり、音楽の認識を基盤に、音楽に対する思考力と感性を伴って育成される。また、創造力はイメージする力が源泉となる。これまでの音楽鑑賞教育においてもイメージをもつことは常に求められてきたが、それもまた、単に楽曲に対するイメージをもたせるだけの学習では、「21 世紀型能力」としての創造力育成は予定調和を期待するにとどまる。

本題材は、ドビュッシーの音楽鑑賞を通して、21 世紀を生きる上で「イメージすること」の意味と重要性について考え、自分なりの意見をもたせようとする。またそこでは鑑賞の原理に基づき、表現者（作曲家）のイマジネーションや革新性と、それによってもたらされた鑑賞者（自分を含めて）のイメージや感情の変化とを併せて考え、人間にとってイメージする力が持続可能な社会創造に寄与することを音楽鑑賞学習の基盤として据えさせたい。

3. 指導内容：

- ・音楽によって喚起されるイメージや感情 ―・鑑賞によって得られる自己のイメージや感情―

4. ESD として獲得を期待する力（「ガイド」より）：

- ・「イメージをもって新たなもの、社会、時代をつくり出していくことの意味と実践力」

5. 思考させるテーマ（「ガイド」より）：

- ・㊸「イメージするということは、人間にとってどのような意味や重要性があるのかを考え、意見を述べ合ってみましょう。」

6. 教材：

- ・ドビュッシー作曲 交響詩《海》より第2楽章《波の戯れ》
- ・ドビュッシー作曲 ベルガマスク組曲より《月の光》
- ・ドビュッシー作曲 前奏曲集 第1巻より《野を渡る風》
- ・エリック・カール著 もりひさし訳 絵本《うたがみえる きこえるよ》（偕成社）

7. 題材目標：

- (1) ドビュッシーの音楽表現、及びイメージを媒介とした「音楽と鑑賞者との関係」（ドビュッシーと自分→ドビュッシーと鑑賞者→音楽と人間）について興味・関心をもつ。
- (2) ドビュッシーの3作品についてのイメージとその要因を言葉で述べることができる。
- (3) ドビュッシーの音楽表現について理解し、自分が抱いたイメージをもとに、「人間にとってイメージすることの意味と重要性」について考え、述べることができる。

8. 評価規準：

評価の観点	評価規準	評価方法
音楽への関心・意欲・態度	関① 鑑賞曲に対してイメージをもつことに積極的に取り組んでいる。 関② ドビュッシーの表現や主張について、自分にもたらされたイメージをもとに積極的に考えようとしている。	発言 発言・WS
鑑賞の能力	鑑① 鑑賞曲に対してイメージをもち、それをもたらした要因を、音楽を形づくっている要素の働きから見つけ、イメージと要因とを関連付けて述べている。 鑑② ドビュッシーによる表現の特徴を理解している。	発言・WS WS
ESD として獲得を期待する力 (方向目標として継続的にアセスメントしていく観点)	E① 本学習内容と関わらせて、「人間にとってイメージすることの意味と重要性」について明確な意見を示している。	発言・WS

9. 題材の指導計画：

時	学習活動	指導・指導上の留意点	評価
1	<p>1. 絵から音をイメージする。</p> <p>1-1 『うたがみえる きこえるよ』の絵を見て音をイメージし、どのような音か、色彩や形等を根拠に言葉で述べる。</p> <p>2. 音楽から「見えるもの」をイメージする。</p>	<p>・述べられた音について、音の質感とそれ以外、それらの根拠、に分けて板書する。</p>	

	<p>2-1 《波の戯れ》の一部を聴いて、どのような風景が見えたか、イメージしたものを音楽の要素を根拠にして述べる。</p> <p>2-2 板書されたイメージのいくつかに注目して再度聴き、そのイメージをもたらした要因について確認し、共有する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・曲名は伝えない。 ・WSにメモを取りながら聴かせる。 ・述べられたイメージを板書する。 ・他者の意見もWSに分けて記入させる。 ・要因について板書追記する。 	関① 鑑①
<p>3. イメージは過去の経験を資源に描き出されることを理解する。</p>			
	<p>3-1 新たに遭遇した事物に対するイメージは、過去の経験と結び付いていることを確認する。</p> <p>3-2 再度聴き、板書されたイメージのいくつかは、過去のどのような経験から引き出されたものかを述べる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・色を見て、味、音、温度などがイメージされることを例に挙げる。 ・述べられた経験とイメージの関わりを板書で示す。 	
<p>4. 楽曲の音楽的特徴とイメージとの関連を理解する。</p>			
	<p>4-1 板書されたいくつかのイメージと、それらを引き出す音楽的要因として考えられる全音階や並進行する和音、形式などの音楽的特徴とを結び付ける。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノで全音階を弾き、《波の戯れ》で使われていることを確認させる。また、長音階や短音階と比較聴取する。 ・楽曲の構造がはっきりしている既習の曲を取り上げ、《波の戯れ》との構造の違いを確認させる。 	鑑②
2	<p>5. ドビュッシーの音楽表現について考える。</p>		
	<p>5-1 標題音楽と絶対音楽の意義(既習)について確認する。</p> <p>5-2 印象派の絵画を提示し、美術からの影響や印象派の音楽の特徴について整理する。</p> <p>5-3 作曲者の表現意図を観点に、《ブルダバ》と《波の戯れ》を比較しながら、ドビュッシーは《波の戯れ》によって何を表現したかったのかを考え、意見を述べる。</p> <p>5-4 《月の光》を聴き、《波の戯れ》との共通性を見つけ出し、この2曲から考えられるドビュッシーの音楽表現について考える。</p> <p>5-5 前時で学習した全音階や和音の扱いは、ドビュッシーの新しい表現のための方法であったことを理解する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・既習曲《ブルダバ》と《波の戯れ》はどちらも標題をもつ音楽であるが、この2つは一括りにできるものかどうか、聴きながら考えさせる。 ・新古典主義の画家ルイ・ダヴィッドの作品と、クロード・モネの作品を提示し、作風の違いに気付かせる。 ・風景を、単に写實的に描写するのではなく、印象やイメージを含み込ませて音楽で描写する表現方法に気付かせる。 	鑑② 関② 鑑②
3	<p>6. ドビュッシーの作品は、人々にどのような影響をもたらしたのかを考える。</p>		
	<p>6-1 西洋音楽の史的流れ、バロック→古典派→ロマン派→近現代のそれぞれの概略を、既習曲と関連付けて理解する。</p> <p>6-2《野を渡る風》を聴き、イメージしたものを根拠とともに述べる。</p> <p>6-3 曲名を知り、自分たちのイメージと表題との関連(共通・相違)について述べ合う。</p> <p>6-4 《波の戯れ》《月の光》《野を渡る風》の一部を再度聴き、作曲や演奏は、他者に向けて自分を表現する方法であることを理解する。その上で、ドビュッシーは人々に何を伝えようとしたのか、ドビュッシーの作品は人々にどのような影響をもたらしたのかを考え、意見を述べ合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・バロック、古典派、ロマン派の作曲家は何をどのような手法によって表現したのか概略を理解させる。 ・ベートーベンを例に、音楽の歴史は過去にない新しい表現を求めることで築かれてきたことを理解させる。 ・曲名は伏せて聴かせる。 ・ドビュッシーの表現と鑑賞者が受けるイメージを繋げる。 ・述べられた意見をもとに、以下の点を導く。 ① 見える風景を音楽によって表すことにより、ドビュッシー自身の風景に対するイメージや感情を表現しようとしたのではないか。 	関① 鑑① 関② 鑑②

		②そしてそれらを鑑賞者もまたイメージをもって聴き、そこからそれらを感じたり考えたりさせることを求めたのではないか。 ③そのために、それまでの手法を打ち破る	
	7. イメージするということは、人間にとってどのような意味や重要性があるのか、意見を述べる。		
	7-1 WS に記述する。	・本題材で扱った内容を踏まえさせるため、以下の条件を与えて記述させる。 <条件1> この3時間の学習を踏まえること。 <条件2> 以下の語句を使用すること。 ・ドビュッシー ・印象派(印象主義) ・《海》(《波の戯れ》)《月の光》《野を渡る風》の3曲名のうち一部、または全部。	E①
	7-2 各自が書いた記述内容を基に意見交流し、自分と他者の意見を確かめながら《波の戯れ》《月の光》《野を渡る風》を聴く。		

IV 考察 — 「ESD として獲得を期待する力」に対する評価を基に一

本題材における「ESD として獲得を期待する力」(「イメージをもって新たなもの、社会、時代をつくり出していくことの理解と実践力」)に対する評価は、「題材の指導計画」の7-1で書かせたワークシートの記述を中心に、事前に行ったアンケート「人が生きていく上で、イメージする力(想像力)は大切だと思いますか。その理由を述べなさい。」に対する記述との変容や、授業中の発言も交えながら、評価規準E①に即して解釈することで行った。

そのワークシートにおいて、「人間にとってイメージすることの意味と重要性」について意見を述べることができた生徒は33名中22名であった。うち11名は「自分が描いたイメージとその要因をもとに」それを述べていると解釈でき、評価規準E①に対して本題材においては「十分満足できる」ものとして認められた。紙幅の関係で、その11名のうち4名の記述を表2に掲げ、解釈結果を以下に述べる。なお表2の下線部(引用者)はイメージすることの意味・重要性について触れている部分である。

生徒Aは、目に見えない音楽から映像がイメージでき、そのことで「ハラハラするような気分になった」自分の感情の変化を述べている。さらにその経験を基にして、対人関係において、他者の見える表情から見えない心情を推察するためにイメージが参与するという意見を表明した。これは「21世紀型能力」の「③実践力」における「人間関係形成力」や、ESDによって期待する「コミュニケーション能力」

に関わるものであり、見えない芸術を対象とする音楽学習で得られた、持続可能な社会づくりに貢献できる資質能力の一つを意識化できたものと解釈する。また、前時で学習した全音音階の知覚とそれがもたらす波のイメージの感受、またその時の自分の感情の変化から、ドビュッシーも聴き手にそれを求めていたのではないかという考えが基になっていることがわかる。

生徒Bも、生徒Aと同様に他者の感情を推察できる力を挙げ、イメージをもつことによって他者の感情をより具体的に推察できると述べている。絵から音をイメージする学習部分(同1-1)において、「丸いところから…(絵をさしながら)、月みたいな図形がたくさん出ているところから感情があふれ出るような音を感じた」と発言し、《波の戯れ》の鑑賞(同2-1)では、冒頭の音の音色の知覚から「見知らぬ世界に迷い込んだ感じ」、強弱の激しさの知覚から「月夜で湖のある森。小さい羊飼いの男の子が角笛を吹いている」とイメージを描いて感受していた(第1時のワークシートより)。このことから、ドビュッシー作品、提示した絵のそれぞれを構成する要素の知覚とその具体的な感受が、このような意見をもたらしたものと考えられる。

生徒Cは、イメージが創造性に関わることを述べている。同じ曲においても人それぞれ描くイメージは異なるということ、また作曲家もイメージから新しい音楽を創造していることを踏まえ、創造性は個性と関係し、その個性が新しい考えを生み出すことから、創造の源泉としてイメージする力の重要性を

表明している。前掲した「教育振興基本計画」においても「更なる新たな価値を創造していくことのできる生涯学習社会」の構築の旗印として「創造」を示している³³⁾。言うまでもなく音楽教育は創造性の育成に資するものであるが、このように、学習者自身が音楽学習を通して創造性について確かな実感をもてたことは、ESD としての本学習によって、創造的で持続可能な社会づくりのためにイマジネーションと創造性が貢献するという理解の前提を築けたものとする。

生徒Dは、イメージをもつことによって「新しい世界へ踏み出す手助けになる」と述べている。「その人（聴いている人）が求めていたものが自分の中におりてきて」という記述は、本学習において積極的

にイメージを描こうとする能動的な楽曲との対峙により得られた実感からであろう。そして、自分も含め感受の仕方は様々であるという学習経験（同2-2）から「人それぞれ感じ方（とらえ方）が違うけれど」という記述が生まれ、音楽に対する感じ方は人それぞれ異なるが、そのそれぞれが、人々の生きる活力になることを主張できている。「生きる」ということと音楽との関係についての理解を示すものである。

以上、この4名とも、学習前のイメージをもつことに対する考えは一般的な見解であったが、本学習を経て、その考えが学びを踏まえたより説得性のある独自の意見となって表れており、変容が認められた。

表2 事前アンケートとワークシートの記述

	事前アンケート記述	7-1のワークシート記述
生徒A	決断のときに役に立つ。	たとえば、『海』では、流れる波のような音の並びから海が想像できた。またそれと同時に、少しハラハラするような気分になった。ドビュッシーは、音楽から人の気持ちや思いを想像させ、景色を見せたかったのではないかと。 <u>このようにイメージすることによって、目には見えないものを感じ取るセンスを身につけることができるのではと思う。たとえば、親しい人とケンカをしてしまったとき、その人がどんなにやさしい顔をしていても、本当は怒っているかもしれない。そんな相手のピリピリした雰囲気を少しでも感じ取れるようになるのではないかと思う。</u>
生徒B	想像する力は単に心を休めておだやかにする力があると感じるから。想像力は人間関係をよくしたりとか生活上役に立ちます！	<u>「イメージする」、それは人の感情を知るのに意味があると思う。しかし、ただ「うれしい」「かなしい」ではなく、「どんなふうか」という部分がわかる気がする。</u> (ドビュッシーの)3曲を聴いたとき、情景は浮かんだが、特に《月の光》は、月の光の優しい光と、女の子の優しい気持ち、また、それは弟や妹かもしれないし、誰かへの優しさだと感じた。
生徒C	生活する上で重要なスキルだと思う。楽しく生きられるから。	一人一人イメージするものは違う。それは個性だが、だいたいすることというのは決まってくる。その中でいかに新しい考えを生み出すかが重要だと思う。 <u>ドビュッシーや印象派の人々、ベートーベンも新しい音楽を「イメージ」してきた。したがって、「イメージする」ということは、人間に新しいものを与えるチャンスだと思う。そのチャンスをいかに生かすかが人間にとって「イメージする」ことの重要性なのだと思った。</u>
生徒D	いいイメージをすることによって、何かにおいていい結果になったりするから(例えば試合に勝つ光景をイメージしたら勝ちやすいとか)。イメージすると人生がより楽しくなると思う。	<u>新しい世界へ踏み出す手助けになると思う。</u> 授業でやったように、ドビュッシーの『海』とかは、人それぞれ感じ方(とらえ方)が違うけれど、その人(聴いている人)が求めていたものが自分の中におりてきて、それによって勇気をもたらったりできたら、新しい世界へ1歩踏み出せる気がする。

V まとめと今後の課題

「ガイド」に基づく実践授業、及びそこでの「ESDとして獲得を期待する力」に対する評価結果の考察を通し、今後におけるESDとしての音楽鑑賞教育実践への示唆を述べる。

第1は、現行学習指導要領の指導内容とESDが求める「能力・態度」³⁴⁾との繋がりが導けたことで、

音楽科においてもESDの視点をもって授業計画が立案できることがわかった。そのことは、現況に見られるような「総合的な学習の時間」に音楽活動を組み込んで、それをもって「ESDとしての音楽教育」とすることとは異なる、教科指導としての「インフュージョン・アプローチ」の実現可能性を意味する。ESDの視点をもつ、とはどういうことか。それは音

楽科の指導内容一つ一つを、持続可能な社会づくりに貢献するために必要な資質能力、言い換えれば、21世紀を生き抜くために必要な資質能力の育成と捉えて教育していくことである。そのうち、鑑賞領域における「ESDとして獲得を期待する力」を「ガイド」によって示したが、現行学習指導要領における指導内容からそれを導けたということは、ESDとして求める内容が、すでにその指導内容に潜在しているということである。しかしそれにもかかわらずESDの視点をもった実践がなされていないということは、指導者がその存在について無意識であったためと考えられる。それを意識化させるためにも、本研究で行った「ESDとして獲得を期待する力」の顕在化が必要であった。よって、ESDの視点をもつということは、「ガイド」によって顕在化させた「ESDとして獲得を期待する力」を意識して実践する、ということになる。

第2は、学ぶ意味として、学習者に対しても「ESDとして獲得を期待する力」を示し、理解を図っていくことである。本実践では、音楽の学習が、将来の生活や社会に出て役立つかどうかは直接的には問わなかったが、本授業クラスにおける11名は、音楽鑑賞学習を基盤に、鑑賞でイメージすることの意味を超えて人生の中でイメージすることの意味を理解できたものとする。音楽科で育成されたイメージをもつ力が、今後、イメージをもつことによって持続可能な社会の創造に寄与することへと繋がることを学習者に理解させることが重要であり、21世紀に対応する音楽科教育の新しい理念の構築にも繋がる。

第3は、「ESDとして獲得を期待する力」は、ある1つの題材のみによってではなく、バックキャスト方式で育成され、その目標は「方向目標」として据えるべきものと考えられる点である。本授業において実現が認められた11名についても、本授業ではその理解が得られたが、それがここで確実に定着されたものであるとは言い切れない。これに続く他の題材によっても第2ステップ、第3ステップ…として求め続けることにより、徐々に定着していくものだろう。表1の「ガイド」を中・高等学校を接続させて提示した意図もそこにあり、「関心・意欲・態度」と同様、ESDとしての力もアセスメントを複数題材や複数学年間にわたって継続的に行っていくという評価観が必要になる³⁵⁾。

今後は、「ガイド」に基づいて、すべての指導内容に対応する「ESDとしての音楽鑑賞実践事例」を作成することと、表現領域についても本研究と同様な開発を行って教育現場に提供していきたい。またその実践に対するアクションリサーチを重ね、「ガイド」の妥当性と信頼性を高めると同時に、ESDとしての音楽科教育の理念、内容、方法、評価の理論構築を目指さなければならない。

注

- 1) ESDの訳語については、文部科学省国際統括官付文書「Education for Sustainable Development (ESD)の訳語の取扱いについて」(文部科学省国際統括官付 平成25年5月2日 教委129-12)に従い、「持続可能な開発のための教育」と記す。
- 2) 領域別に論究することが適当と判断した。第2段階は表現領域を扱う予定である。
- 3) 閣議決定(2013)「教育振興基本計画」, p. 50
- 4) 多田孝志(2010)「学校におけるESDの進め方」『中等教育資料』, No. 895, 文部科学省, p. 22
- 5) 文部科学省国際統括官付(2010)「持続発展教育(ESD)とは」『文部科学時報』, No. 1608, 文部科学省, p. 23
- 6) 国立教育政策研究所(2012)『学校における持続可能な発展のための教育(ESD)に関する研究〔最終報告書〕』, p. 9
- 7) 例えば、埼玉県立総合教育センター(2014)が作成・実践・検証を行った2事例(「和音の美しさを味わおう」(小学校第5学年)、「曲の雰囲気を感じ取ろう」(中学校第1学年)「持続可能な開発のための教育(ESD)の実践に関する調査研究」『研究報告書』, 第374号, pp. 23-29, pp. 56-60)、及び、第56回近畿音楽教育研究大会で実践された「文楽の魅力」(中学校2学年)。
- 8) 「ソウル・アジェンダ」については、宮下俊也・大熊信彦(2013)「ESD(持続発展教育)としての音楽科教育—中学校鑑賞領域の場合—」『奈良教育大学紀要』, 第62巻, 第1号, pp. 216-218に邦訳が掲載されている。
- 9) 前掲書, 3), p. 39
- 10) 同上書, p. 15
- 11) 「21世紀型能力」の三層構造は、国立教育政策研究所(2013)「社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則」『教育課程の編成に関する基礎的研究 報告書5』, 平成24年度プロジェクト研究報告書,

- p. 26、文部科学省（2014）「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会—論点整理—」, p. 11 に掲げられている。
- 12) 「Partnerships for 21st Century Skills」
<http://www.p21.org/index.php> (2014. 10. 30 確認)
- 13) <http://nationalartsstandards.org/> (2014. 10. 30 確認)
- 14) <http://musiced.nafme.org/musicstandards/>
 (2014. 10. 30 確認)。
- 15) 例えば、「Connecting」の下位にある「Connect #11」の「Enduring Understanding」は「音楽と、多様な背景や日常生活とのつながりを理解することは、創造的な音楽表現や音楽に対する反応を向上させる」、「Essential Question」は「他の芸術、他の学問、背景、日常生活がどのように創造的な音楽表現や反応に関わっているか?」と示されている。
- 16) 2014年11月には「ESDに関するユネスコ世界会議」が日本で開催され、今後への後継プログラム「ESDに関するグローバル・アクション・プログラム」(GAP)が公式に発表される。また、2014年10月8日の参議院予算委員会では、安部晋三内閣総理大臣がその世界会議への決意を述べ、下村博文文部科学大臣は、今後も引き続き ESD の促進のための施策充実に取り組み、すべての小中学校で何らかの形で ESD の実践をしていくことが課題であると答弁している。
- 17) 国立教育政策研究所教育課程研究センター（2010）『特定の課題に関する調査（音楽）調査結果（小学校・中学校）』, p. 95, p. 219
- 18) 田村哲夫は、「今の教育で一番足りないのは、目的です。何のために勉強するのだという部分が欠落しているのです。人間は何のために生きているのか。それを考えるには、ESD は原点です」と述べている（前掲書 5）, p. 22)。
- 19) 五島敦子・関口知子（2010）『未来をつくる教育 ESD 持続可能な多文化社会をめざして』, 明石書店, pp. 110-113
- 20) 前掲 7) の 3 事例はいずれもインフュージョン・アプローチである。
- 21) 例えば、ユネスコスクールで多く作成されている「ESD カレンダー」等より。
- 22) このことは、「『21 世紀型能力』は、個別の教科ではなく、学校全体を通して育成することが期待される力である」（前掲 11）、国立教育政策研究所（2013）, p. 31) と同一見解である。
- 23) 以下は、宮下俊也（2013）「ESD（持続発展教育）としての音楽鑑賞教育の可能性」『学校音楽教育研究』, 日本学校音楽教育実践学会紀要, Vol. 17, pp. 254-255、大熊信彦・宮下俊也（2014）「ESD（持続発展教育）としての音楽鑑賞教育—高等学校芸術科音楽において—」『学校音楽教育研究』, 日本学校音楽教育実践学会紀要, Vol. 18, pp. 223-224、前掲 7) の宮下・大熊（2013）にまとめられている。
- 24) 宮下・大熊（2013）では、「中学校音楽科鑑賞領域の指導内容により ESD として獲得が期待できる力・獲得までの段階・獲得のために思考させるテーマ」と命名している。しかし、本論文研究で作成しようとする「高校版」と対応させるため、「ESD としての音楽鑑賞指導ガイド(中学校版)」とした。
- 25) 「ガイド」は、中学校以上を対象としているが、小学校との接続については今後改めて検討する必要があると考えている。
- 26) 文部科学省（2009）『高等学校学習指導要領解説芸術（音楽 美術 工芸 書道）編 音楽編 美術編』, p. 22, p. 36, p. 43
- 27) 以上、前掲書, 6), pp. 4-9
- 28) 思考を方法として用いる理由は、前掲書 23)、宮下・大熊（2013）に示している。
- 29) 日本学校音楽教育実践学会編（2012）「ドイツベルリン州のカリキュラムと授業実践」『音楽科カリキュラムと授業実践の国際比較』, 音楽之友社, p. 129 (中島卓郎執筆)
- 30) 前掲書, 6), p. 9
- 31) 以上、矢口克也（2010）『「持続可能な発展」理念の実践過程と到達点』『持続可能な社会の構築 総合調査報告書』, 国立国会図書館調査及び立法考査局, pp. 35-37 より。バックキャスト方式の詳細は同文献を参照されたい。
- 32) 中高一貫である中等教育学校により、教育課程上、高等学校芸術科「音楽 I」に位置する。
- 33) 前掲書, 3), pp. 5-6
- 34) 前掲書, 6), p. 9
- 35) 「21 世紀型能力」として育成する資質・能力目標のうち、発達の段階に従って割り振ることに相応しくないものがあるとすれば、学年にこだわらず、繰り返し育成すべきことになる、とする見解もある（前掲 11）、国立教育政策研究所（2013）, p. 31)。

付記

本研究は、JSPS 科研費(24531130)の助成を受けて行った。本稿は、日本学校音楽教育実践学会第 19 回全国大会自由研究で口述発表したものをまとめ、加筆したものである。

おわりに

本研究の第2年次、平成25年度は、プロ野球、東北楽天イーグルスが念願の日本一に輝いた年でした。東日本大震災の後、「東北の底力」を見せようという強い明確な意志をもって掴み取った優勝でした。東北の被災者に少しでも癒しや元気を与えるためには、勝つこと、そのためには個人の力量を高めること、そのためには日々の練習を積み重ねること、という「究極の目標」へつながる階段が、すべての選手にはっきりと意識されていたのではないのでしょうか。

ESDとしての音楽鑑賞教育を考えることは、プロ野球選手が練習することの意味と等しく、鑑賞教育の意味そのものを考えることでもありました。鑑賞教育が目指す究極の目標は、持続可能な社会づくりに貢献できる人材の育成であると、今、私は確信しています。

芸術教育として、音楽鑑賞教育の成果が持続可能な開発に寄与する点は、多様な音楽文化を理解して、文化の持続と創造的発展を世界の人々とともに果たせることのできる人材を育成することだと思います。そう述べると、世界をまたにかけて活躍できる人材の育成かと思われるかもしれませんが、たとえ平凡な毎日を送る人生であっても、自分やまわりの人々が幸せに暮らせるために、文化に触れ、日々の生活の中でたえず創造的なまなざしをもち、考え、他者と協働し、行動できる人を育てることです。

〔共通事項〕も伝統音楽も、鑑賞教育のすべてがそのことにつながっていることは、本研究で明らかにしたところです。このガイドブックによって、これからの音楽鑑賞教育が果たすべき目的が教師にも生徒にも意識化され、成果を残し、学校における音楽教育が、資源のない日本においてどれだけ重要であるかを、教育現場の先生方の声とともに主張できるようになることを強く望んでいます。

最後になりますが、この研究にあたり、多くの先生方からのご指導、ご尽力をいただいたことに感謝申し上げます。国立教育研究所のESD研究プロジェクトメンバーであられた福山市立大学教授の田淵五十生先生には、研究計画と研究途上の論文をお読みいただき、励ましのお言葉をいただきました。研究分担者の大熊信彦先生、臼井学先生には、行政の立場から私の気付かなかったことを的確に指摘してくださいました。研究協力者の島田聡先生、多賀秀紀先生、水口俊彦先生、宮本由紀乃先生、山内尚先生には、現場経験をもとにしたリアリティある実践事例を作成していただきました。原田博之先生には、声楽家のお立場から表現することについてのご教示をいただきました。ありがとうございました。

今後、多くの方々にこのガイドブックをお読みいただき、実践され、さまざまな視点から忌憚のないご意見、ご助言を賜ることができれば、この上ない幸せです。

平成27年（2015年）3月

研究代表者 奈良教育大学大学院 教育学研究科 教授 宮下 俊也

付 録

1. 交付決定額（配分額）

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 24（2012）年度	700,000	210,000	910,000
平成 25（2013）年度	400,000	120,000	520,000
平成 26（2014）年度	1,800,000	540,000	2,340,000
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

2. 交付期間内における研究成果の発表（研究代表者・研究分担者）

大熊信彦（2012）「新教育課程の趣旨を生かした指導と評価の実践課題」『季刊音楽鑑賞教育』，第9刊，公益財団法人音楽鑑賞振興財団，pp. 42-45

大熊信彦・宮下俊也（2013）「ESD（持続発展教育）としての音楽鑑賞教育の可能性」『学校音楽教育研究』，日本学校音楽教育実践学会，Vol. 17，pp. 254-255

宮下俊也（2013）「鼎談 鑑賞指導の充実に向けて－作曲家と研究者の視点から－」『初等教育資料』，文部科学省，No. 905，pp. 52-57

宮下俊也・大熊信彦（2013）「ESD（持続発展教育）としての音楽科教育－中学校鑑賞領域の場合－」『奈良教育大学研究紀要』，第62巻，第1号，pp. 207-218

大熊信彦（2013）「『従前の授業で大切にしてきたこと』と『これからの授業で大切にしたいこと』」『季刊音楽鑑賞教育』，第13刊，公益財団法人音楽鑑賞振興財団，pp. 40-43

宮下俊也（2014）「音楽を学ぶことの意味－ESD として鑑賞指導が目指すもの－」『学校教育』，広島大学附属小学校学校教育研究会，No. 1158，pp. 12-17

宮下俊也（2014）「ESD（持続発展教育）としての音楽鑑賞教育－高等学校芸術科音楽において－」『学校音楽教育研究』，日本学校音楽教育実践学会，Vol. 18，pp. 223-224

宮下俊也（2014）「平成 25 年度文化庁地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ事業 外部評価報告」『音楽芸術による文化環境高度化と地域コミュニティ活性化事業－音楽と科学の旅－報告書』，pp. 26-28

大熊信彦（2014）「子どもたちが『学校で音楽を学ぶことの大切さ』を実感できる授業」『季刊音楽鑑賞教育』，第17刊，公益財団法人音楽鑑賞振興財団，pp. 54-57

宮下俊也・大熊信彦・多賀秀紀（2015）「ESD としての音楽鑑賞教育－指導内容と対応させた授業プランの開発と実践－」『学校音楽教育研究』，日本学校音楽教育実践学会，Vol. 19，pp. 39-50

平成 24～26 年度科学研究費補助金・基盤研究（C）研究成果報告書

ESD としての音楽鑑賞授業 実践ガイドブック
「ESD としての音楽鑑賞指導ガイド」（中学校音楽・高等学校芸術科音楽編）
授業実践事例（高等学校芸術科音楽編）

平成 27 年（2015 年）3 月 15 日 印刷

平成 27 年（2015 年）3 月 31 日 初版第 1 刷発行

平成 27 年（2015 年）8 月 10 日 初版第 2 刷発行

発行者

奈良教育大学大学院教育学研究科 宮下 俊也

〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学（教職大学院）

E-mail miyashit@nara-edu.ac.jp

TEL & FAX 0742 (27) 9214

